松浦市文化財調査報告書 第６集

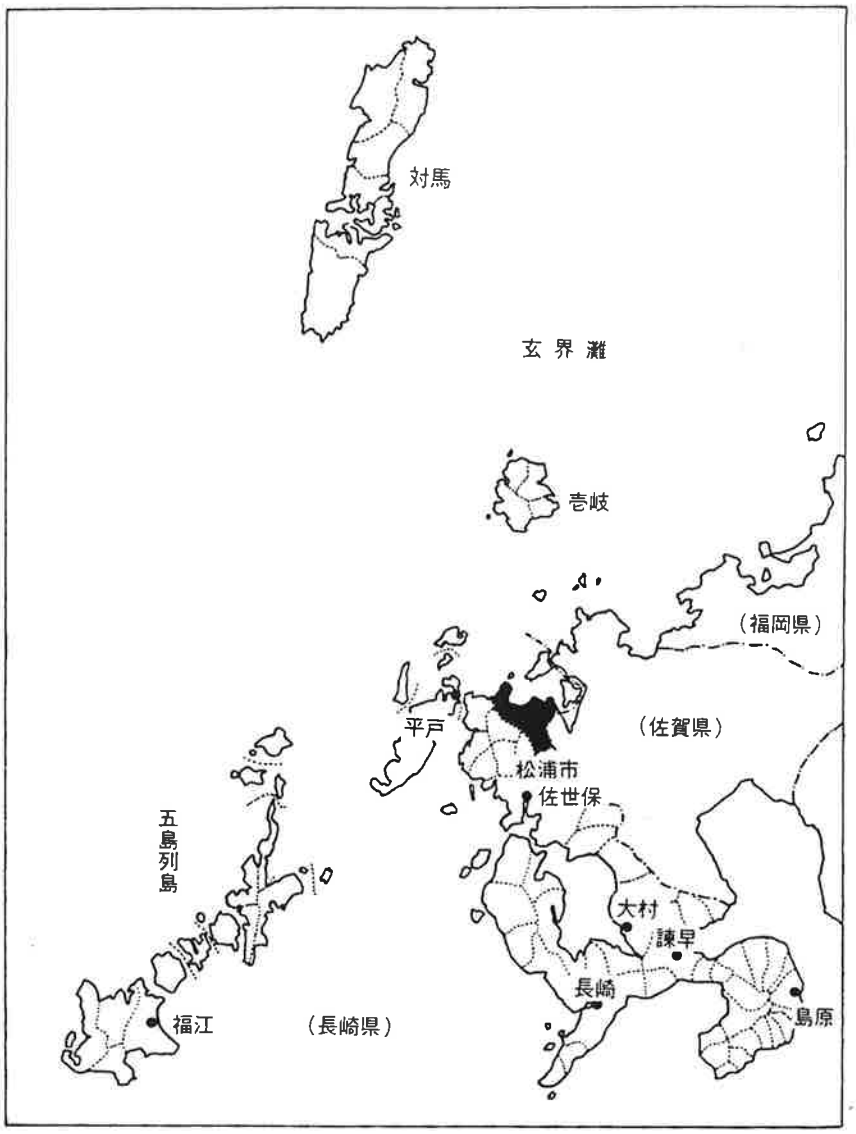
池田遺跡

1990

長崎県松浦市教育委員会

松浦市文化財調査報告書 第６集

池田遺跡



長崎県松浦市教育委員会

発刊にあたって

わたしたちが住む松浦市は、青い海と緑の自然に囲まれた環境にあり、原始・古代より人々が住みつき豊かな生活を営んできました。また、古くから大陸との交流関係をうかがわせる遺跡も数多く知られています。なかでも舶載の青銅鏡が出土した栢ノ木遺跡、中国産の陶磁器が数多く出土した楼楷田遺跡などはその代表的な遺跡といえます。このように松浦市には貴重な文化財が数多く残されています。各種の文化財は貴重な財産であり、後世に伝えることはわたしたちの責務でもあります。

今回の報告書は、昭和63年度と、平成元年度の国庫および県費の補助を受けて実施した松浦市御厨町池田遺跡の範囲確認の調査結果についてまとめたものであります。報告書の内容にみられますように本遺跡は、縄文時代から弥生時代にわたる遺跡として、きわめて重要なものであることが知られてまいりました。また、旧石器時代から縄文・弥生・古墳、さらに鎌倉・室町時代にわたる複合遺跡であること、概ね遺跡分布の範囲も確認することができ多くの成果を得ることとなりました。一方では遺跡の大部分がまだ地下に埋蔵されていることも判明いたしましたので、今後は、本遺跡の取り扱いにつきましては、開発と保存の調整を図るため極力慎重に関係方面と協議してまいりたいと考えております。

本調査は、関係者のご理解と多くの方々のご協力、ご参加を得て実施することができました。特に大切な畑地の発掘を心より了承して下さった土地所有者の方々に心から深く感謝を申し上げます。

本書は、調査の概要をまとめたものですが、学術研究に少しでも寄与でき、市民の皆様が埋蔵文化財に対して理解をしていただくうえでお役に立てれば幸いと存じます。

平成２年３月

松浦市教育委員会

教育長　呼　子　俊　一

例　言

1．本書は、昭和63年度から平成元年度にかけて実施した長崎県松浦市御厨町里免205番地ほかに所在する池田遺跡の範囲確認調査報告書である。

2．調査は、国庫および県費補助を受けて松浦市教育委員会が実施した。なお、調査にあたっては長崎県教育委員会の指導を受けた。

3．本書は、膨大な出土遺物の量に対して、整理期間の不足から図録編的な体裁を取らざるをえなかったが、調査に従事したものとして、本遺跡の詳報についてその責に任じるものである。

4．調査は主として社会教育課の中田敦之があたり、県文化課副島氏に直接協力をいただいた。調査の写真撮影および整理後の遺物の写真撮影は中田があたった。

5．本書の作成にあたっては、県文化課の御協力を賜った。

6．本書の執筆・編集は、中田があたった。なお、自然遺物の獣骨・魚骨・貝類についての同定は、今後専門の研究者の方々に協力をお願いしたいと考えている。

7．遺物写真の縮尺は、土器・石器は$\frac{1}{2}$、石鏃等については$\frac{2}{3}$を原則とした。

8．調査により出土した遺物は、松浦市教育委員会が保管の任にあたっている。

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに …… 1
　1．調査に至る経過 …… 1
　2．調査関係者 …… 2
　3．遺跡の立地と環境 …… 2
　4．周辺の遺跡と歴史的環境 …… 4
Ⅱ．調　　査 …… 8
　1．昭和63年度の調査の概要 …… 8
　2．平成元年度の調査の概要 …… 9
Ⅲ．土層および遺構・遺物 …… 10
　1．A地点の土層および遺構・遺物 …… 10
　2．B地点の土層および遺構・遺物 …… 38
　3．C地点の土層および遺構・遺物 …… 81
　4．D地点の土層および遺構・遺物 …… 90
　5．E地点の土層および遺構・遺物 …… 95
Ⅳ．ま　と　め …… 103

Ⅰ　はじめに

1．調査に至る経過

池田遺跡は、かつてよりその存在が知られていたが、採集資料だけで詳細な規模・範囲等については明確ではなかった。また、遺跡名も報告者によって御厨貝塚・池田下・池田免田崎遺跡の名称が用いられており、長崎県遺跡地図では52―41池田遺跡で整理されているため、報告書名も『池田遺跡』を用い、報文中にもこの名称で統一している。

池田遺跡の発見は、古く大正14年、当時の長崎医大生理学教室の前田毅氏による。前田氏は同年10月の『人類学雑誌第40巻第10号』に「肥前御厨貝塚発見報告」と題して紹介している。同報告には、「貝塚および遺物包含地の一部を発掘して弥生式土器破片、打製撥形石斧、石鏃、骨器猪牙、獣骨片等を得た。」とある。その後の本遺跡については、昭和25年京都大学の平戸学術調査団の『平戸の先史文化』がある。同報告によると考古班の活動の一部として、池田下（御厨貝塚）遺跡の確認と試掘調査が行われている。この試掘において得る所は少なかったが、周辺の畑地から採集された遺物が記載されている。それによると縄文・弥生時代から中世の時期の遺物まで認められる。縄文土器では把手をもつ深鉢形の鐘ヶ崎式系統の土器片と、晩期の土器片が出土している。しかし、資料のほとんどは弥生前期・中期頃の土器片である。石器では黒曜石製石鏃・粘板岩製石鏃・砂岩製小形鑿形石斧がある。さらに調査年度は不明であるが、『社会科資料松浦郷土誌』には、池田下遺跡で試掘を行い、「畑の中央部に当たる所から箱式石棺を発掘した。」と報告されている。昭和40年代に入ってからは、長崎県立松浦高等学校の郷土社会部の活動の中で池田免田崎遺跡で表面採集した資料の報告があり、縄文前期の曽畑式土器が採集されている。以上、断片的ではあるがこれまでの池田遺跡の歩みである。しかし、多量の土器片・石器類が採集されているにもかかわらず何らまとまった報告が行われておらず、保存策も講じられていなかったのである。

近年、本遺跡の周辺においては、宅地造成、小工場建設により自然地形の破壊が著るしく進行する状況下であり、これに対処するため早急に遺跡の範囲を正確に把握して、保存対策の基礎資料を得る必要性が生じている。そこで、昭和63年度と昭和64年度の２ヶ年で遺跡の範囲確認調査の実施を計画した。幸いにも文化庁・長崎県教育委員会の理解が得られ、昭和63年度・平成元年度の国庫および県費補助事業として範囲確認調査を行うことができた。２ヶ年の事業計画中にも遺跡の危機が生じた。昭和63年６月に有限会社久枝商事により池田遺跡のＦ地点（面積2,579m²）において遊戯場建設に伴う埋蔵文化財発掘の届出が提出された。同地点は昭和64年度の確認地点に計画していたが、たび重なる協議の結果、確認調査を実施することで同意が得られ、調査費用についても同商事より心よく承知していただき６月21日から７月７日にわたり調査を実施した。その結果、一部に中世期の包含層が発見されたので再度協議し、盛土で保護されている。

2．調査関係者　（敬称略）

調査主体	松浦市教育委員会		
調査総括	教育長	呼子俊一	（昭和63年4月から）
	教育次長	松尾公平	（平成元年4月から）
事務局	社会教育課課長	尾野伊十郎	（昭和63年6月死去）
	〃	石本利明	（昭和63年11月から）
	社会教育課次長	宮本正志	（平成元年3月まで）
	〃	網本利光	（平成元年4月から）
	社会教育主事	中田敦之	（平成元年4月から）
調査担当		中田敦之	（昭和63年4月から）

調査協力者　長崎県教育委員会、松浦市農林課、山口昭（池田地区嘱託員）、吉山和美（前市立御厨小学校長）、鈴木利夫（市立御厨中学校長）、中野繁雄、中野広一、小林留一、丸久保音一郎、内野国雄、山口盛義、松田貞一、島田忠五郎、佐次川茂、谷口幸一、山根定美、中野等、小林敏治、山本孝、前田公彦、中川サエ子、大石美津枝、村田政子、大野シオミ、谷口ハツエ、中野トシ、辻マサ子、山口サエ、小浦良子、堂領京子、中山ひろ子、辻元エン、藤川京子、立石とよ子、大野ユキ子、松田マリ子、池渕かよ子、白石チノ、久家洋子、内野義（奈良大学生）、永益陽子（橘女子大学生）

整理協力者　三島道子、堀川玲子、長由美、江口鈴子、久家洋子、松岡清美
西井由美（社会教育課）

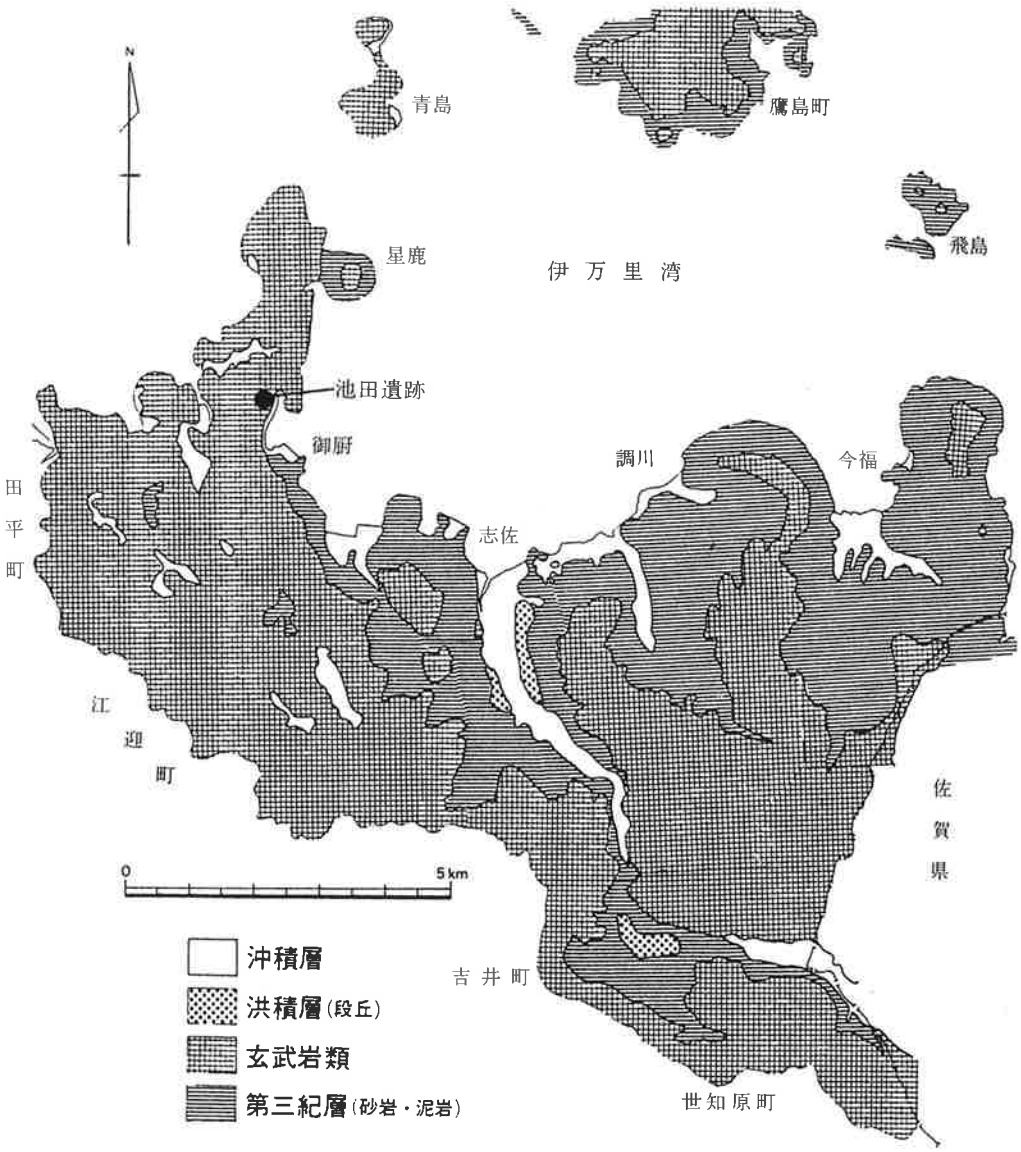
この他にも多くの方々のご協力により無事に調査を終えることができました。心より感謝申し上げます。

3．遺跡の立地と環境（第1図）

池田遺跡は、長崎県松浦市御厨町里免205番地の1、池田免318番地の1付近一帯に所在し、御厨港を見おろす標高約11mから約20mの丘陵上の畑地に位置する。

松浦市は、北松浦半島の北部とその沖に浮かぶいくつかの島々から構成されており、北に伊万里湾、西から南にかけては北松浦郡田平町・江迎町・吉井町・世知原町と、東は佐賀県伊万里市と接している。松浦市を含む北松浦半島は、長崎・佐賀の県境を占拠する国見山（777m）を最高峰とし、北と西とに高度を逓減しながら海へ没している。地勢は、基盤となる第三紀層とその上部を玄武岩が覆い、いたる所に玄武岩台地を形成している。

遺跡の立地する御厨町は、松浦市の西部にあり、低位の玄武岩が広く分布しており、白岳と大岳の二重構造の台地がビュート状に高まりをなしている。この低位の玄武岩台地は、北流す



第1図　松浦市内地質図

る竜尾川・加椎川・坂瀬川の浅い谷に刻まれた丘陵状となっている。また、星鹿半島もこれにつづく低い台地で、城山山頂にも玄武岩が分布している。海岸線は、比較的出入りが多く北西からの風波をさけることのできる御厨港、星鹿港などの天然の良港がある。また、半島や岬の先端、北西岸にあたる所では、海食崖がみられ、波津崎・津崎鼻などに代表されるように玄武岩の柱状節理が発達している。

4．周辺の遺跡と歴史的環境（第２図・表１）

松浦市内の遺跡としては、圧倒的に旧石器時代・縄文時代の遺跡が多いが、近年は、古墳時代および中世期を中心とする遺跡の発見も相次いでいる。そんな中で松浦市の西部一帯では、かなり昔から、しかも連綿として絶えることのない人々の遺跡が残っている。現在までのところ、旧石器時代の所産であるナイフ形石器や台形石器の資料が牟田Ｂ・Ｃ・Ｄ、中ノ崎・長蔵坊・田口高野遺跡などで確認されている[注1]。さらに、星鹿半島一帯は、道具生産の主たる石材である黒曜石の原産地であり、遺跡はことのほか多く発見されている。しかし、発掘調査では良好な包含層の確認までには至っていない。

次の縄文時代では、姫神社遺跡・小嶋遺跡など良好な遺跡も知られている。姫神社遺跡は、昭和41年にアメリカのウィスコンシン大学アルバート・モアと日本人学者（内藤芳篤、吉崎昌一ら）による合同調査が行われており、その一部が英文で報告されている[注2]。この論文については福岡県教育委員会の水ノ江和同氏によって訳され、近く発表の予定だ。同論文では縄文前期の轟式土器、曽畑式土器を中心に、中期の阿高式土器、石器では石鏃・石錐・石槍・石斧・石匙などがある。また、萩原博文・久原巻二氏による縄文後期の土器片と共に石鋸・サイドブレイドが採集されている[注3]。小嶋遺跡は、昭和61年に簡易水道敷設工事に伴う緊急調査で発見した遺跡である。縄文前期の曽畑式土器、中期の阿高式土器を中心に一部他地区からの搬入土器もある。石器では石鏃・剝片鏃・石銛・滑石製装飾品・石斧などがある[注4]。本報告は未刊で現在整理中である。

弥生時代では、北久保Ｂ遺跡と姫神社遺跡で後期の壺・甕類が採集されている[注5]。他では本遺跡があげられるのみであったが、本年度調査を行った田原積石塚および寺ノ尾Ｃ遺跡で弥生期の土器片が出土しており、今後は遺跡数も増加するであろうと思われる。

古墳時代については、従来よく知られていなかったが、昭和62年に範囲確認調査を実施した小嶋古墳群がある[注4]。３基を確認し、そのうちの１号墳を調査した。石室はすべて天井部を失って露出しており方形の玄室プランに羨道を付した横穴式石室であった。玄室内より銀環・碧玉製勾玉・ガラス製丸玉などが多数出土しており、７世紀後半代に比定できる。また、詳細は不明であるが、貴船神社古墳から提瓶１個と土師器が発掘されている[注6]。

古墳時代以降では、「宇野御厨」の痕跡であろう。宇野御厨荘、単に御厨荘ともいわれている。律令制下では天皇や神に貢納する魚貝・果物を贄と称しており、のちに宇野御厨が置かれた松浦・五島の地域でも、大宰府を通じて贄が貢上されていたことが『延喜式』や贄木簡などによって知られる。宇野御厨が初めて文書に現われるのは『東南院文書』で、寛治３年（1089）８月17日の筑前国観世音寺三綱解案に「宇野御厨別当下文」とあるものである。つぎに宇野御厨の名が見えるのは、『石志文書』の、康和４年（1101）８月29日の肥前国宇野御厨検校源久譲状案である。この文書は偽文書の疑いが高いが、「宇野御厨野検校散位」（源久）という松浦党の祖といわれる人物の名が見える。この源久は延久元年（1069）現在の松浦市今福町に下向し、

土着したといわれている人物で、以後松浦党の諸氏は祖として仰いでいる。松浦党は宇野御厨および御厨荘一帯に土着した源姓の一字名の集団を中心に、当初はその姻族が加わった武士団である。『河上神社文書』の正応5年（1292）の「肥前国河上宮造営用途支配懇田数注文」には「宇野御厨庄三百丁」と御厨の公田数が記されている。当時の御厨の範囲を確定することは難しいが、鎌倉期の資料から考えると、現在の五島列島・平戸島などの島々を含む県北地域の一帯・南松浦郡の地域と伊万里湾西側地域を含む一帯であろうと思われる。御厨の地名は鎌倉期から御厨荘などとして現われているが、これは宇野御厨を指し、現在の御厨には直接につながらない。しかし、鎌倉期には、「御厨熊徳」なる人物が見え、引安4年（1281）に宇野御厨の預所から無主の荒野1町を給田として与えられており、すでに今日へつながる御厨の地名があったことが推測できる。御厨氏は、「御厨氏系図」によれば、値嘉十郎連の子御厨小二郎並が始祖とされている。代々御厨を姓として、御厨城を居城としていた。

南北朝期に入ると、松浦党はしばしば一揆を結んで、地域支配の体制を強化している。『山代文書』の永徳4年（1384）の下松浦一族一揆契諾状には「〈ミくりや〉三河守守」、「〈ミくりやのさかもと〉源宥」の当地を本拠とする土豪名が見える。

室町期に入ると、御厨氏は盛んに朝鮮貿易を行っている。『李朝実録』には「太宗恭定大王実録」戊子太宗8年（1408）6月庚辰条に「日本志佐殿・御厨殿、皆遣使献礼物」とあり、以後の『李朝実録』に「下松浦三栗野太守源満」「下松浦三河守融」などの名が見える。

戦国期に入ると、田平里城主峰昌と弟の平戸松浦弘定との対立抗争があり、昌は島原の有馬貴純と結び、一方、弘定は大内義弘の援けを得て、延徳3年（1491）に平戸勝尾嶽城や箕坪城をめぐって激しい攻防を展開したが、結局大内氏の斡旋で和睦した。この結果、弘定の室の父である御厨資忠と子の善は御厨を追われ、川棚に走る。以後の御厨は平戸領となる。

注1　下川達彌　「長崎県松浦市域における旧石器時代遺跡」　『長崎県北松浦地方の文化』　長崎県立美術博物館　1984

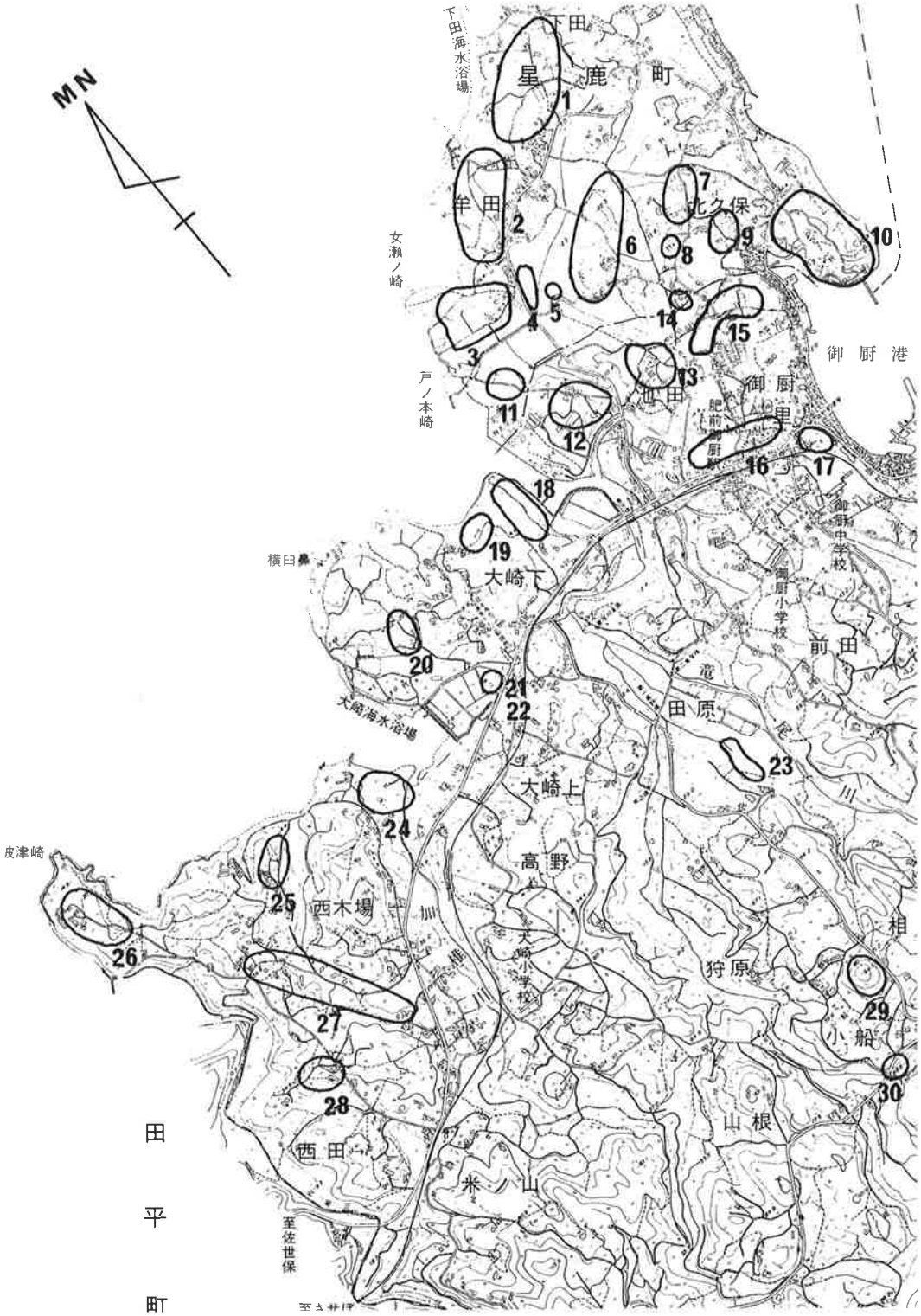
注2　ALBERTMOHR AND MASAKAZU YOHSIZAKI　「Cultual Sequence in Western Kyushu」　『Asian Perspectives』　16巻2号　1973

注3　萩原博文・久原巻二　「九州西北部の石鋸、サイドブレイドについて」　『古代文化27—4』　1975

注4　中田敦之『小嶋古墳群』　松浦市文化財調査報告書第4集　松浦市教育委員会　1988

注5　樋口隆康・釣田正哉　「平戸の先史文化」　『平戸学術調査報告書』　1951

注6　前田　毅　「肥前御厨貝塚発見報告」　『人類学雑誌40—10』　1925



第２図　松浦市西部地区遺跡分布図（$\frac{1}{25,000}$）

表１．松浦市西部地区遺跡分布一覧表

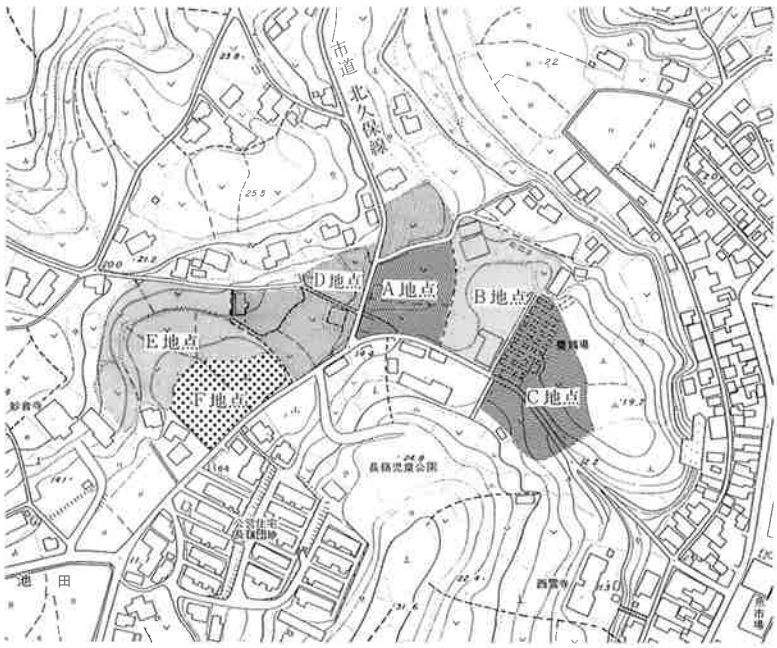
番号	遺跡名	所在地	出土遺物など	遺跡地図番号	備考
1	牟田B	星鹿町牟田免細	ナイフ形石器、細石核、細石刃、石鏃	52 － 27	
2	牟田A	〃 中尾	ナイフ形石器、黒曜石原石	52 － 26	
3	佐世保崎	〃 佐世保崎	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、黒曜石原石	52 － 24	昭和57年調査
4	牟田池上	〃 池上	石核、石鏃、黒曜石原石	52 － 25	昭和58年調査
5	北久保経塚	星鹿町北久保免竿	弥生土器		2 基
6	牟田C	〃 藤園	ナイフ形石器、台形石器、掻器、石鏃	52 － 36	
7	北久保A	〃 勢ノ巣	石鏃、弥生土器	52 － 38	
8	北久保B	〃 北久保	剥片	52 － 37	
9	北久保C	〃 浦頭	石鏃、剥片	52 － 39	
10	姫神社	〃 宮崎	縄文土器、石斧、石鏃、石鋸	52 － 40	昭和41年調査
11	戸ノ本崎	星鹿町牟田免池上	ナイフ形石器、石斧、石鏃		
12	中ノ崎	御厨町池田免中ノ崎	ナイフ形石器、黒曜石原石	52 － 23	
13	長蔵坊	〃 長蔵坊	ナイフ形石器、ラウンドスクレイパー、黒曜石原石	52 － 42	
14	貴船神社古墳	星鹿町北久保免	須恵器		
15	池田	御厨町池田免田崎 〃 里免下長峯	縄文土器、弥生土器、石斧 石鏃、白磁、青磁、獣骨	52 － 41	**本書**
16	坂本	〃 長峯	石鏃、黒曜石原石	52 － 43	
17	御厨城跡	〃			
18	水尻A	〃 大崎免水尻	黒曜石原石	52 － 22	
19	水尻B	〃	ナイフ形石器、石斧	52 － 21	
20	蕨川	〃 俵場	黒曜石原石	52 － 20	
21	小嶋古墳群	〃 小嶋	銀環、勾玉、丸玉、鉄鏃	52 － 19	昭和62年調査
22	小嶋	〃	縄文土器、石斧、石鏃		昭和61年調査
23	田原積石塚	〃 田原免	弥生土器、須恵器、石鏃		平成元年調査
24	下谷	〃 西木場免下谷	スクレイパー、剥片	52 － 18	
25	田中	〃 西田免小田・田尻	スクレイパー、剥片	52 － 17	
26	波津崎	〃 波津崎	剥片	52 － 14	
27	田口高野	〃 田口高野 〃 西木場免寺山	ナイフ形石器 石鏃、剥片	52 － 16	
28	西木場	〃 西田免潮入		52 － 15	
29	城ノ越城跡	〃 小船免葉山			
30	葉山六地蔵塔	〃		52 － 44	

II　調　　査

1．昭和63年度の調査の概要（第３図）

２ヶ年計画における範囲確認調査で昭和63年度の１年目は、市道北久保線より東側の地域で、標高約13m から20m の畑地を調査対象地域として計画した。この地域は整理の都合上、西よりＡ地点、Ｂ地点、Ｃ地点と呼称した。計画では３地点同時に調査を行う予定であったが、Ａ地点が作物の植付けの関係で収穫後に調査を行うことで土地所有者の同意が得られたので、Ｂ・Ｃ地点から土地所有者の承諾を取り、昭和63年９月12日から10月13日までのべ32日間調査を行った。Ａ地点は平成元年２月25日から３月14日までの18日間行った。調査区は４ｍ×２ｍの基本単位とするトレンチ方式で行い、調査状況に応じて拡張した。調査面積はＡ地点72m²（９調査区）、Ｂ地点79m²（10調査区）、Ｃ地点58m²（８調査区）で、調査面積は209m²であった。

Ａ地点では北側と南側からの両方より傾斜しており、標高約13m から15m を測る。最も低くなった中央に東西に流れる排水溝がある。この地点の１・４・５トレンチよりピットと４トレンチより箱式石棺墓と土壙を各１基検出した。５トレンチより東側のトレンチでは第２次世界大戦後にゴボウ畑として利用されていたため地表下60～80cmまで攪乱状態で、その下に厚い遺物包含層が認められた。発掘深度は1.5m 以上に達し埋戻しには慎重を期した。２・６・８トレンチでは厚い耕作土の下に黒褐色粘質土層（京都大学が黒色有機質土層で報告）が分布しており、本来Ａ地点の中央よりやや北側から南側にかけて存在していたものと思われる。５・７トレンチにおいては攪乱を受けていたが獣骨等の自然遺物を含んでいた。



第３図　池田遺跡位置図（$\frac{1}{5,000}$）

B地点は東側で標高17m、西で15mを測る。北側は宅地と一部畑地として利用されている。土地所有者によると古くは貝塚があったが地下げして消滅しているとのことであった。そこで確認のため8トレンチを設定したが、貝層は攪乱状態であった。また、2・9トレンチの狭い範囲ではあるが貝塚を発見した。2・3・4・10トレンチにおいてはピットを検出した。6トレンチでは中世期の落ちこみを検出した。2・9・10トレンチの南側においては灰黒褐色粘質土層が5～20cm堆積しており中世期の包含層で、その下部に貝層が分布している状況である。

C地点は中央部を東西に市道市場線が横断している。標高約19mから20mの畑地に位置する。11・12・16トレンチでは遺物包含層が検出できなかったが、13・15・18トレンチで確認できた。本来は市道が走る所にも分布していたと思われる。ピットは13～16トレンチで検出できた。この地点では調査の最終日になって18トレンチから壺を利用した甕棺墓1基が検出された。

2．平成元年度の調査の概要（第3図）

2ヶ年目の平成元年度の範囲確認調査は、市道北久保線より西側の地域で、標高約11mから18mの畑地を調査対象地域として計画した。調査方法等は前年度と同じである。この地域も整理の都合上、北よりD地点、E地点とし、昭和63年確認調査を行った地域をF地点として呼称する。調査は平成元年7月24日から9月21日まで行い、作物の植付けの関係でE地点の畑地から開始し、D地点へと移動して行った。調査面積はD地点56㎡（7調査区）、E地点70㎡（9調査区）で、2年次の調査面積は126㎡であった。

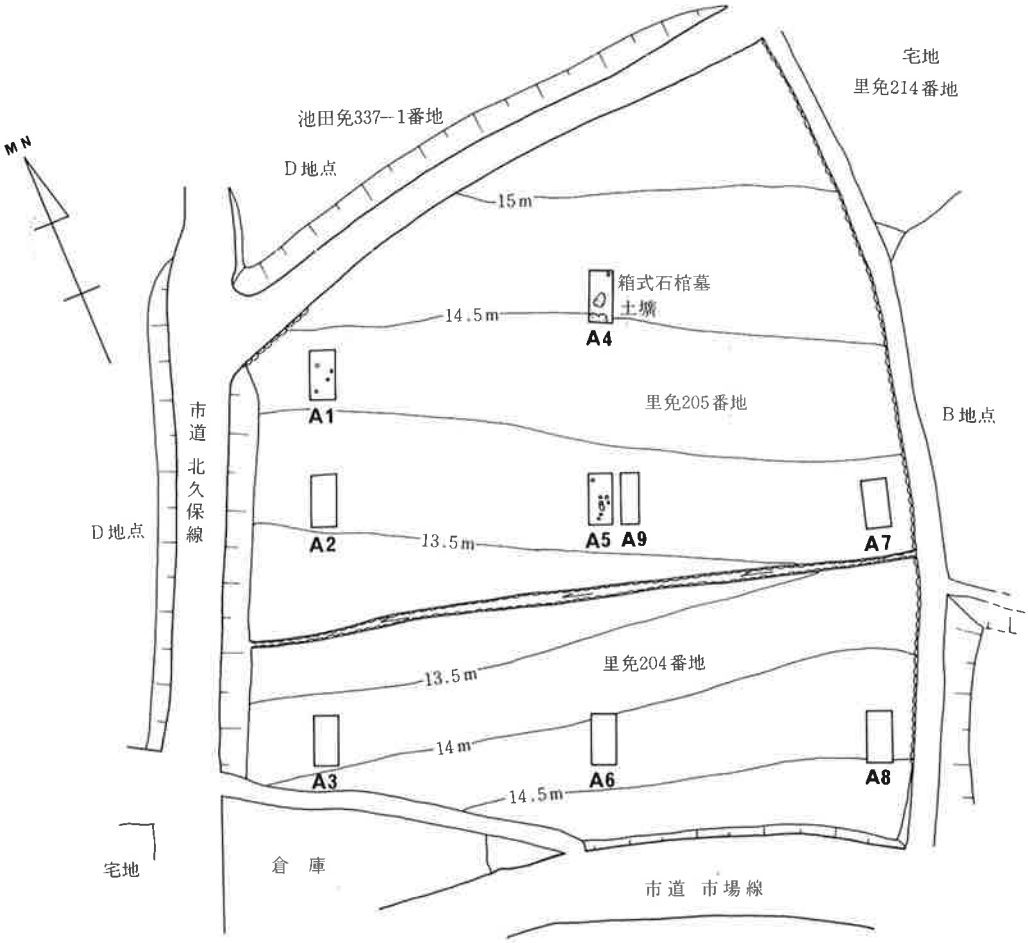
D地点では14～16トレンチで耕作土下に攪乱層があり、本来の包含層の検出はできなかった。しかし、15トレンチでは地山直上に柱穴を検出した。10～13トレンチの調査では、毎日が湧き水との戦いで調査も思うようにはかどらなかった。この地点は（池田免340-2番地）全体に耕作土下に厚い埋土が認められたが、包含層は存在していた。とくに1年目の調査に対して10トレンチでは須恵器の坏身・坏蓋・甕が多数出土している。12トレンチの北側部分で石垣の一部が検出された。畑の境界の石垣の部分と思われ、調査終了後現状で埋戻した。時期的には不明である。

E地点は標高約11mから16mを測る地点の調査で、現在も畑地として利用されている所である。そのため遺物包含層も厚い耕作土の下に認められた。しかし、5トレンチでは深くまで耕作されており、近世の排水溝を1基確認した。8トレンチでは厚い耕作土の下に埋土が認められ、その厚さは1.2mまで達しかなり攪乱していた。その下に包含層を検出したが、下層の調査になると湧き水に悩まされ調査が進まなかった。そのため埋戻しを考えると地山まで調査ができなかった。この地点は他の地点と比較すると特に細片が多く、包含層からは縄文、弥生、中世の遺物が出土している。この地点で一番高位の畑地（池田免321番地）では地山の上に埋土が厚く堆積していた。1～4トレンチで柱穴を検出した。この地点に隣接するF地点は昭和63年に確認調査を行っており、E地点に近接するトレンチで包含層を確認している。

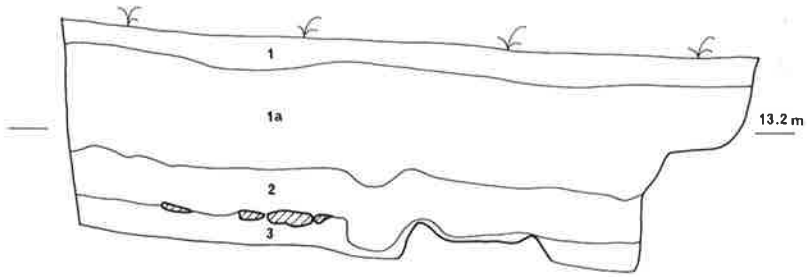
III　土層および遺構・遺物

1．A地点の土層および遺構・遺物（第4図）

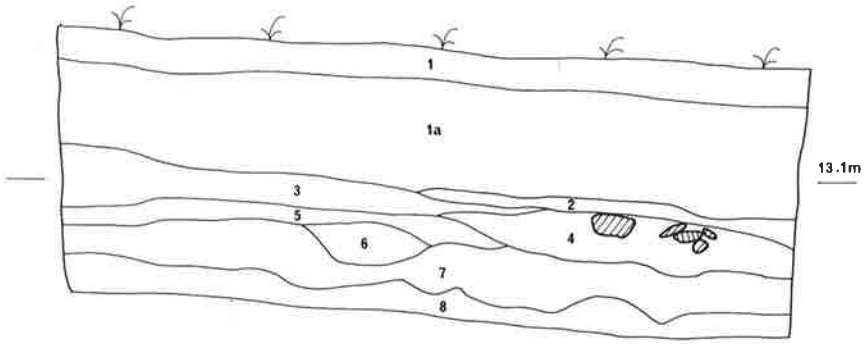
A地点9箇所のトレンチでは、北側からと南側からと土層の堆積も排水溝の方行へとなだらかに傾斜しており、古くから谷状に地形が走っていたものと考えられる。京都大学の報文はこの排水溝の側壁で地表下約60cmに黒色有機質を含む厚さ約15cmの包含層を、その下に紅色粘土層を確認しているが、試掘において得ることはなかったと報告している。鍵層となる黒褐色粘質土層（黒色有機質）が存在するトレンチは2・6・8で、紅色粘土層は各トレンチとも検出できず、黒褐色土層の下は茶褐色土層であった。このため京都大学の調査地点については不明である。しかし、5・9トレンチの調査では約1 m程の深さになると報文と同様湧き水に悩まされたため地山まで調査ができず断念した。



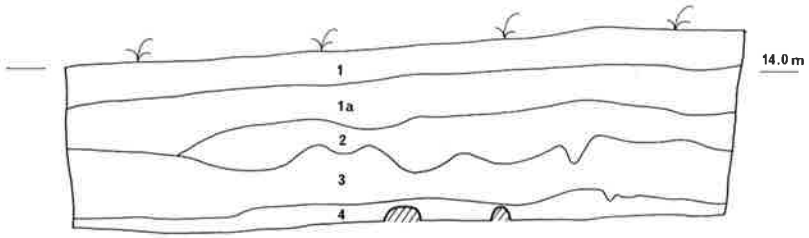
第4図　池田遺跡A地点調査区設定図（$\frac{1}{600}$）



第５図　Ａ２トレンチ東壁（$\frac{1}{40}$）



第６図　Ａ５トレンチ東壁（$\frac{1}{40}$）

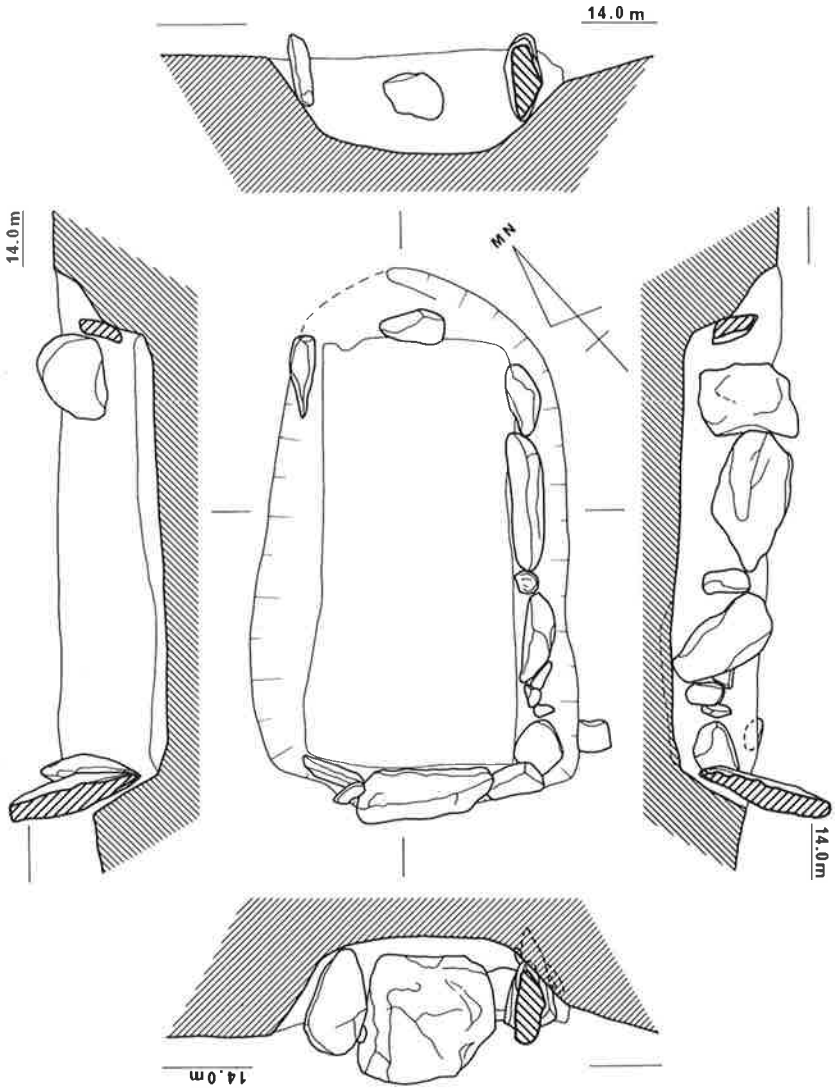


第７図　Ａ６トレンチ東壁（$\frac{1}{40}$）

土　　層（第５図～第７図）

Ａ地点における基本層位は１層が現在の耕作土、１ａ層が旧耕作土、２層が黒褐色粘質土、３層～７層が茶褐色を主な色調とし、８層の褐黄色粘質土層へとつづく。土層は２・５・６トレンチを図示した。２トレンチでは表土の下に55cm～60cmの厚い旧耕作土に覆われ、その下に２層の黒褐色土、３層の茶褐色土層へとつづく。遺物はどの層も弥生土器中心で縄文土器は少ない。５トレンチも同様に現耕作土の下に45cm～60cmの厚い旧耕作土が覆っている。２層は黒褐色土ではなく褐色砂質土層であった。３層はやや赤みを帯びた茶褐色粘質土、４層は茶褐色礫層、５層は褐色粘質土で、３層より明るく砂粒を含んでいる。６層は茶褐色混礫層、７層は暗茶褐色粘質土で固くしまっている。８層は褐黄色粘質土層である。７層から８層へ掘り込んだピットが検出された。出土遺物では３層～５層が弥生土器が多かったのに対し、７層～８層

になると弥生土器より縄文土器が多くなる。A地点の南側に設定した6トレンチは南から北へゆるく傾斜しており、ここでも現耕作土の下に20cm～30cmの旧耕作土があり、鍵層の黒褐色土はここでは3層にあたる。2層は褐色粘質土でやや砂粒を含んでいる。3層は固くしまっている。4層は明茶褐色粘質土層である。出土遺物は3層を中心に弥生土器等737点が出土している。7トレンチは2層に茶褐色粘質土があり、暗褐色粘質土へとつづく。特にB地点とも近い関係でか自然遺物の獣骨および魚骨類が多い。8トレンチは2層が黒褐色粘質土層で、遺物の出土は184点と少なくなるが、弥生土器が多い。9トレンチは5トレンチと近いため同じ土層堆積状況であった。4層まで確認している。このトレンチでも若干の自然遺物が出土したが保存状況が悪かった。1トレンチは地山である赤褐色粘質玄武岩風化土層の直上まで旧耕作土が堆



第8図　A4トレンチ箱式石棺墓実測図（$\frac{1}{20}$）

積し攪乱状態であった。3トレンチも地山の直上まで旧耕作土と埋土でおおわれており、明治期に埋土を行っているようだ。4トレンチでもやはり地山直上まで40cm～45cmの厚さで旧耕作土がおおっていた。遺構では箱式石棺墓と土壙の2基、それにピットを検出した。いずれも地山面に掘り込んでいた。

遺　構

箱式石棺墓（第8図）

石棺は保存状態がかなり悪く、地山面に掘り込んで埋設されてはいるが蓋石はすべて旧耕作時に取り除かれたと思われる。主軸はN41°30'Eを測る。北側壁3～4枚不足しており、耕作時の抜き取りが考えられる。西木口部（頭部と考えられる）は3枚の玄武岩の板状石を利用し中央に一番大きい石材を配している。さらに東木口部には石材が1枚残っておりあとは抜き取られている。南側壁に3枚が残っており、1枚程度抜き取られている。石材の大きさは一定していないが、棺身は長方形を呈し、144cmを測る。径は土壙底部で、長さ116cm、幅は東側で50cm、西側で56cmを測り、西側部分が若干広いため西枕であったと思われる。褐色の覆土内出土遺物は弥生土器では甕棺と思われる胴部破片・底部片・胴部片など18点、黒曜石製剥片・砕片、安山岩製石核・剥片など14点があった。

この4トレンチの石棺墓とは別に石棺墓の報告がある。それによるとA地点の中央部地表下52cmの所で発見されており、石棺の蓋石には3枚の板状石が使用されていた。主軸は東西よりやや北向きで、北側壁2枚、南側壁1枚、東西の木口部に各1枚づつ板石（砂岩）が使用されていた。南側壁も本来は2枚あったと思われ1枚は抜き取られたものであろう。法量は内法で長辺120cm、木口部で42cmと36cmある。副葬品および人骨の出土は報告されていない。この石棺と今回調査した石棺とは同じ畑地で近接しているため、狭い範囲ではあるが群集する可能性がある。石棺の時期であるが、棺の長径が長い程時期が後出する傾向が指摘されている。これから考えると弥生時代中期以降であろうと思われる。

土　壙

同じ4トレンチの石棺の南側に土壙があるが、北側半分のみの調査であった。覆土は褐色粘質土で、土壙内より弥生土器胴部破片・底部片・突帯部破片など44点、石鏃2点、黒曜石製石核・剥片・砕片、安山岩製石核・剥片など41点があった。しかし、遺構の上部は旧耕作土のため出土遺物全部が伴うとは考えられない。

ピット

ピットは1・4・5トレンチで検出できた。しかし、1・4トレンチとも旧耕作土の下であったため、中世期に属するのか弥生期に属するのか確証は得られなかった。1トレンチでは灰黒

褐色を覆土にもつピット３基、灰褐色を覆土にもつピット１基であった。４トレンチでは黒褐色を覆土にもつピット４基があった。ピット内からは須恵器・土師器・滑石・弥生土器・黒曜石製剝片が出土している。５トレンチでは７層～８層に掘り込んだピット７基を検出した。遺物が出土していないが７層～８層は縄文土器の出土量が増えているため縄文期の可能性もあるがここでは縄文期から弥生期にかけてとしておく。ピットの時期に関しては部分的な調査であったため、今後の調査にゆだねたいと考えている。

出土遺物

Ａ地点から約9,000点が出土している。その内訳は弥生土器約4,100点、黒曜石製石核・剝片・砕片など約2,300点、、安山岩製石核・剝片・砕片など約750点、自然遺物約550点、縄文土器約400点、土師器約300点、輸入陶磁器約200点、石鏃80点、石器製品約50点など膨大な量が出土している。中でも２・５トレンチにおける出土量が優位を占め、縄文晩期終末期の遺物より弥生前期中葉から後葉の遺物が多い。石器類は黒曜石の剝片類が多く、製品では石鏃、スクレイパー類が多く認められた。自然遺物で目立ったのは鹿の骨、イノシシの骨類であった。この動物遺存体および魚類・貝類の同定は調査区全体を含めて後日行う予定であり、現在の段階ではその種類については不明である。縄文時代に属する土器は各トレンチの中でも２・５・６・７・９トレンチで出土しているが、２・５トレンチからの出土が多い。層位的には縄文晩期層は山の寺期から夜臼期に至る土器がほとんどで板付Ⅱ式土器出土の弥生前期層との層位関係は明確ではなく、同レベルより混在して出土している。土器は粗製深鉢を中心として、細片が多かった。

１～45は表採および耕作土出土の石鏃である。種類は平基式が多く基部が直線をなすもの、全体的に正三角形状に近く基部がゆるい弧状になり断面がうすくなるものに大きく別れる。40は剝片鏃である。34はチャート製である。41～45・79～82は大形である。46～82は包含層内出土の石鏃である。34のチャート製をのぞくすべてが黒色黒曜石製である。73は基部の抉りも深い。83～85はナイフ形石器である。88・89は尖頭状石器である。86・87・91～97は縦長剝片である。98・99は石銛であろうか。103～106は黒曜石製石核である。107は石包丁の破片であろうか。108～120は安山岩製スクレイパー類である。116は石銛の先端部であろう。124は安山岩製石核。126・127は腰岳産黒曜石製石核である。128は磨石で周辺部が磨滅している。131は敲石。132～135は磨石。139～153はＡ地点トレンチ出土遺物である。139～142は石銛。143は十字形石器。144は扁平片刃磨製石斧である。146～149は打製石斧である。147は対馬島産の石材を利用している。150は硬質砂岩製の石皿である。151～153は石錘で、151は結晶片岩製の石錘で1,155ｇを測る。

154～208は２トレンチ出土遺物である。154～170は縄文後期～晩期の土器である。154～161は突帯文系土器、166～169は底部片である。170は大形の深鉢。磨滅しているがわずかに丹塗りの痕跡がある。口径34cm程になるであろう。171～208は弥生土器である。171～174は壺形土器の肩部に沈線が入る資料である。174は貝殻腹縁文を有する。175～182は外面に丹塗りの痕跡が認められる。183は大型甕の口縁部片であろう。１条の深い沈線がめぐる。184・185は逆Ｌ字状口縁をもつ甕形土器である。186・187は丹塗りが認められる赤褐色の土器である。188は高坏の接合資料である。189～202は外反する口縁で端部に刻目を施した甕形土器と、外反しただけの資料である。192は外面に縦のハケ目が顕著である。203・205は胴部に刻目を施している資料である。208は口縁端部を折り曲げて内湾させている。壺であろうか。209～240は5トレンチ出土遺物である。209～230は縄文土器である。209～226は晩期の刻目突帯文土器である。222・224～226は突帯部分でく字状に外反している。226は粘土のつなぎ目が顕著で内面ナデ調整である。外面は貝殻条痕調整を施している。228は外面に貝殻条痕を有する。口縁端部が大きく外反し口唇部は水平に仕上げている鉢である。230も同じ器形を呈するが刻目突帯を有する。231～240は弥生土器である。231は口縁部に外面より穿孔している資料で、口縁部は直線状を呈し、刻目が口唇部と胴部にある板付II式土器である。233～237・243～248は外反する口縁端部に刻目を施す資料である。230・231は貝殻腹縁による刻目を有する。240は壺の肩部片である。245・246は穿孔がある。250・251は中期の資料で逆Ｌ字状口縁部をもつ甕形土器である。252は壺の肥厚する口縁部である。胎土に金雲母を含んでいる。甕棺として使用されたものか。中期前葉の資料である。253～264は平底の底部片である。253・256・258はハケ目調整痕あり。265～279は７トレンチ出土遺物である。265～268は縄文晩期資料である。267は刻目突帯文がある。269～280は弥生土器である。口縁部が外反する資料と口縁端部に刻目を施している資料がある。276は外面黒色で研磨しており３条の沈線がめぐる。278・279は平底の底部片である。279は上げ底状を呈する。281～299は９トレンチ出土遺物である。281は胎土に滑石粉末を混入している縄文中期の阿高式土器である。282～290は縄文晩期資料で、283～285は精製土器で胴部上位で大きく湾曲し、口縁部が若干外反している鉢である。286～289は刻目突帯文の資料である。291～312は弥生土器である。291～294は壺の肩部で羽状沈線がめぐる。299は壺の口縁部である。300～312は底部片である。305・311は甕棺の底部であろう。307・308は上げ底を呈する。306は高坏の接合部分の可能性もある。

調 査 風 景

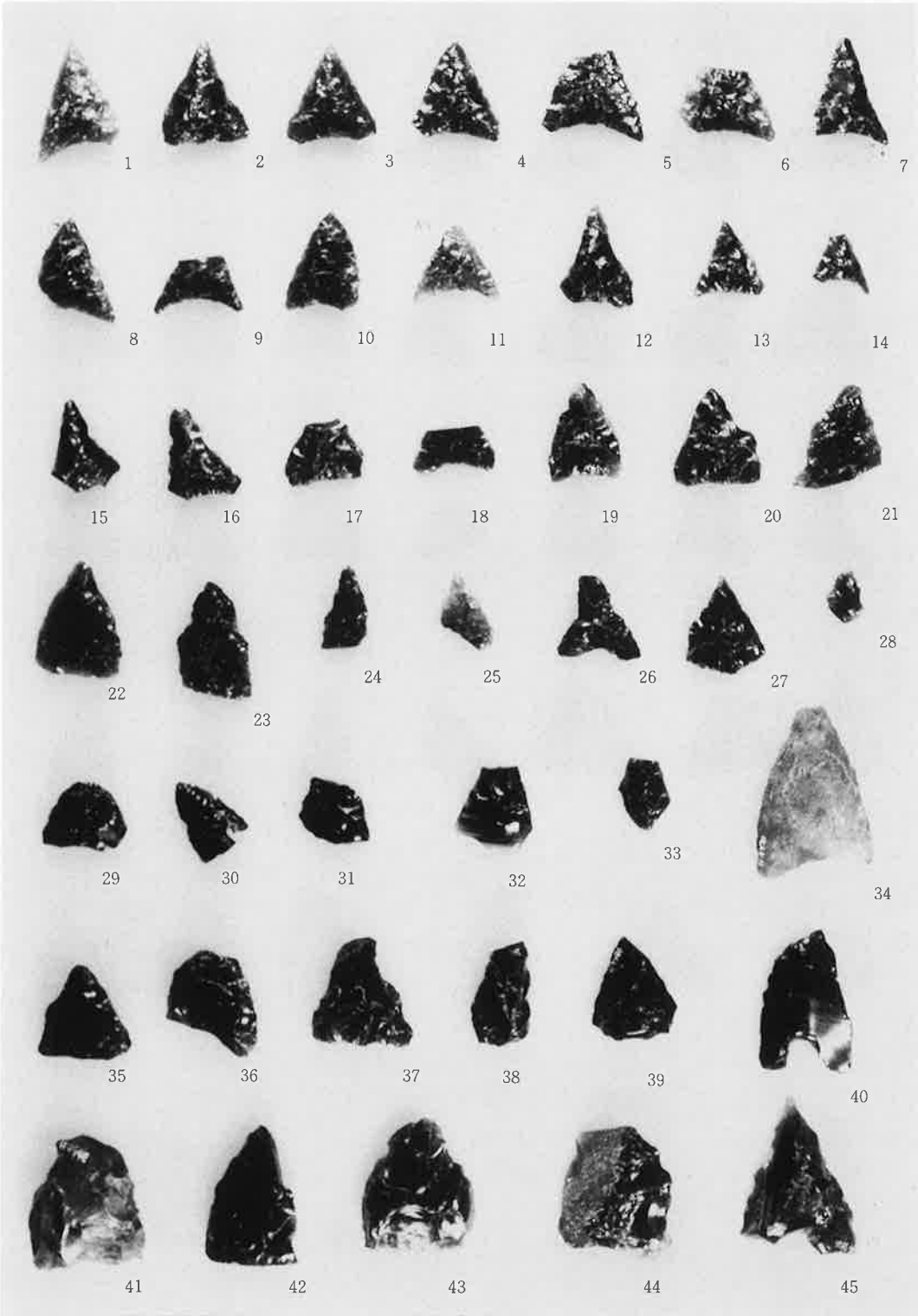
調 査 風 景

A 4 トレンチ箱式石棺墓

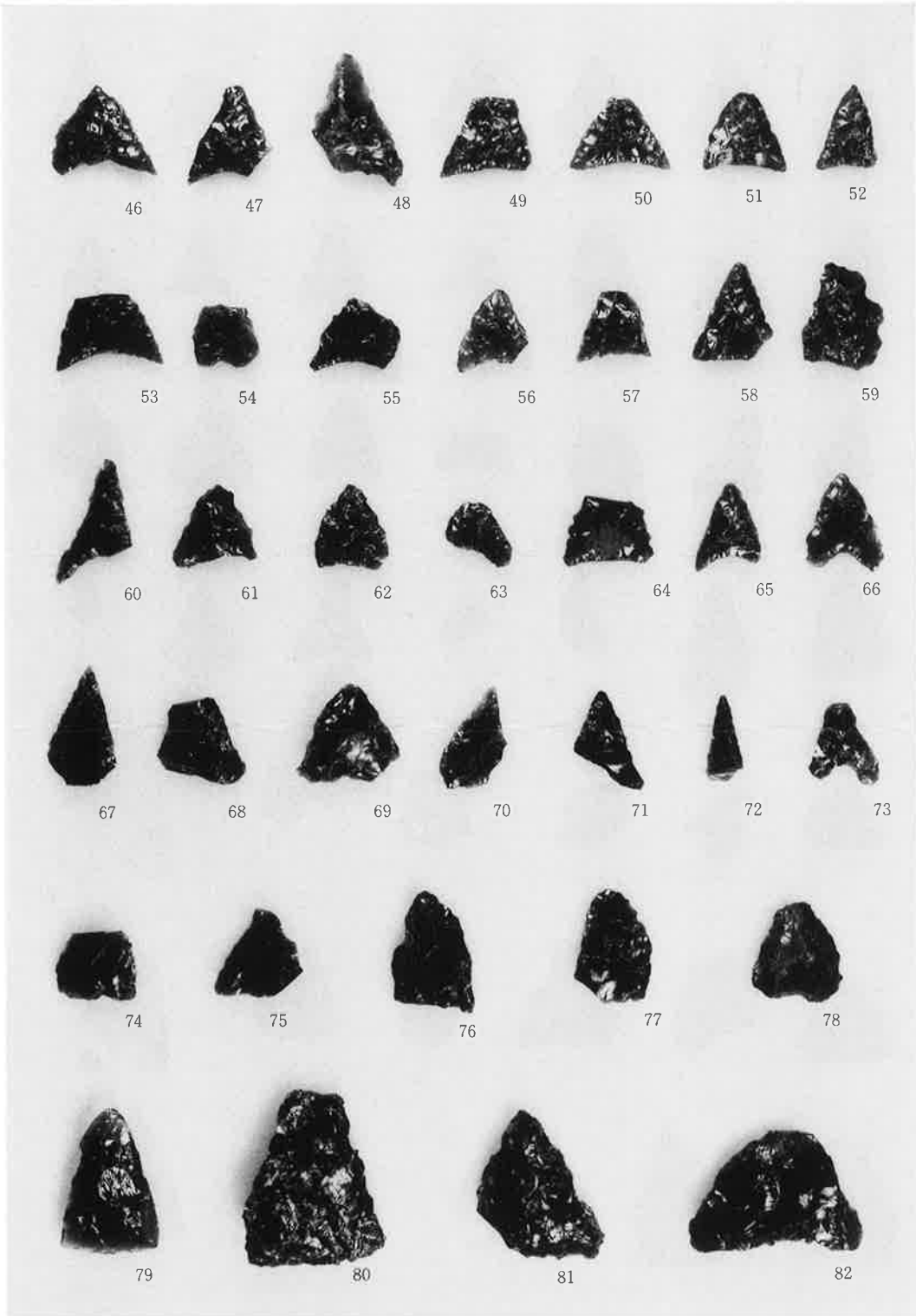
A 4 トレンチ箱式石棺墓土壙

A 5 トレンチ東壁

A 5 トレンチ遺物出土状況

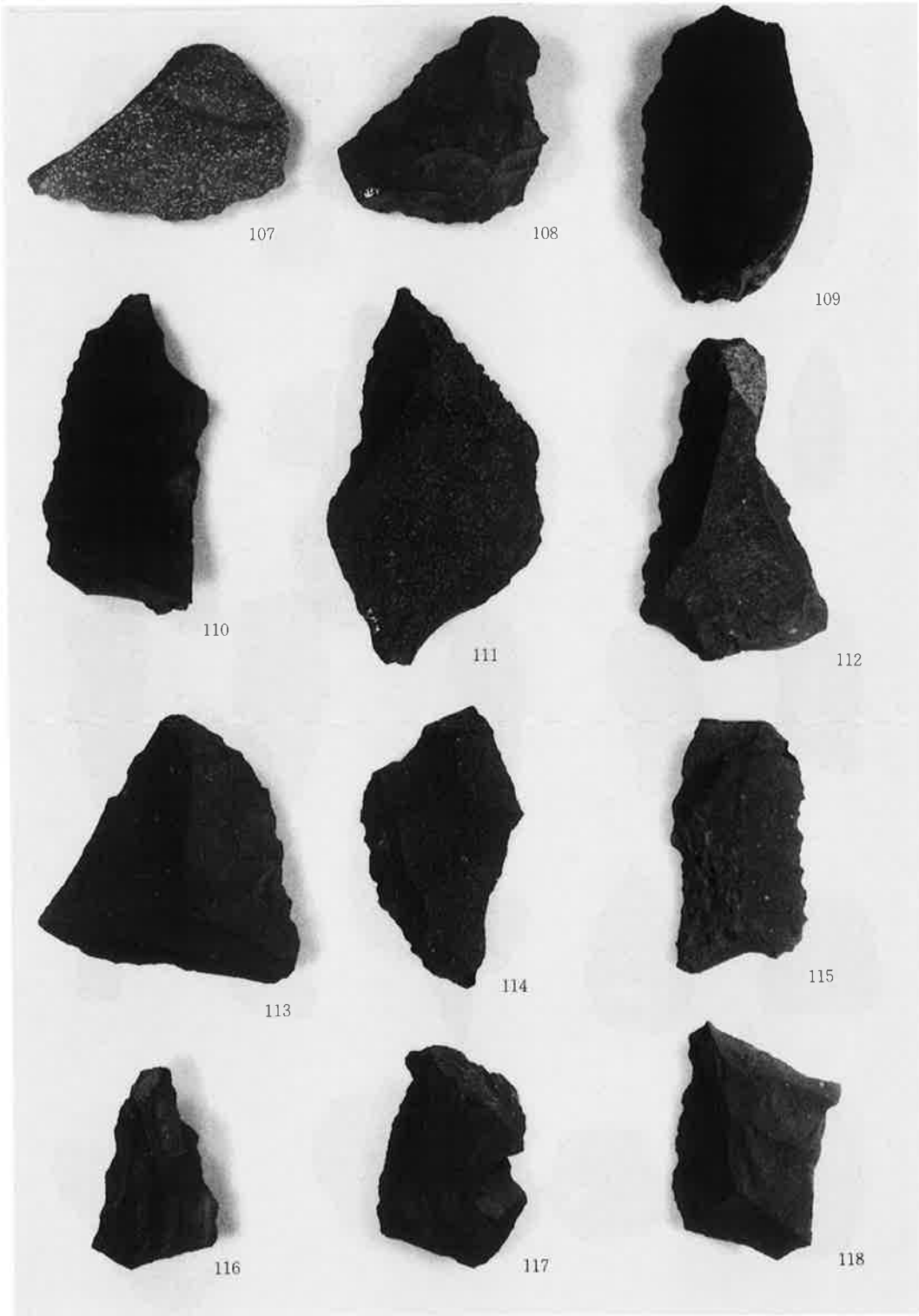

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45

A 地点表採遺物

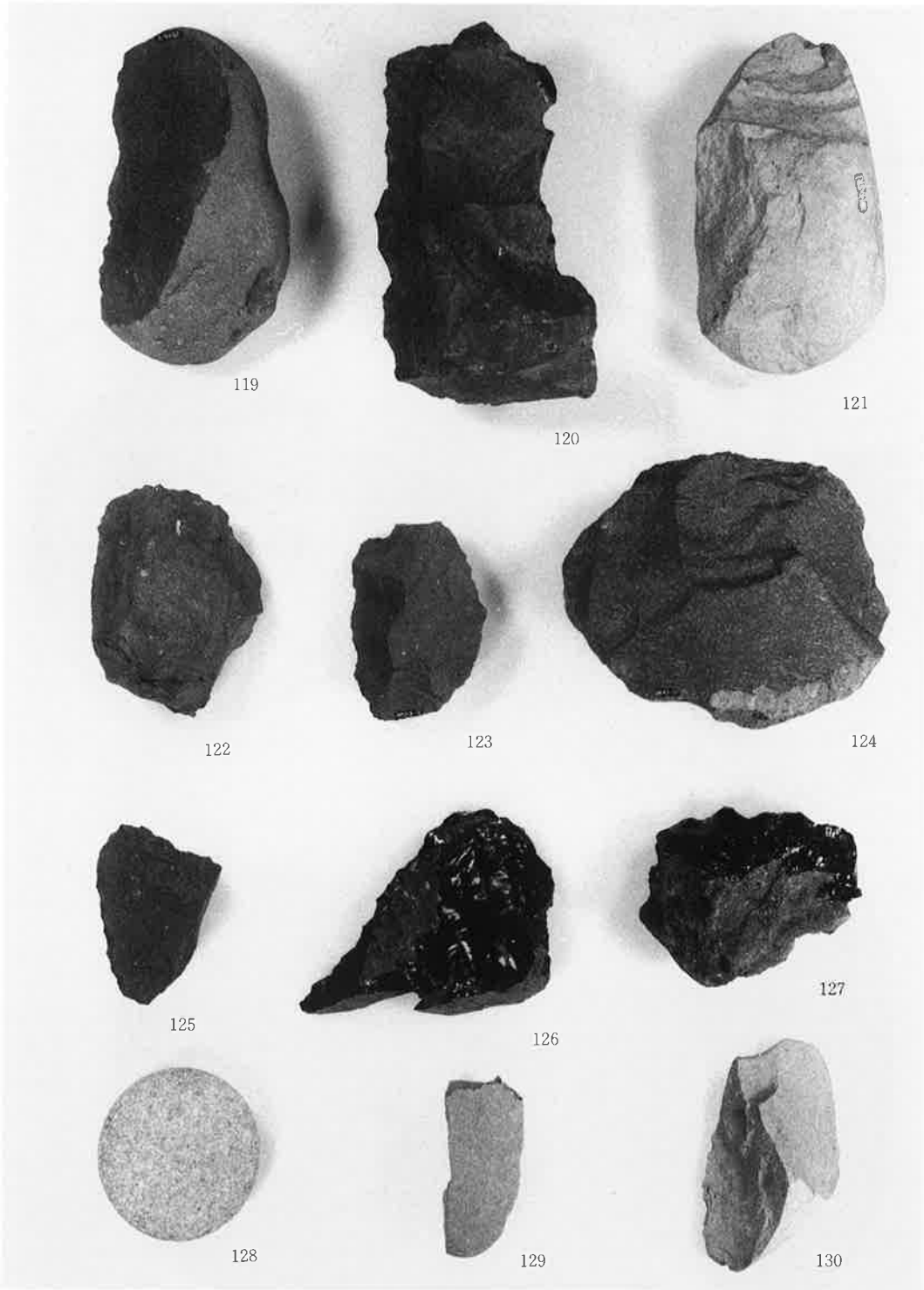

46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82

A 地点出土遺物

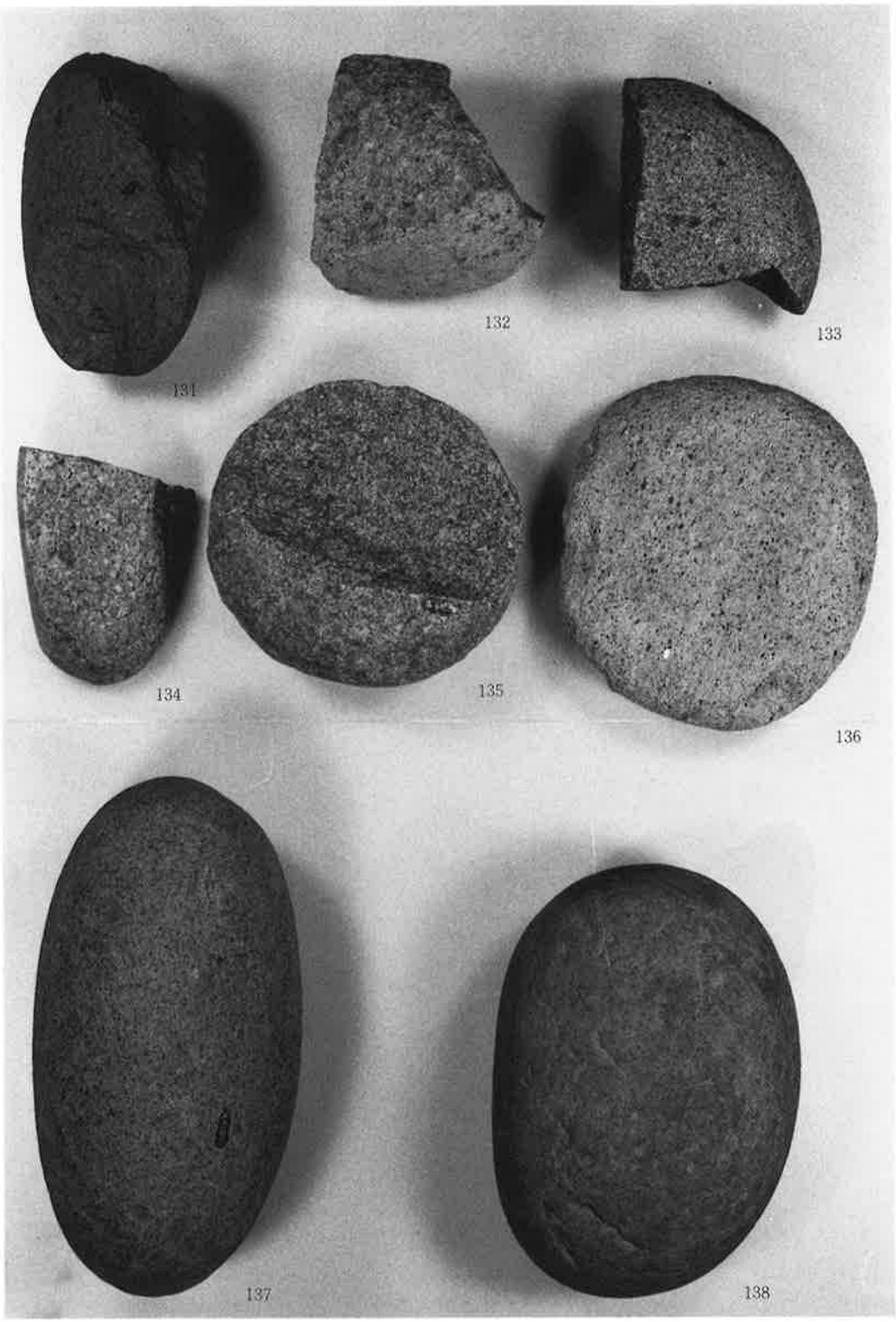
A地点表採および出土遺物



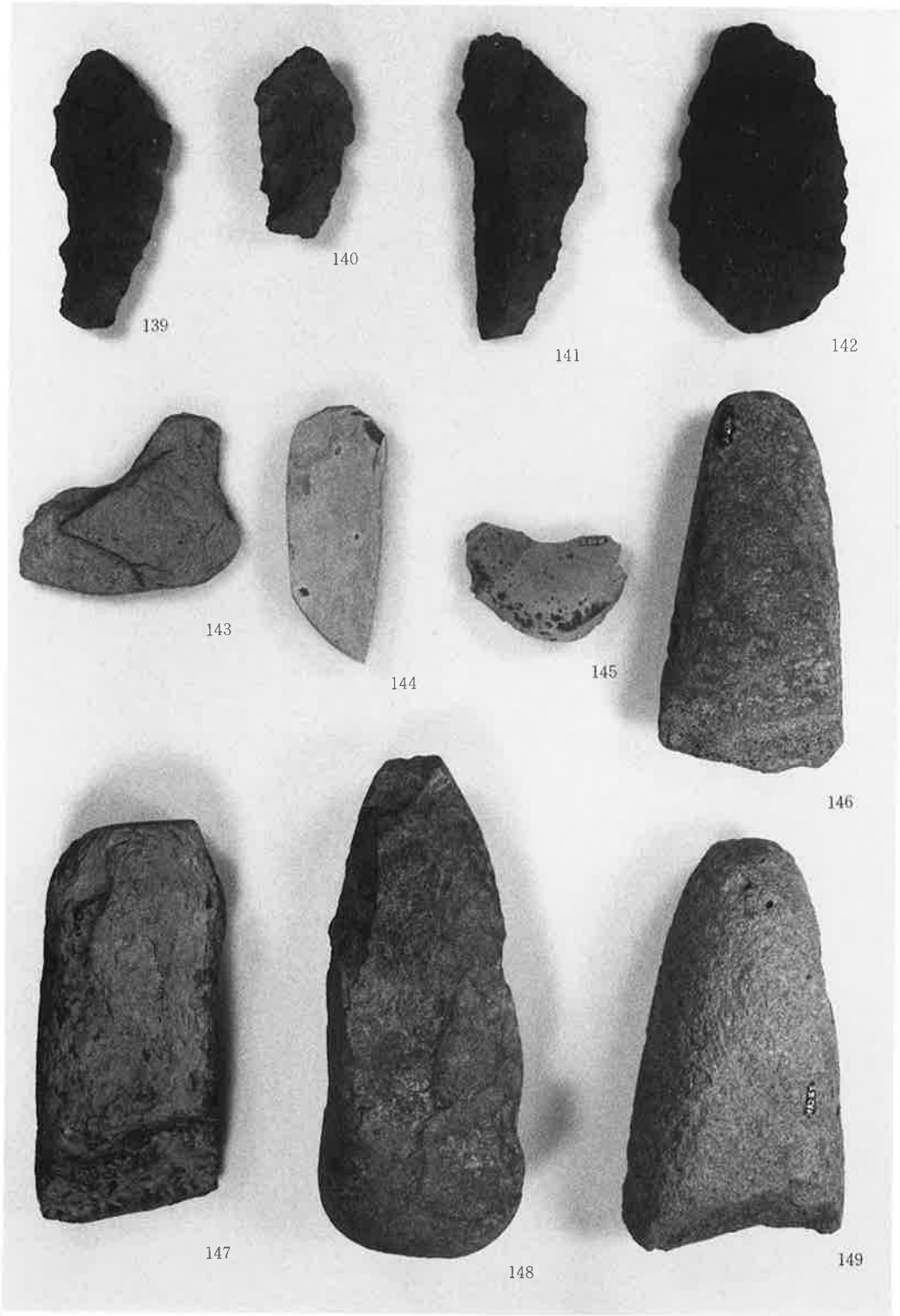
A 地点出土遺物



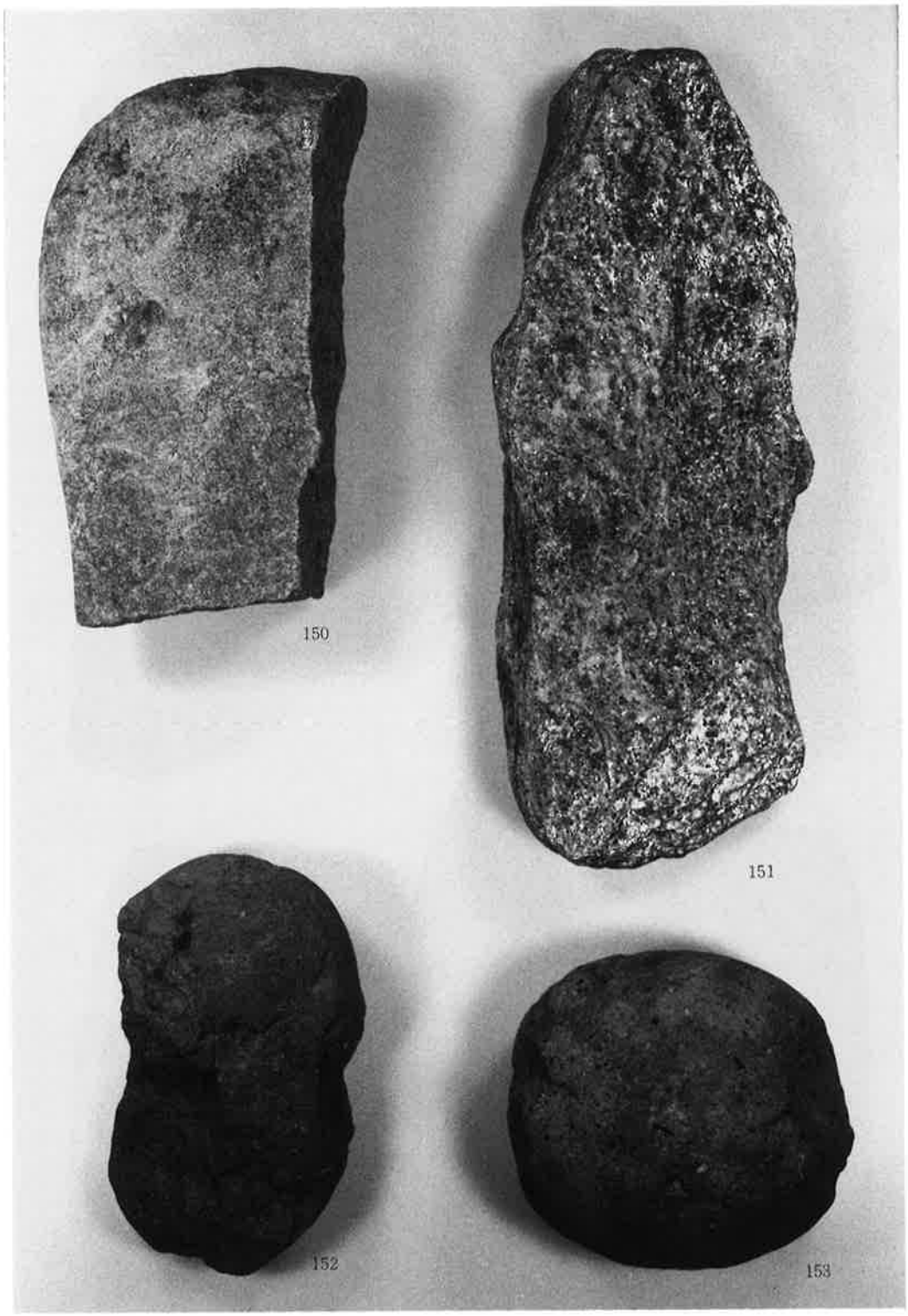
A 地点出土遺物



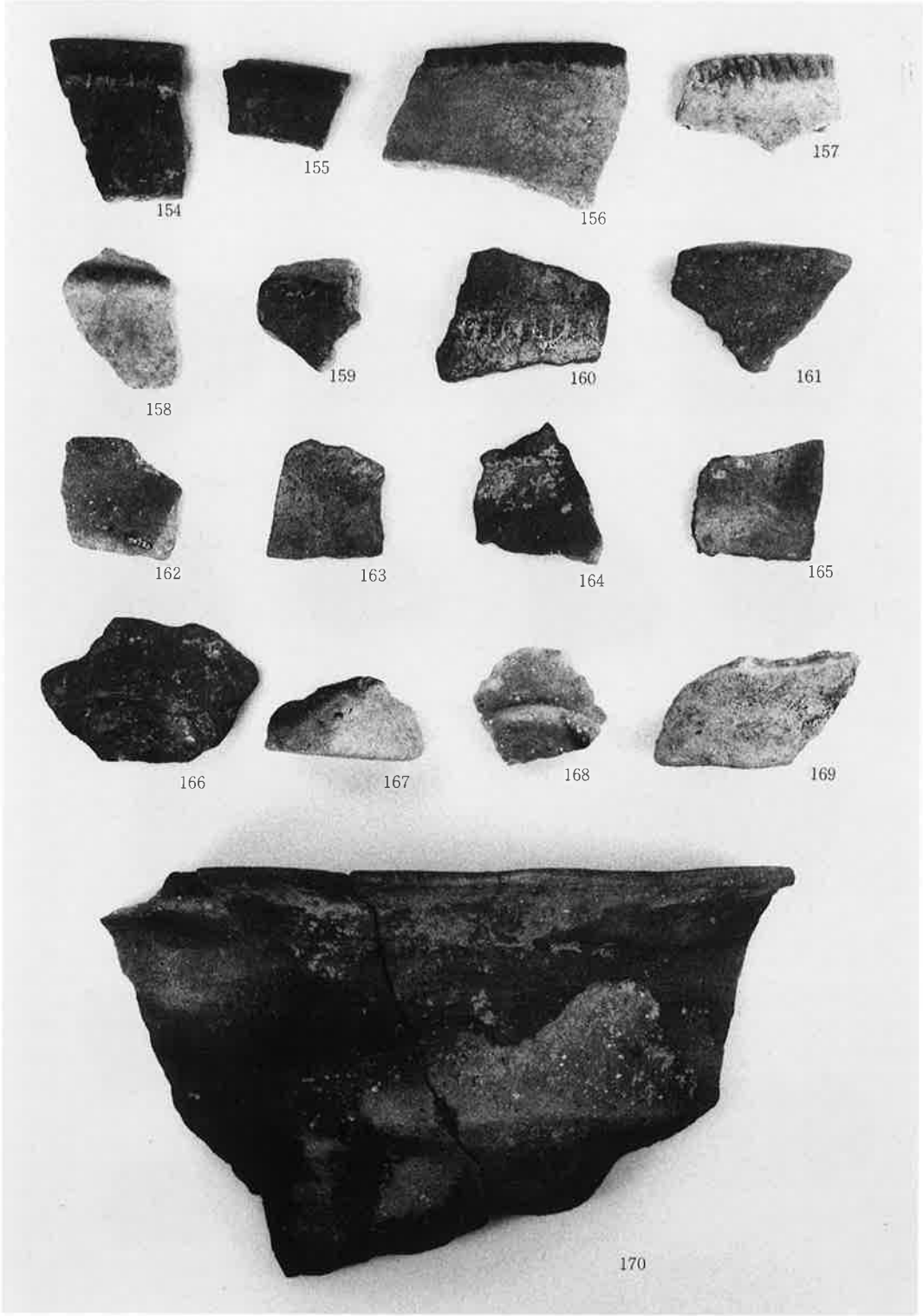
A 5 トレンチ出土遺物



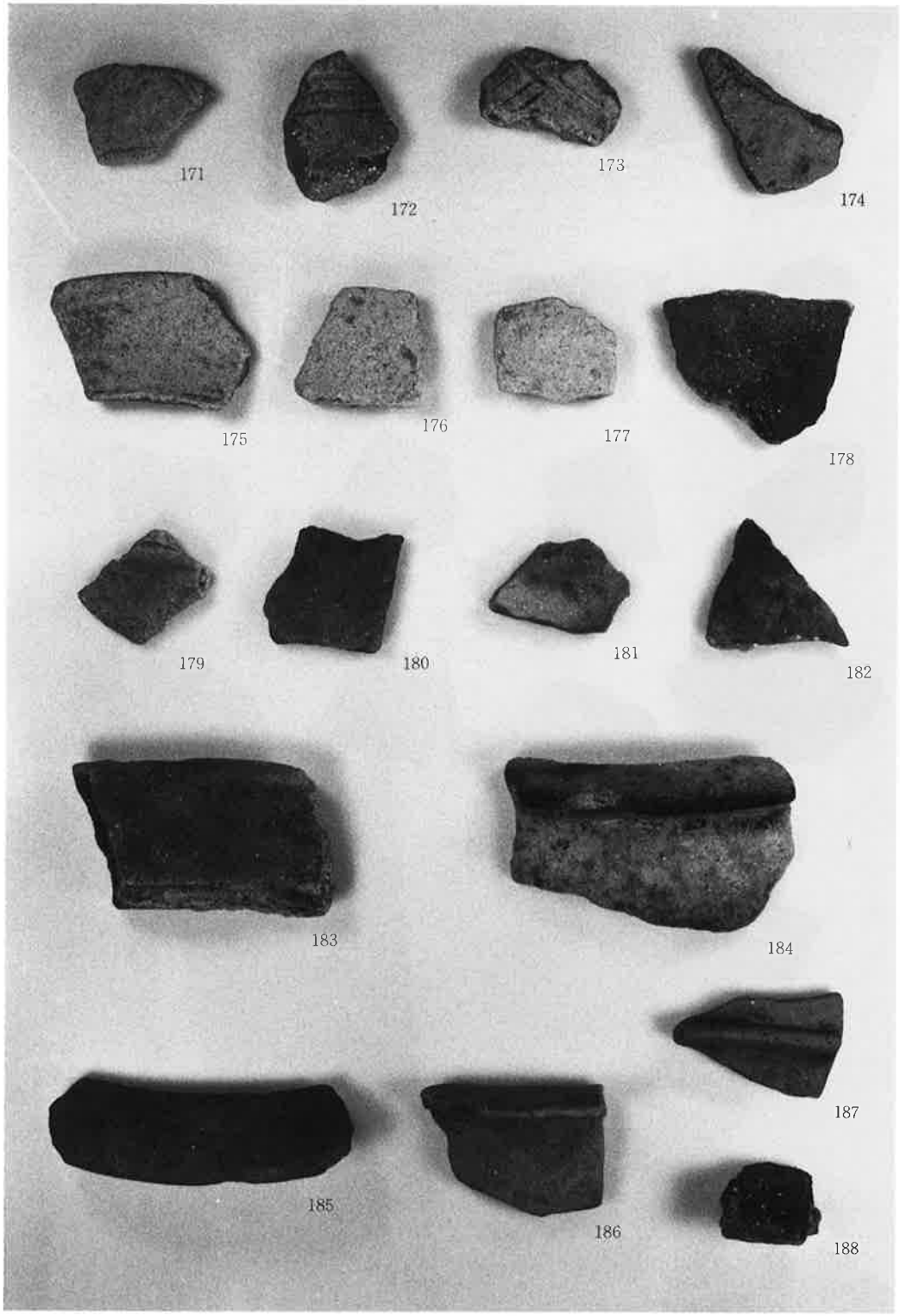
A 地点出土遺物



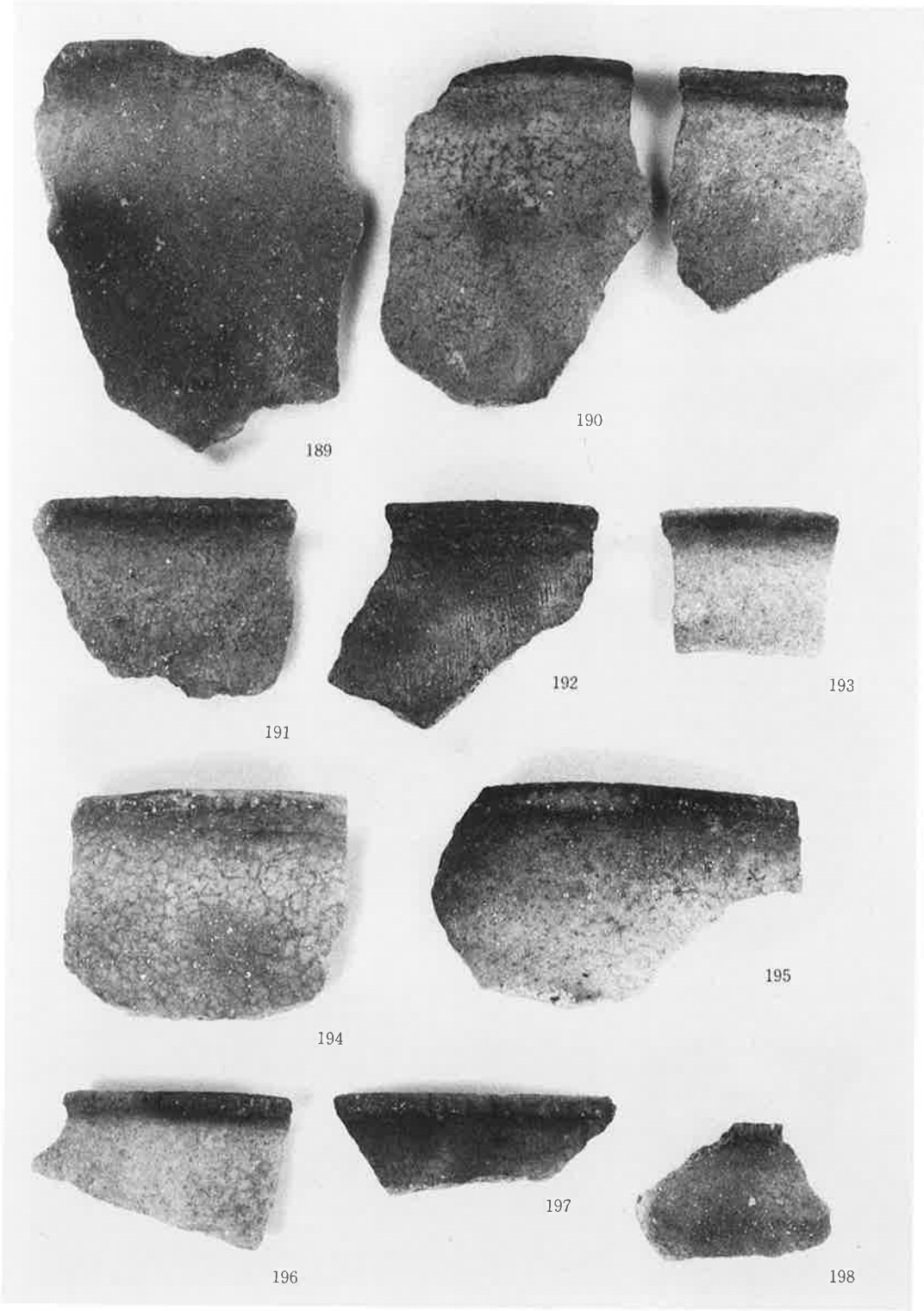
A 9 トレンチ出土遺物


154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170

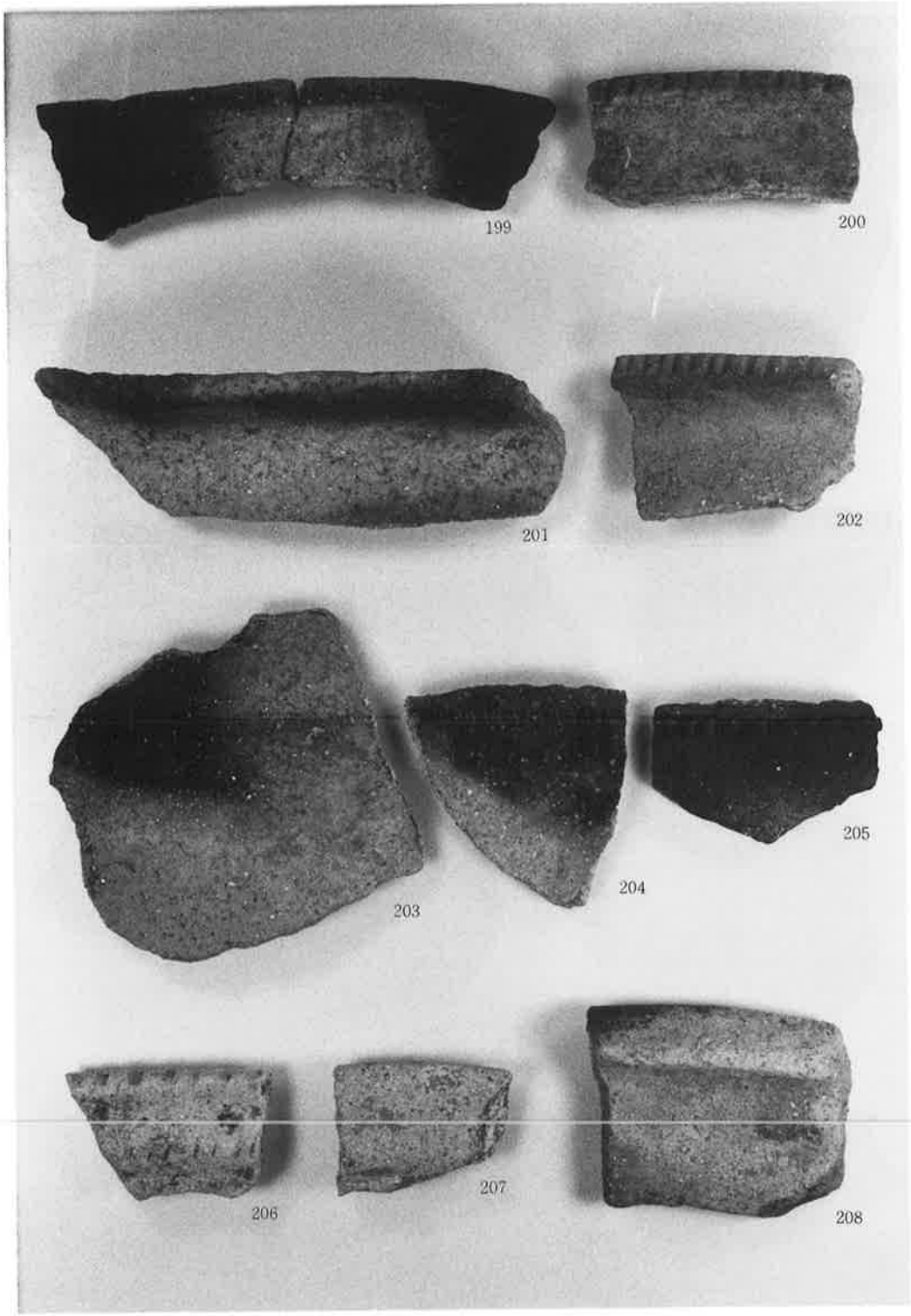
A 2 トレンチ出土遺物


171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188

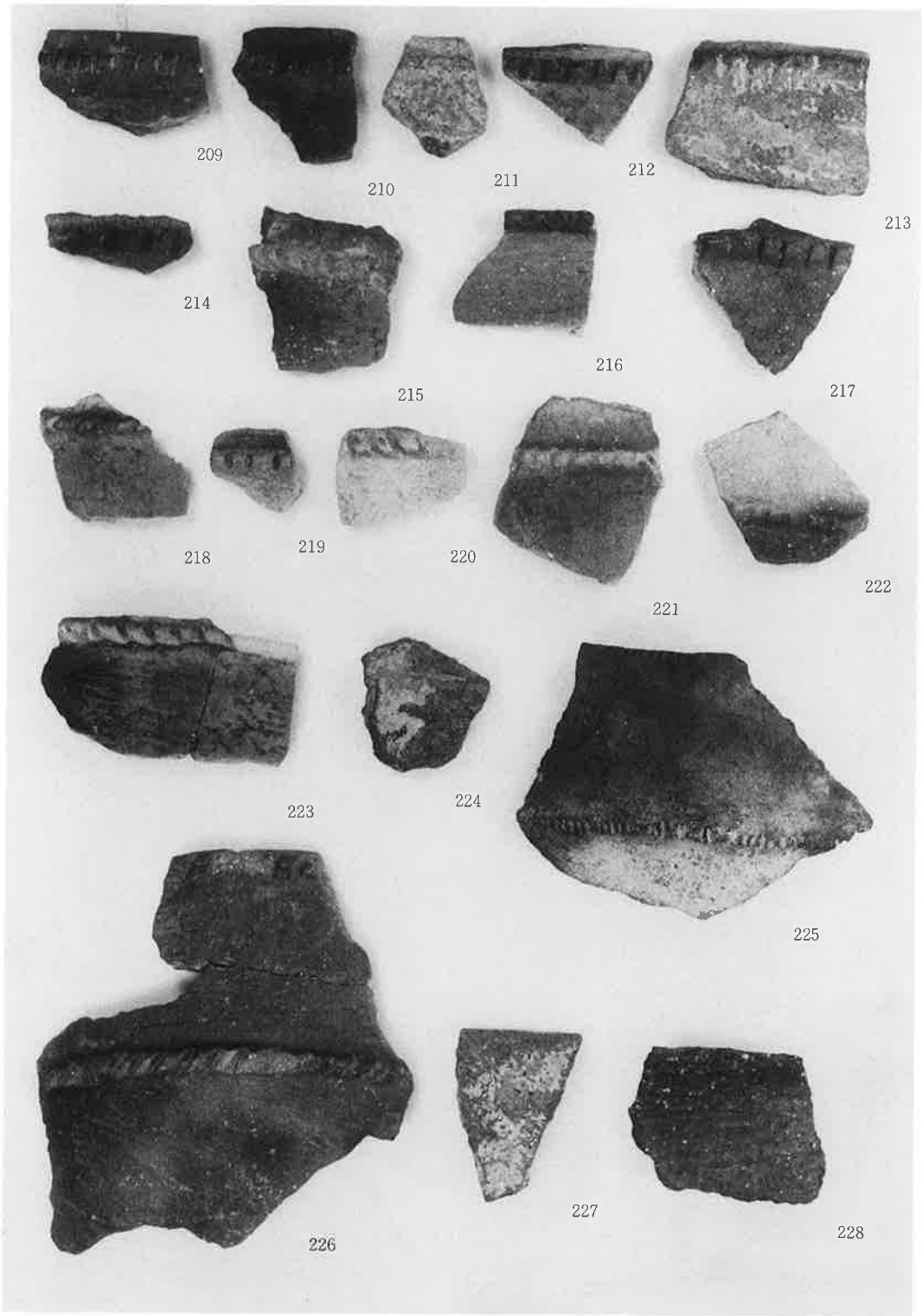
A 2 トレンチ出土遺物



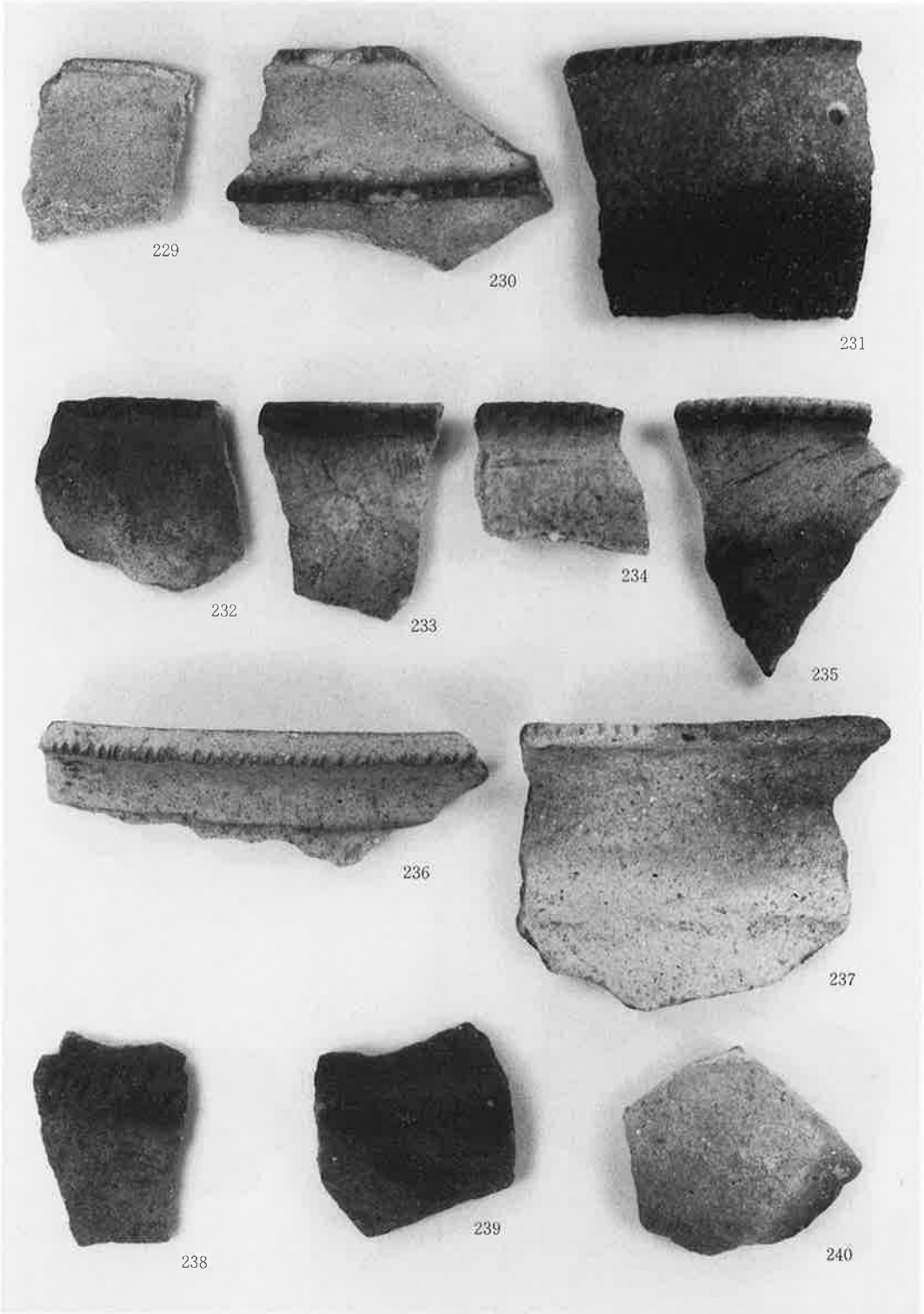
A 2 トレンチ出土遺物



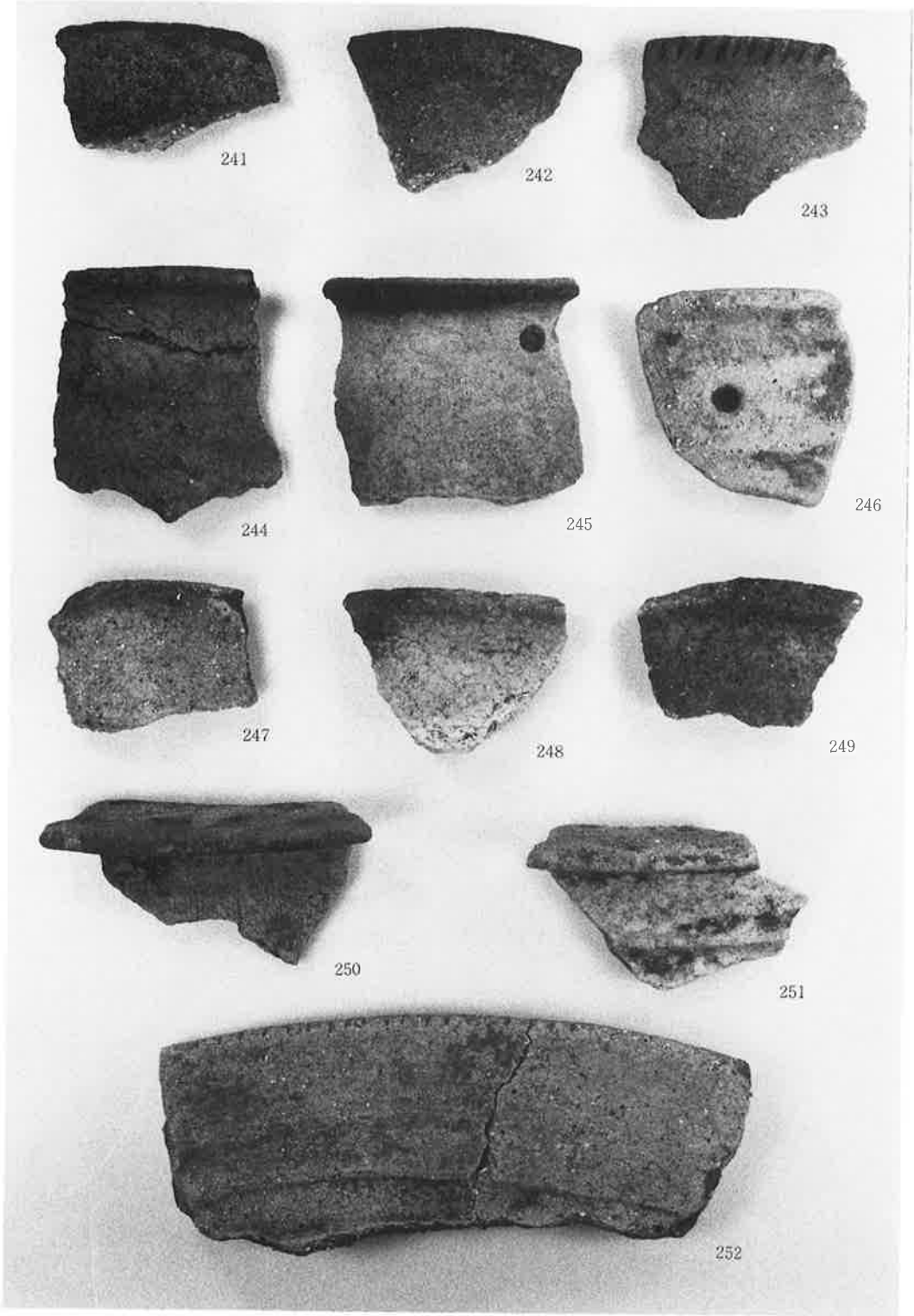
A 2 トレンチ出土遺物


209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228

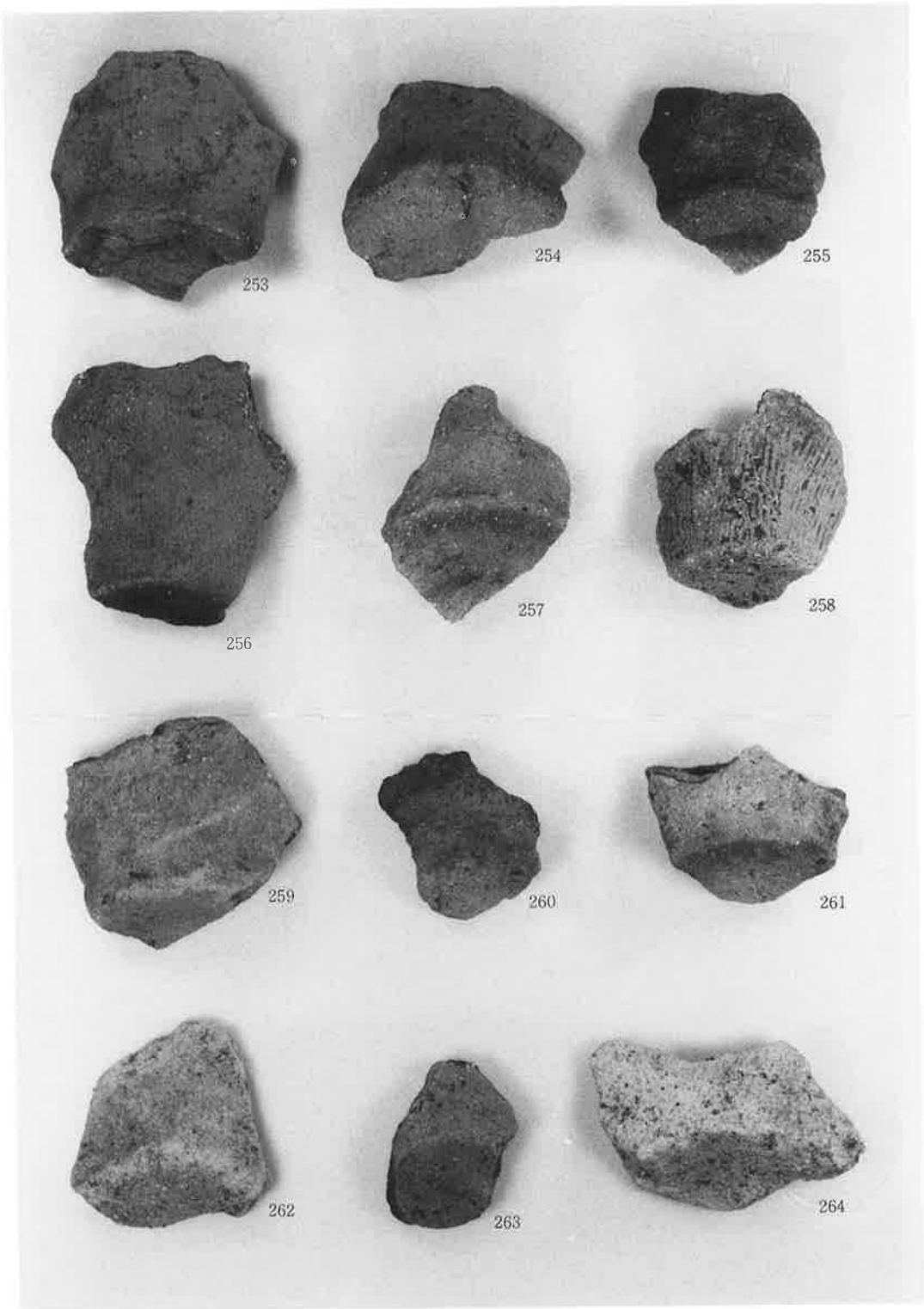
A 5 トレンチ出土遺物



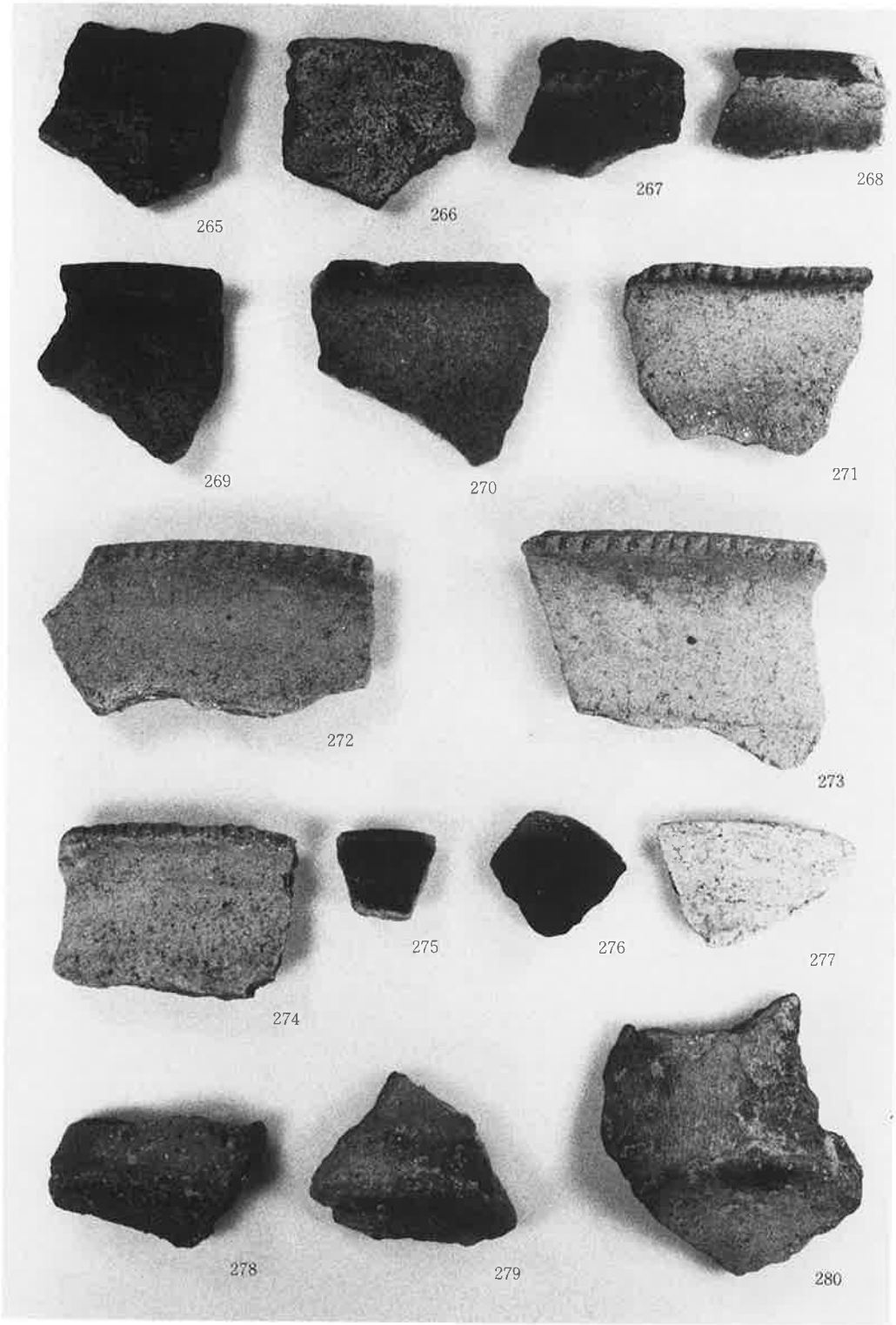
A 5 トレンチ出土遺物



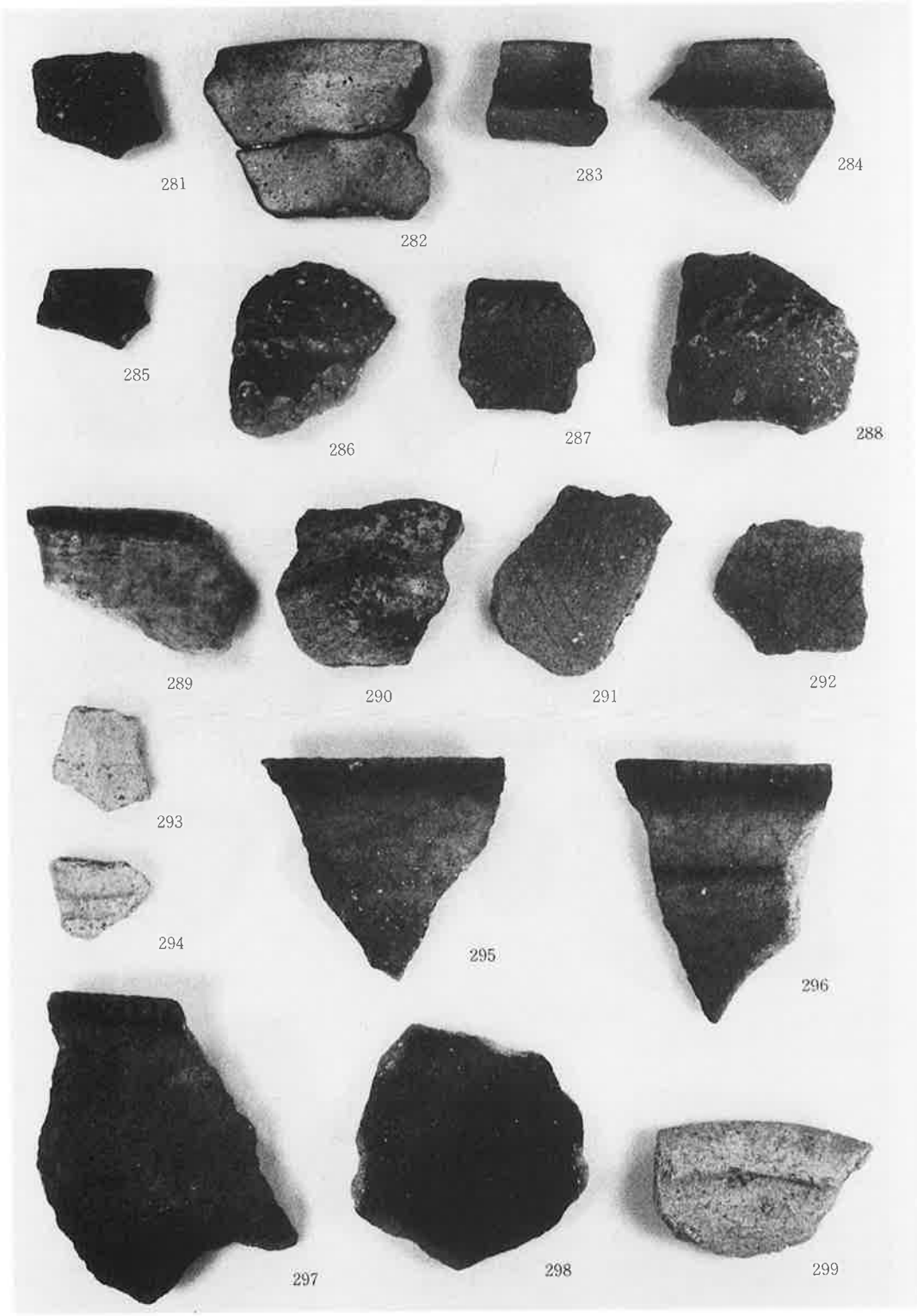
A 6 トレンチ出土遺物



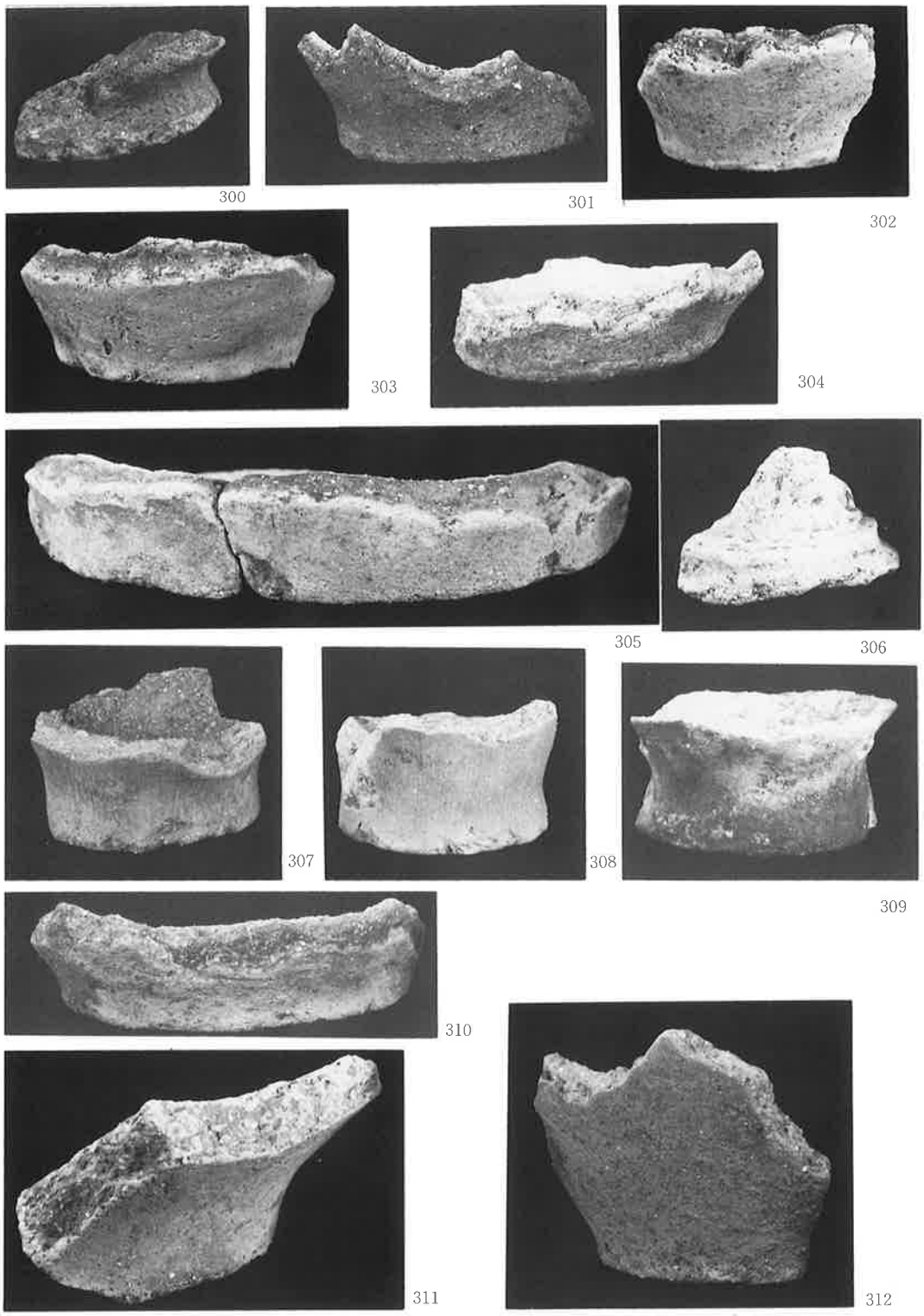
A 6 トレンチ出土遺物



A 7 トレンチ出土遺物


281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299

A 9 トレンチ出土遺物



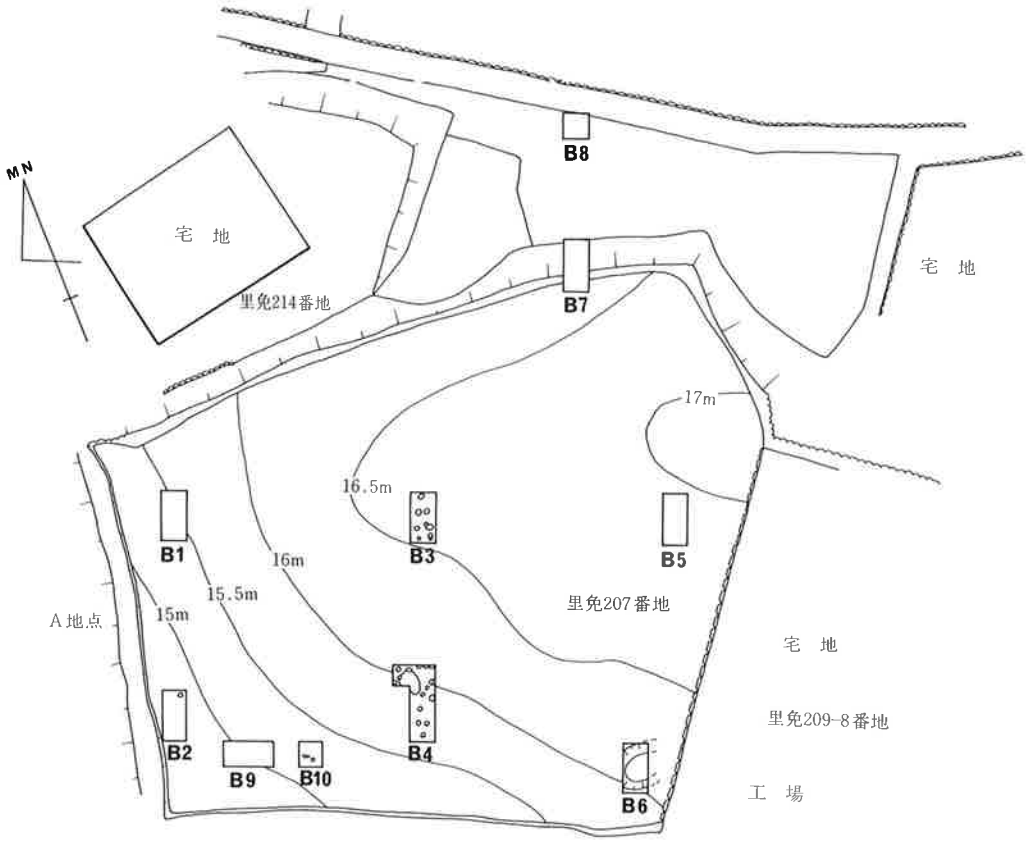
A 2・8・9トレンチ出土遺物

2．Ｂ地点の土層および遺構・遺物（第９図）

Ｂ地点の10箇所のトレンチでは、東側が最も高く西側方向へなだらかに傾斜している。その末端にＡ地点からの排水溝がつづき南東へ延びている。Ａ地点との標高差は約80cmである。この地点の東側から南側にかけては近年、宅地および工場・製材所として利用されている。北側の一段低くなった畑地として利用されていた所に８トレンチを設定し、傾斜地に７トレンチを設定した。１・３・５・７トレンチにおいては遺物包含層の確認はできず、地山直上まで攪乱状態であった。３トレンチはその地山に掘り込んだピットが検出された。Ｂ地点全体から見て、西側から東側にかけて遺物包含層が確認された。８トレンチ付近はかつて貝塚があったらしく貝層が堆積していた。しかし、地下げしたとのことで攪乱状態であった。２トレンチの南側と９トレンチにおいて貝塚を発見した。Ａ地点の東側の７トレンチでは貝層の発見はできなかったが、自然遺物が多数出土しているため、このトレンチ付近まで分布していたと思われる。

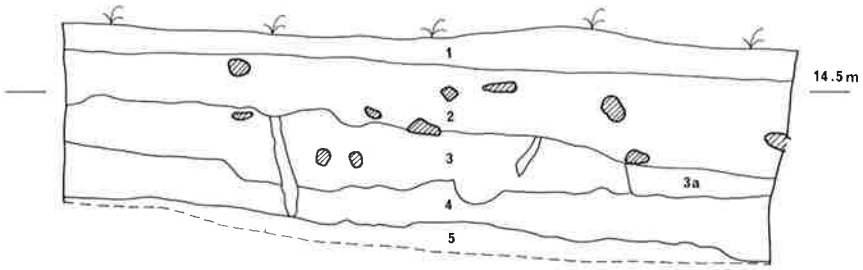
土　層（第10図・第11図）

１・３～５・７トレンチでは耕作土の下に遺物包含層が検出されず、濁黄褐色玄武岩風化土層の地山があった。その地山も耕作土が薄いため、機械力によるツメ痕が残っていた。ここでは比較的土層の保存状態が良かった西側から南側の２・９・10トレンチについて説明する。

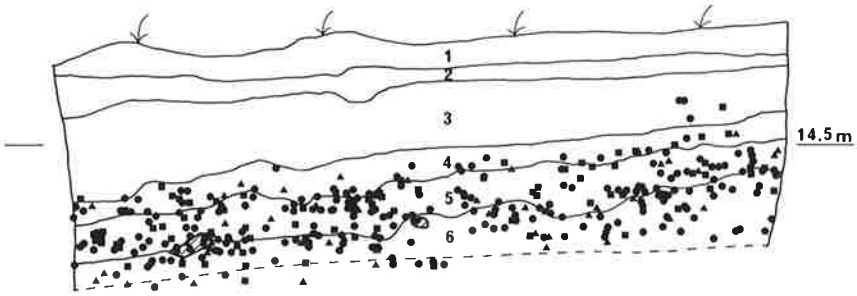


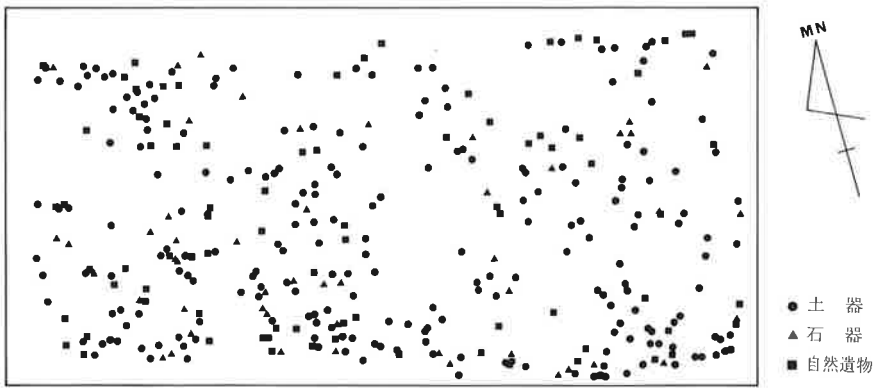
第９図　池田遺跡Ｂ地点調査区設定図（$\frac{1}{800}$）

この地点の基本土層は１層が現在の耕作土、２層は黒褐色粘質土で、２・９トレンチのみに分布している。この層は９トレンチでは東側で５cm西側で20cmの堆積であった。２トレンチでは北側で20cm、南側で50cmと厚くなっていた。この土層上面には自然石を一面に敷き詰めた遺構があった。時期的には中世の遺物が主体であったが、性格・規模については不明である。この２層の下の３層が黒褐色混貝層である。２トレンチの南側と９トレンチにおいて確認できた。この貝層の厚さは９トレンチの東側で25cm、西側で50cmであった。貝塚の中心は９トレンチと思われる。遺物には弥生土器・石斧・磨石・石鏃等があった。２トレンチでは３ａ層にあたるが上面はカットされている。４層は褐色粘質土で、２トレンチでは３層にあたる。５層は暗褐色粘質土で、２トレンチでは４層にあたる。６層は赤褐色粘質土層で、２トレンチでは５層にあたる。10トレンチでは２層と３層が発見できなかった。４層の褐色粘質土層の上部に茶褐色粘質土層と、暗褐色粘質土層が堆積していた。北側の８トレンチにおいては、図示しなかった



第10図　Ｂ２トレンチ東壁（$\frac{1}{40}$）





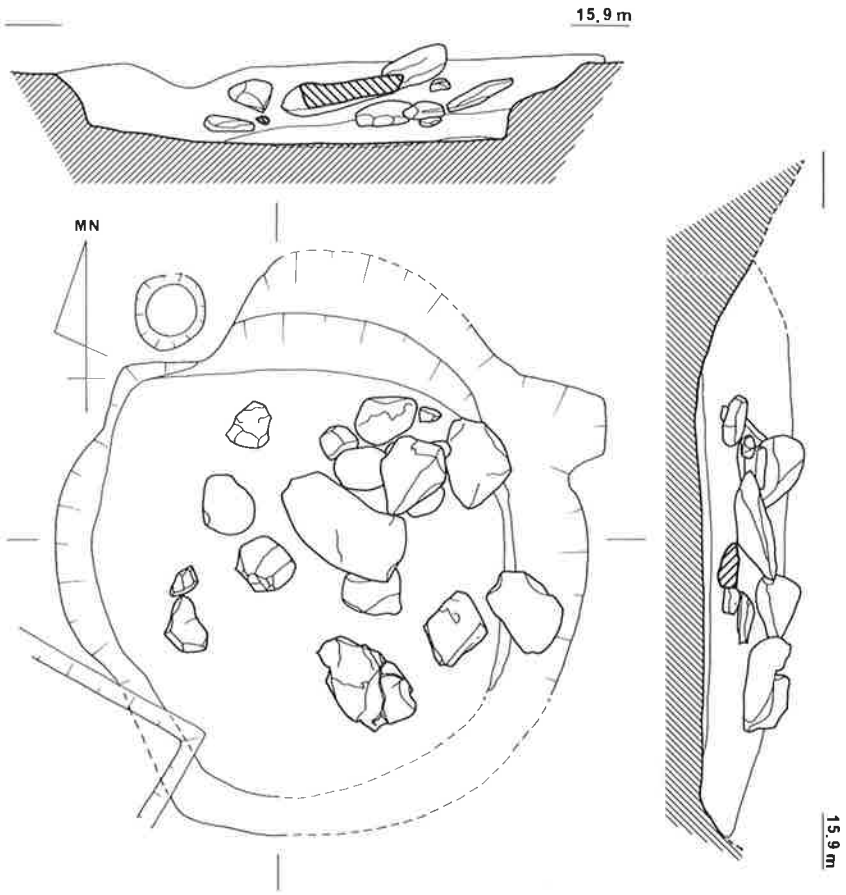
第11図　Ｂ９トレンチ遺物分布図（$\frac{1}{40}$）

が、2 m×2 mの狭いトレンチの北側で攪乱を受けた褐色混貝層があった。この層は柔らかくてふかふかしていた。その下に褐色粘質土層があり、この層も一部であるが攪乱されていた。その下が暗褐色粘質土層で、赤褐色粘質土層へとつづいている。9トレンチと違ってこの貝層では多くの貝類が出土しており、今後科学分析を行いたいと考えている。

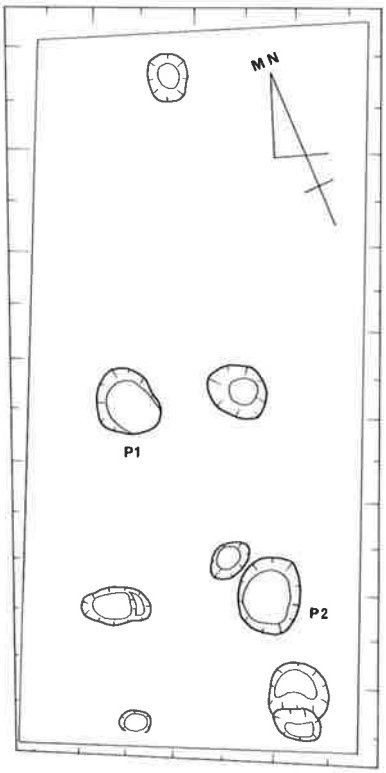
遺　構

土　壙（第12図）

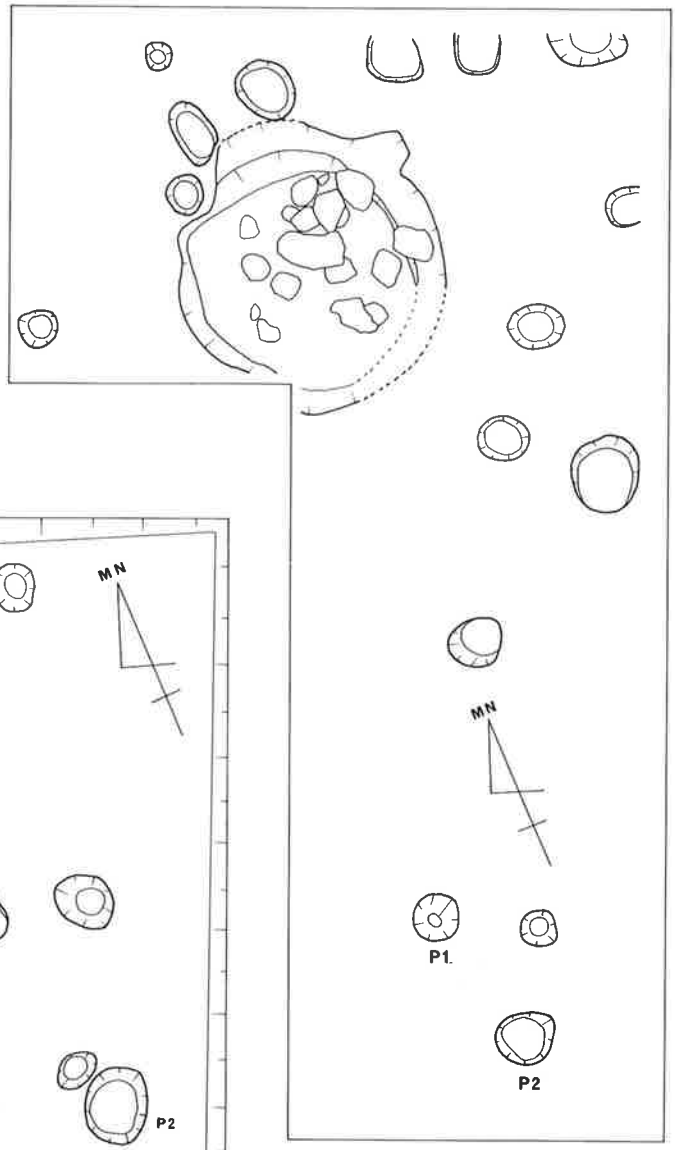
4トレンチの北側において地山に掘り込んだ茶褐色土層が検出されたのでトレンチを拡張した。その結果、径1.4mの円形の土壙が検出された。掘り込みは20cmと浅かったが、土壙北東側ではやや扁平な自然石があった。遺物には石鏃9点・弥生土器191点・黒曜石製剝片など338点があった。また、中世期の土師器・瓦器・青磁も出土しているため、上部は削平されていると思われ遺物も流れ込みであろう。出土遺物等より考えると弥生前期末頃と思われるが、土壙の周囲にはピットも検出されているため今後総合的に検討しなければならない。



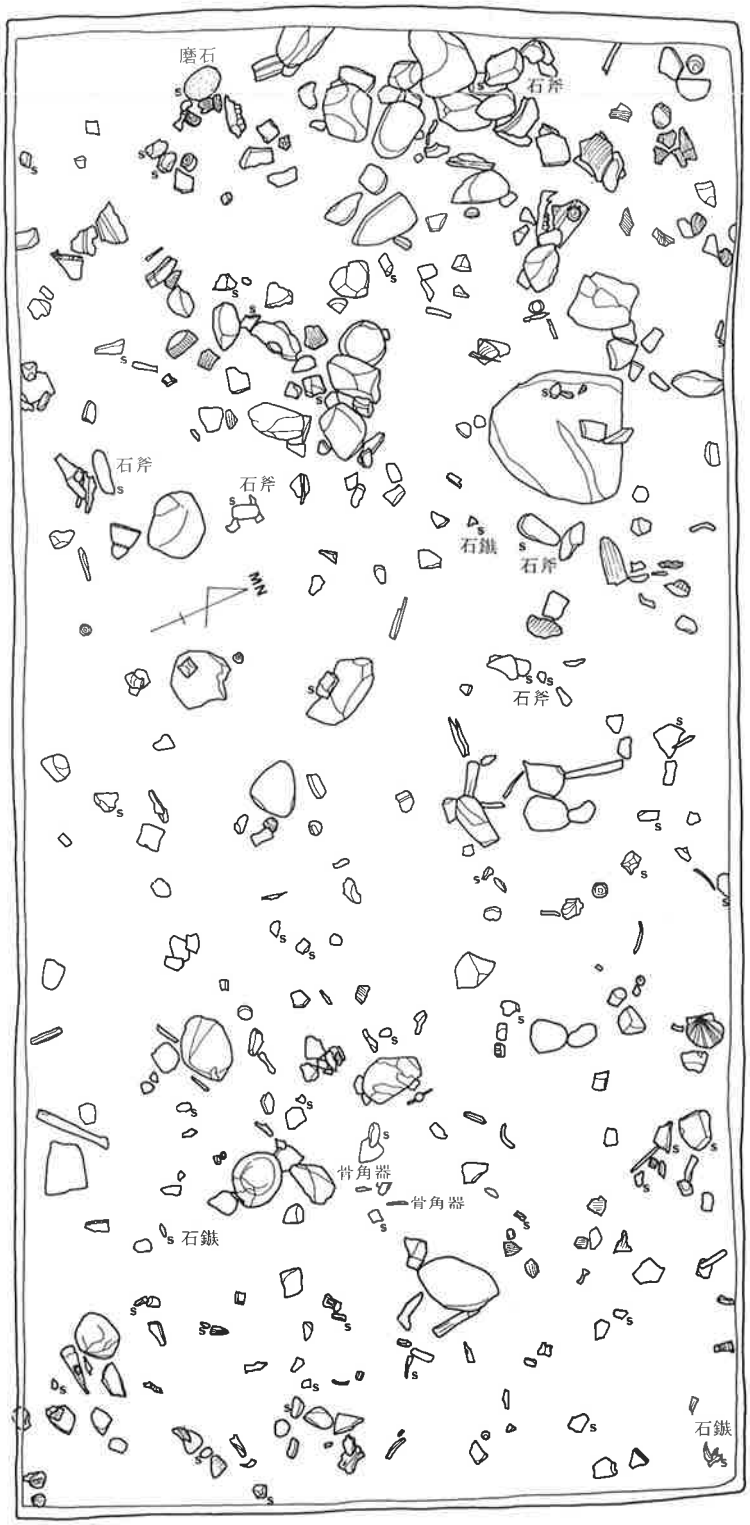
第12図　B4トレンチ土壙平面図（1/20）



第13図　B3トレンチピット平面図（$\frac{1}{40}$）



第14図　B4トレンチピット平面図（$\frac{1}{40}$）



第15図　Ｂ９トレンチ３層遺物出土状況（$\frac{1}{20}$）

落ち込み

図示しなかったが、6トレンチにおいて落ち込みが検出された。当初は中世期の墓地ではないかと考えていたが、遺物・規模等から落ち込みとして報告しておく。このトレンチでは耕作土直下に地山である玄武岩風化土層が分布しており、落ち込みはこの地山に最も深いところで70cm、幅3.3mで擂鉢状を呈していた。遺構はまだ一部東側と西側に延びており楕円形を呈すると思われる。 この落ち込み内には灰黒褐色粘質土が覆い径10cm～30cm大の礫を積石状に配していた。上面にはやや大きい礫を下面には上面よりやや角ばった礫を使用している。礫内の出土遺物には約600点があった。土師器、龍泉窯系青磁碗・皿、白磁、滑石製石鍋・バレン状滑石製品、瓦器、スラッグ、土錘、瓦質土器、弥生土器などである。さらに人間の頭蓋骨も出土しているが分析は行っていない。これらより総合的に考えるとゴミ溜め的な利用が考えられ、不要品を投棄したと思われる。類例の増加を待ちたい。

ピット（第13図・第14図）

ピットは2～4、10トレンチにおいて確認できた。2トレンチでは1基のみであったが5層の赤褐色粘質土層の下部に赤く変色した焼土が一部北側で検出された。この焼土を掘り下げるとピットが検出できた。ピットは二段に掘り込んでおり、深さ約80cm以上あり中に炭化物が集中して検出された。遺物の出土はなかったが土層状況から考えると縄文晩期頃のピットである可能性がある。この5層から掘り込んだピットは、2トレンチのみで9トレンチでは検出できていない。狭い範囲に分布しているのであろうか。3トレンチでは耕作土の下に玄武岩風化礫層の地山があり、ピットはこの地山面に掘り込まれて9基が検出された。径20cm～30cmでP1より黒曜石製剝片2点・石核1点、安山岩製剝片1点の4点があった。またP2からは黒曜石製剝片1点、安山岩製剝片1点、灰青色黒曜石製剝片1点、弥生土器細片18点があった。時期的には上面が削平されているため弥生期か中世期と考えられる。4トレンチでも地山に掘り込まれて16基が検出できた。径約20cm～30cmに集中するようだ。P1・P2より炭化物が検出できた。これらのピットは時期的にはやはり弥生期か中世期と思われる。図示しなかったがB10トレンチで3基検出されている。2層から3層へ掘り込まれており、弥生期の所産であろう。

9トレンチの調査では、遺物出土状況の記録は3層から$\frac{1}{10}$で実測を行い405点を取り上げた。以下の層においては、遺物の出土状況は$\frac{1}{20}$のドットマップを作成し347点を取り上げた。しかし、これ以外にも層位で取り上げた遺物もある。第11図で3層出土の遺物は壁面からの出土である。遺物は4層から6層下部まで出土しているが、どの層も弥生土器が多く、縄文土器は少なかった。2トレンチの調査では、2層中の礫を$\frac{1}{10}$で実測を行い、礫を取り上げながら行った。遺物の出土状況は$\frac{1}{20}$のドットマップを作成し、1,071点を取り上げた。この2・9トレンチは赤褐色粘質土層で調査を終了しているが、地山ではないためかなりこの地点は傾斜していたと思われる。A地点同様に谷状の地形を呈し一番低いところに貝塚が形成されたのであろう。

出土遺物

B地点から約11,000点が出土している。その内訳は弥生土器約3,500点、黒曜石製石核・剝片・砕片など約350点、自然遺物約1,200点、土師器約850点、輸入陶磁器約650点、縄文土器約200点、石鏃約60点などやはり膨大な量が出土している。なかでも2・9トレンチにおける出土量が優位を占めている。特に9トレンチは縄文晩期刻目突帯文を有する時期から弥生前期板付II式を有する時期まで幅広い時期に営まれた貝塚である。石器では石斧・石鏃・スクレイパー類が多かった。自然遺物では鹿、イノシシ類の骨、魚類、貝類がある。2トレンチでは人の歯も3点ほど出土している。酸性の土壌であるにもかかわらず自然遺物の残りも非常によかった。今後は科学分析を行う予定である。

313～341は表採資料の石鏃で、342はつまみ形石器である。345は滑石製小玉である。346は安山岩製石匙、347は百花台型の台形石器であろうか。348～387は石鏃で、377・378は剝片鏃である。379～382は尖頭状の石鏃である。383・387は大型の石鏃で、350・375・383は安山岩製である。388は磨製石剣で、刃部に刃こぼれが目立つ。先端部と基部を欠損している。対馬島産の石材を用いている。390は8トレンチ2層出土の淡青色のガラス玉である。402～404は黒曜石製石核である。404は腰岳産である。405～411は9トレンチ出土の石斧で、405・407・411は磨製石斧で、411は蛇紋岩製である。412・413は2トレンチ出土の石斧である。414～419は石錘・磨石・敲石の資料である。420は9トレンチの磨製品で石斧か。421～427は石銛・スクレイパーの資料である。428は敲石、429～432は安山岩製石核である。433～439は6トレンチ出土遺物で、433は石斧である。435は滑石製石鍋の再加工品で両面より穿孔している。436～438は石鍋の資料である。439は磨製で側縁部が磨滅している。446～517は2トレンチ出土品である。

440～451は縄文晩期資料である。440は外面より穿孔している。441～448は刻目突帯文の資料である。449は口縁部が外反し端部を丸く仕上げている鉢である。450・451は底部で平底である。450～455は丹塗りが施されている資料である。452は縦にハケ目のあと研磨している。同じく453・454は内面を研磨、455は口縁部が外反する壺である。456・457は弥生土器の壺肩部の資料で3条の沈線がめぐっている。461・462は縄文晩期平底底部である。463～468は弥生前期資料で、470～473は中期中葉の甕形土器口縁部資料である。474～479は外反する口縁端部に刻目を施した甕形土器である。481・482は胴部に2条の刻目を施す資料である。484～487は口縁部を逆L字状に外反した資料で、487～489は口縁直下に1条～2条の突帯がつく資料である。491～492は口唇部に2段の刻目が施されており金海タイプの甕棺になると思われる。493は口唇部全体に刻目が施されている。この部分と平担部分に丹塗りが施されている。甕棺の資料であろう。494は外面底部に木葉文が残っている。495～497は大きく外反する口縁部をもつ資料で、495は口縁下に刻目が施されている。496は2条の沈線がめぐりその下がハケ目調整されている。内面もハケ目調整。495・496は口唇部に刻目、497は刻目が上下にある。498は穿孔がある資料。500～507は逆L字状口縁をもつ甕形土器で、500～502は縦方向にハケ目調整、504～507は口縁

部直下に１条の突帯がめぐっている。508～517は底部片である。510・511は上げ底状を呈する。516・517は内湾気味に立上がる底部資料で上げ底を呈する。中期中葉の資料である。

518～526は４トレンチ北側の土壙内出土の土器である。518は直立する口縁部に三角形の突帯を貼付け刻目を施している。519は内面ナデ調整をし、外面に三角突帯を口縁直下に貼付けている。520・521は外反する口縁端部に刻目を施すもので、520は段をもつ資料である。522は形態は520と同じであるが刻目が施されていない。523・524は壺形土器の肩部資料である。523は波状文、524は３条の沈線がめぐっている。525・526は底部の資料である。時期的には弥生前期末と考えられる。

527～542は８トレンチ混貝層内出土の遺物である。527は胎土に滑石粉末を混入した縄文中期阿高系土器であろう。528・529・531は同一個体になる深鉢の資料である。口縁部は折れ曲がり内向きとなり波状を呈し、２条の沈線がめぐる。また、突起の頂部には刻みが施され沈線間にも刺突文が加えられている。胴部上位の頸部に４条の沈線が描かれており、沈線状に施される文様として列点状の刺突文がある。縄文後期後半磨消縄文系の西平式土器である。530・532は内外面に貝殻条痕文を施している胴部である。533～537は口縁部に刻目をめぐらす晩期資料である。537は内外面より穿孔している。534は胴部に刻目を施している。538は黒曜石製石核。539は扁平磨製片刃石斧、540・541は黒曜石製石鏃で、540は鋸歯状に加工している。542は平底の底部片である。

543～565は９トレンチ出土土器である。543は胎土に滑石粉末を混入した縄文中期土器片であろう。544～557は晩期資料で、刻目突帯文期の資料である。544・554は灰褐色を呈し、胎土より同一個体の可能性がある。大きい刻目を施している。555は底部片、556は鉢である。558～587は弥生土器である。558は外面が研磨されている。559は内外面に丹塗りが施されている。560～562は壺の破片で沈線が施されている。563・564は同一個体と思われる資料で口縁端部に刻目を施し、やや口が反る程度のもので板付Ｉ式に近いものとしてあげた。外面に粗いハケ状のもので口縁部から胴部にいたる部分に縦方向に施されている。胎土に微細な金雲母を含み、精製された胎土である。565は口縁端部に刻目を入れ、さらに張り出した胴部に１条の刻目を施している。口縁はやや外反し、胴部はゆるく張り出す。内面は上部に、外面は全体にハケによる仕上げが行われている。566は壺肩部であろう。567は精製された胎土で壺口縁部である。567・568・574は２トレンチ出土遺物である。572は口縁部が肥厚し、刻目を施し、さらに下位に１条の刻目突帯文を有する。574は外反した口縁部に刻目を入れ、下位に１条の沈線が入れられており、ハケによる仕上げが行われている。575は肥厚した口縁部に太い刻目が施され横ナデ仕上げされている。口縁部に段がついている。576～579は精製された胎土をもつ壺の資料であろう。いずれも胎土に金雲母を含んでいる。576・579は縦に暗文風ミガキが施されている。580～583は丹塗土器、586は全体の器形は不明だが黒色研磨の精製土器である。587は口縁部に三角突帯が貼付けられており、胎土は精製された金雲母を含んでいる。588～601は10トレンチ出土遺物

である。588は内外面に丹塗り跡がある。589～596は口縁部の資料で、外反する口縁部に刻目を有するものと、有しないものとがある。593は口縁部を肥厚させている。596は口唇部上下に貝殻による刻目を施している。597は口縁端部に突帯を貼付け平担に仕上げている。胴部はあまり張らないようだ。598は胴部に貝殻による刻目を施している。600・601は同一個体と思われる。高坏であろうか。599は高坏口縁部で、淡黄褐色を呈する。602～607は９トレンチ出土の底部片である。甕および壺につながる資料で、すべて平底である。604は全体にハケ目を有する。606は10トレンチ出土である。608は板付Ⅰ式の壺であろうか。内外面淡黄褐色を呈する。

609～621は骨角器である。609～613・615～620は刺突具のヤスである。骨の同定を行っていないので材質は不明である。615・617・618は反りがある資料である。614は装飾品と思われる。下側を研磨している。621はサメ歯製牙鏃である。歯根部を扁平に研磨している。これはＡ７トレンチ出土。632は貝輪である。貝の種類は後日にゆずりたい。623～639は２トレンチ出土の自然遺物である。イノシシ牙、下顎骨、指骨、肩甲骨、頭骨、バンドウイルカ下顎骨、背椎、人間の歯などがあった。このほかにも多数出土している。640～656は９トレンチ出土の自然遺物である。２トレンチとあまり変化は認められないが、ガンタイ下咽頭骨、クジラ類がある。640は魚類背柱の装飾品と思われる資料で中央に穿孔がある。651・652は鹿角で、651は黒色に変色している。火を受けたものと思われる。652は先端部に８回にわたるカット痕がある。

657～703は６トレンチ出土遺物である。657～663は龍泉窯系縞連弁文青磁。662・663の皿を除くすべてが碗である。664は同安窯系青磁皿である。665～671は白磁で、665玉縁口縁をもつ碗、668は皿で見込みに花文が描かれている。669は口禿の皿である。671は白磁壺である。672～680は碗の底部で672～675が青磁、その他は白磁である。672は内面見込みに『河濱□□』とスタンプがある。678・680は見込みの釉を輪状にカキ取っている。681～690は国内産の土器である。681は外面茶褐色、内面淡茶褐色を呈する土師器捏鉢である。682は瓦質の甕であろうか。683は須恵質甕。684は須恵質壺か。685は東播系須恵質捏鉢の片口部分である。686～690は土師器碗と、糸切り底の皿である。691～695は土錘。696～698はバレン状滑石製品である。697は穿孔した部分に鉄片が付いている。699・700は鉄製品である。701は天目碗。702は青白磁合子身。703は青磁合身蓋である。704～724はＢ地点表採遺物で、704～706は龍泉窯系青磁碗。707～710は白磁碗・皿。711は青磁合身蓋。712は李朝青磁。713は14世紀後半～15世紀前半の青磁で、内面に雷文帯を有している。714は明染付の壺である。715・716は黄褐釉の壺。717は土錘。718は東播系。719は土師器皿。720は瓦器碗。721は穿孔のある滑石製品である。722は滑石製石錘。723・724は鍔がつく石鍋である。

B9トレンチ北壁土層

B9トレンチ南壁土層

Ｂ２トレンチ南壁

Ｂ９トレンチ東壁

B 9 トレンチ貝層内遺物出土状況

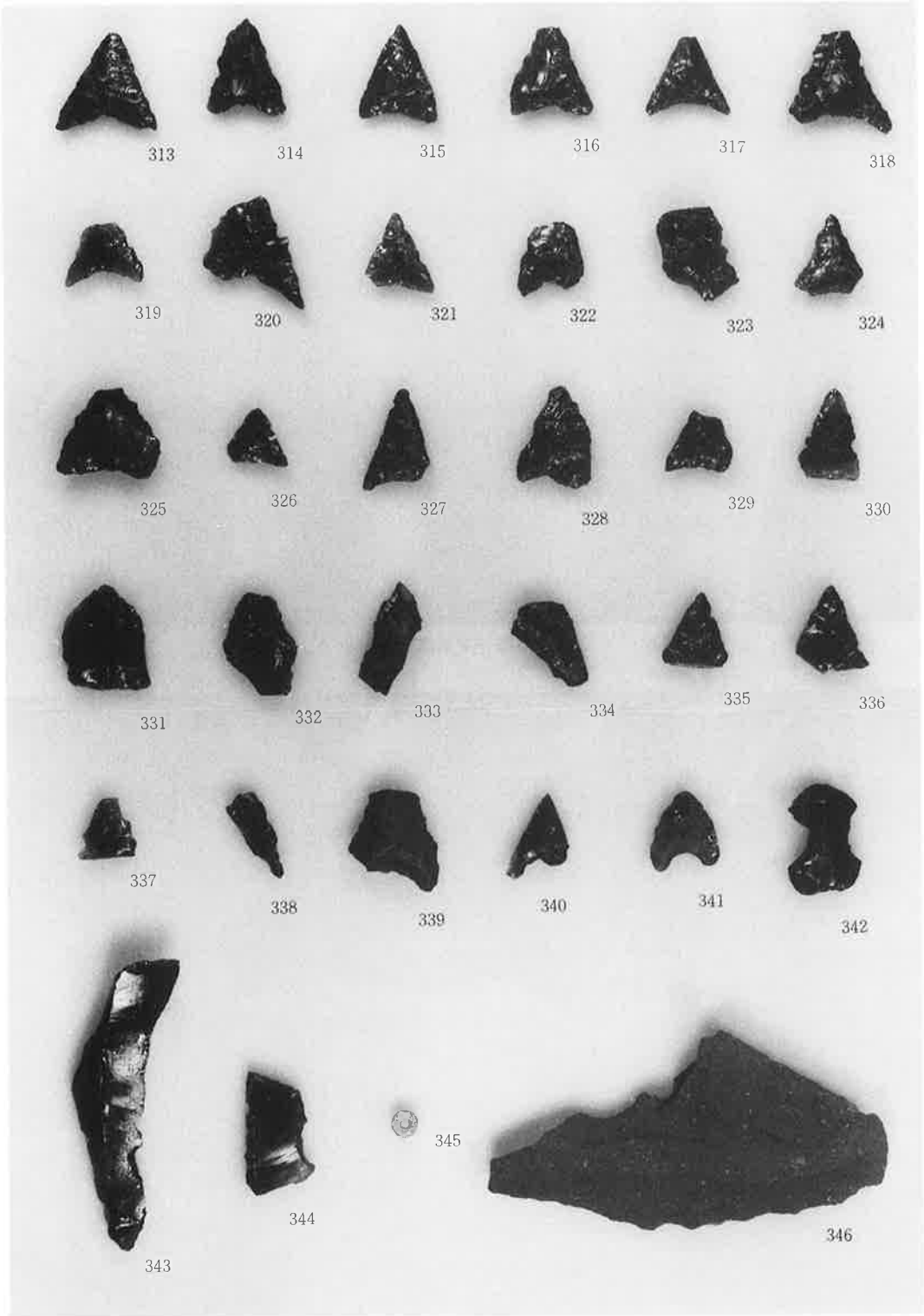
B 9 トレンチ貝層下部遺物出土状況

B 6 トレンチ落ち込み

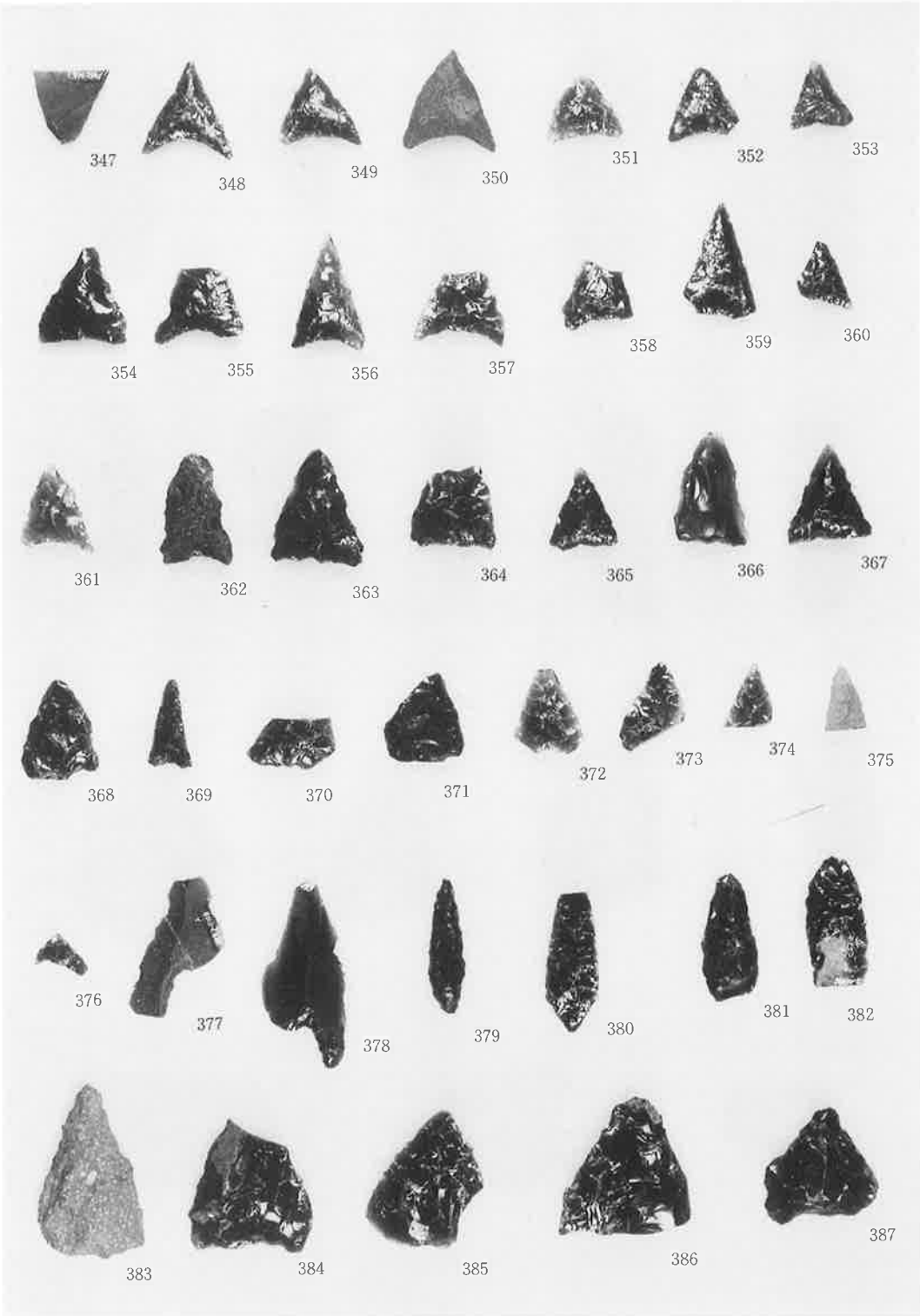
B 2 トレンチ遺物出土状況

B 9 トレンチ貝層内出土遺物

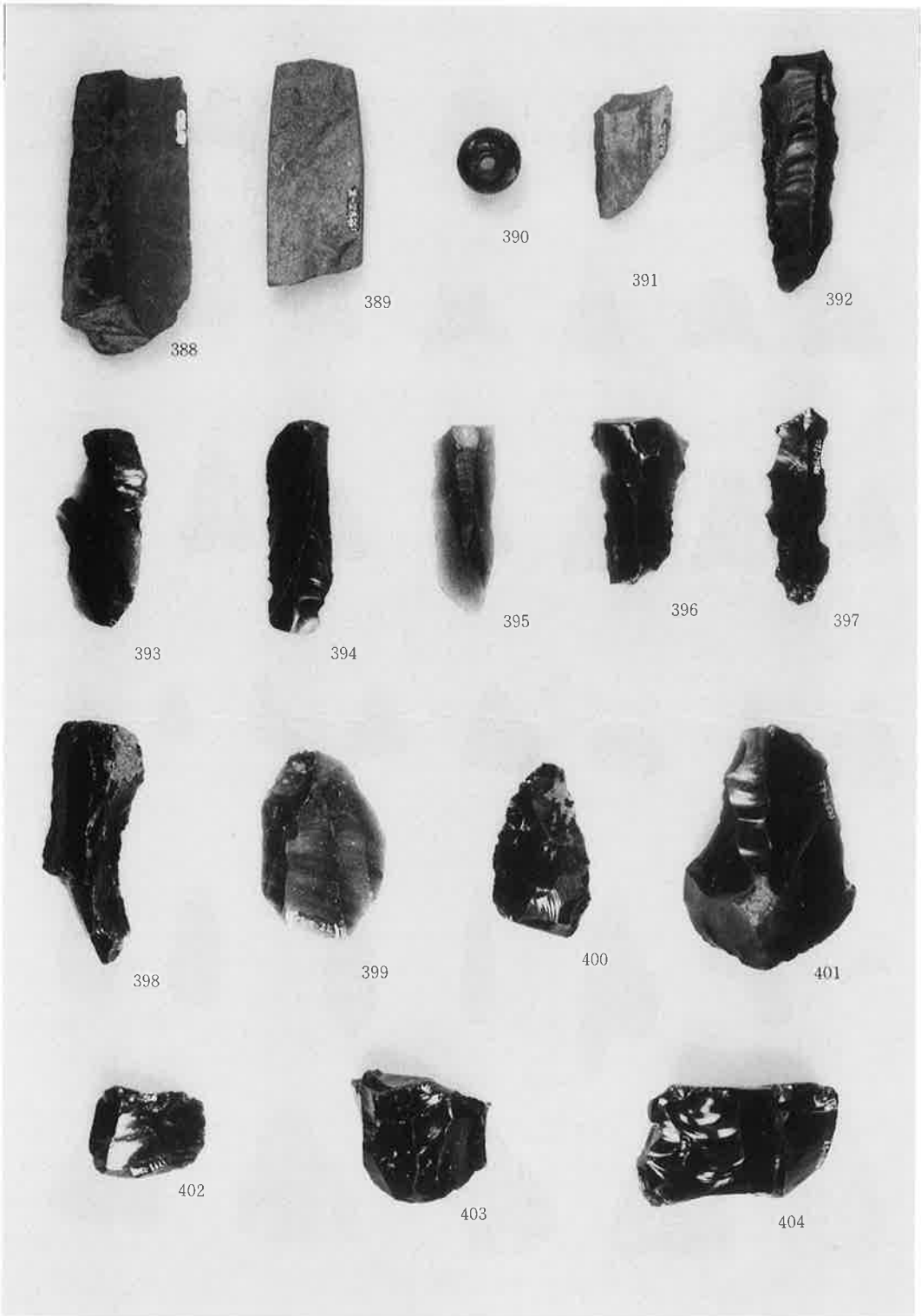
B 9 トレンチ貝層内出土遺物


313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346

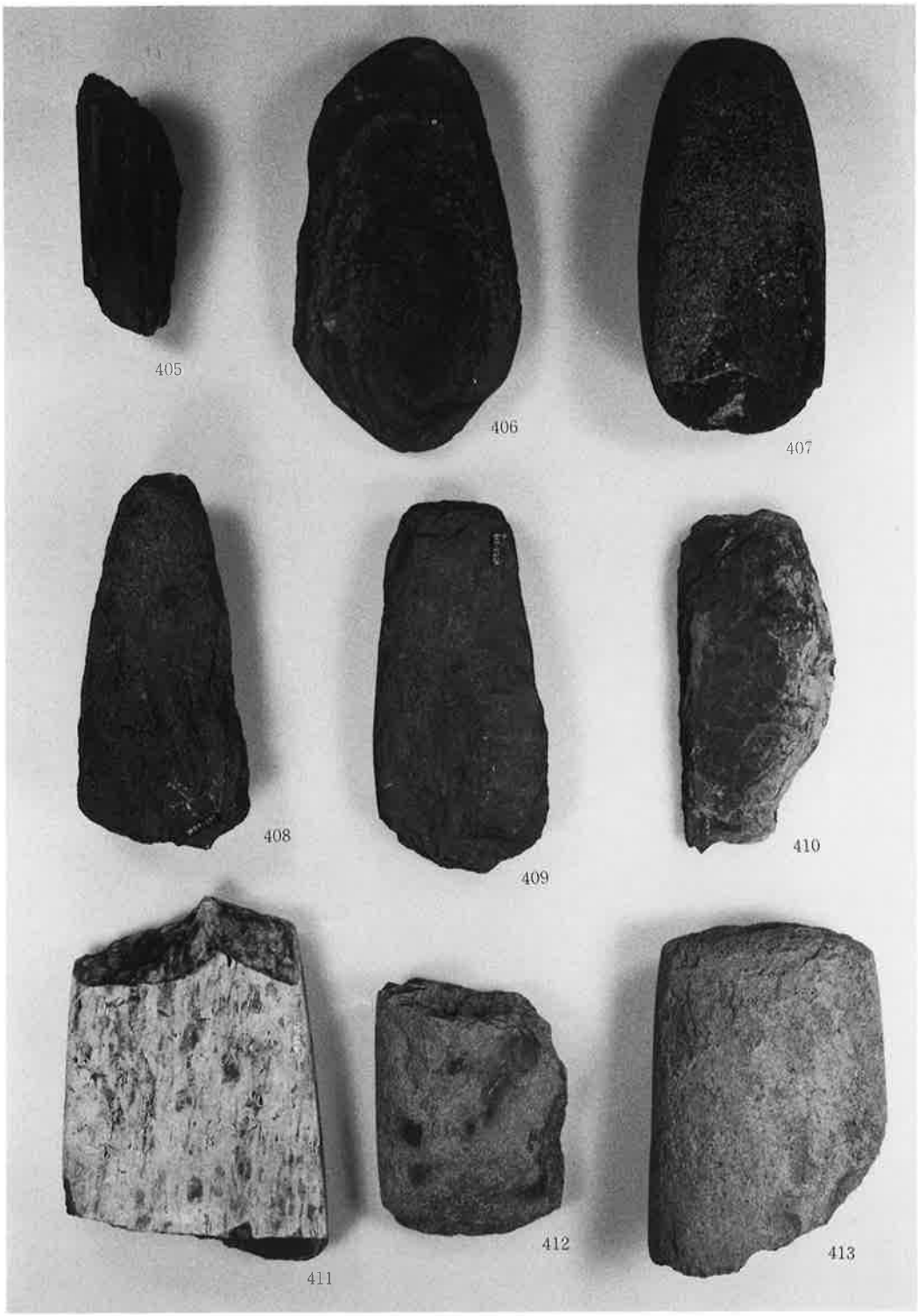
B地点表採遺物


347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387

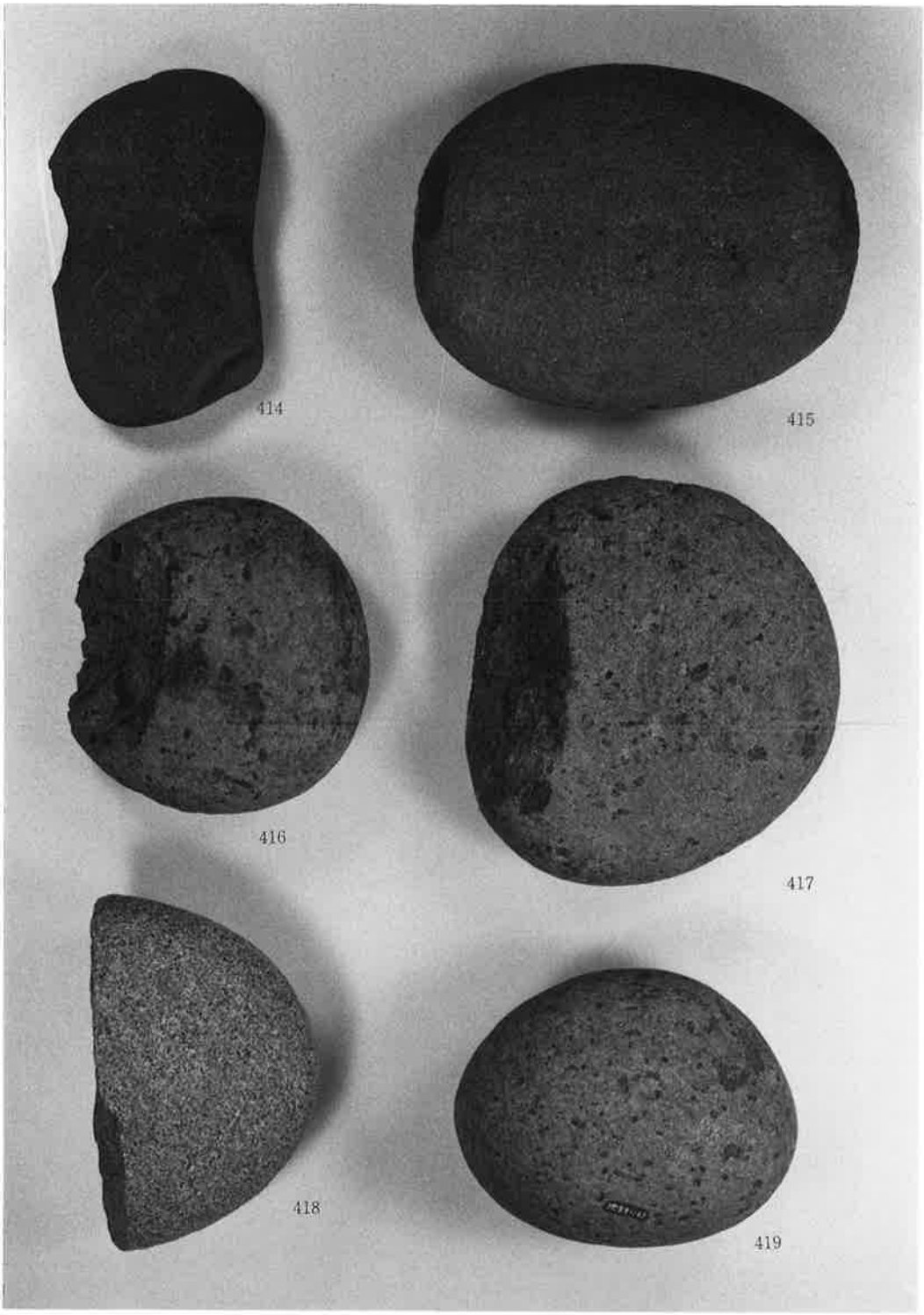
B地点出土遺物


388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404

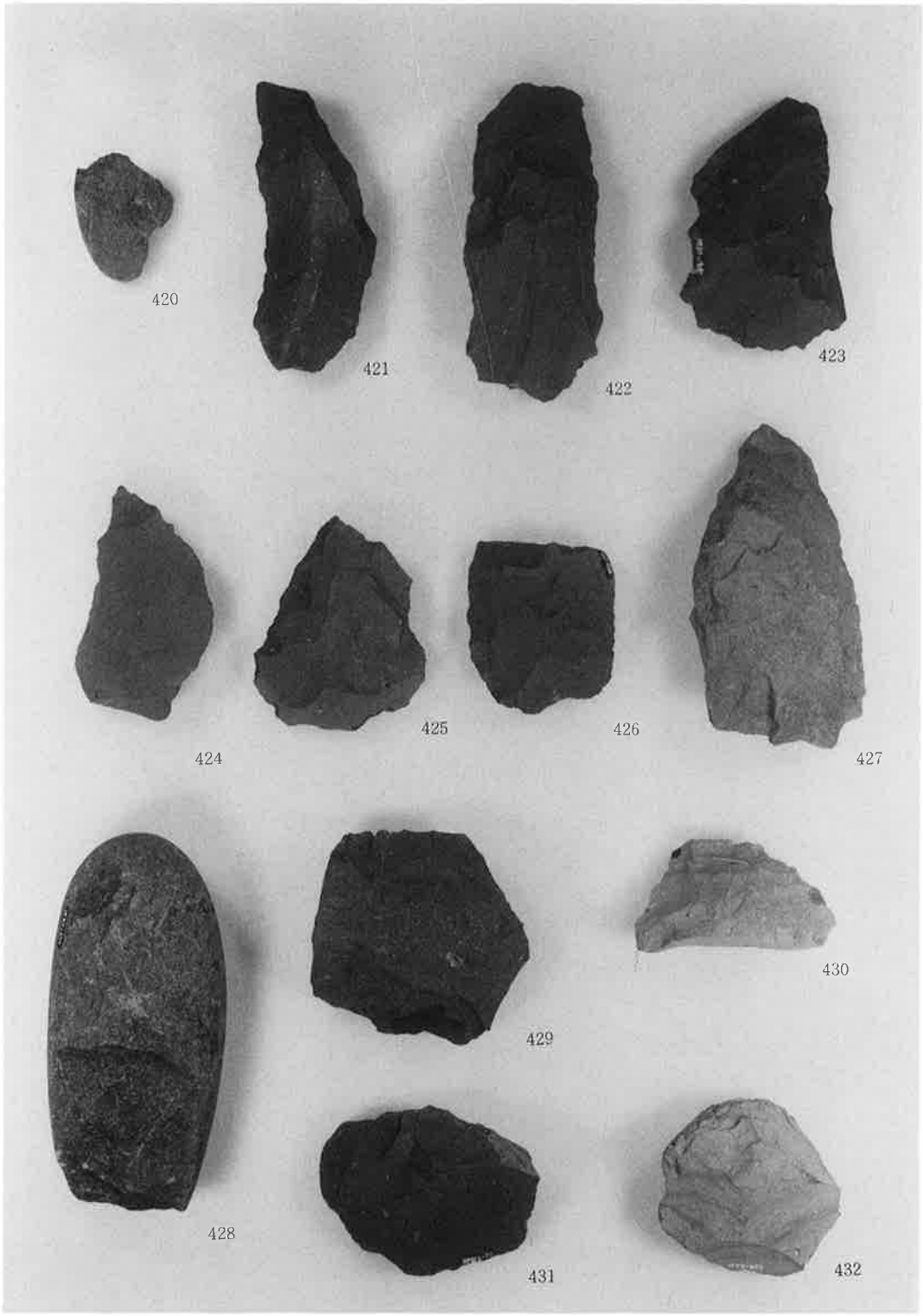
B地点出土遺物



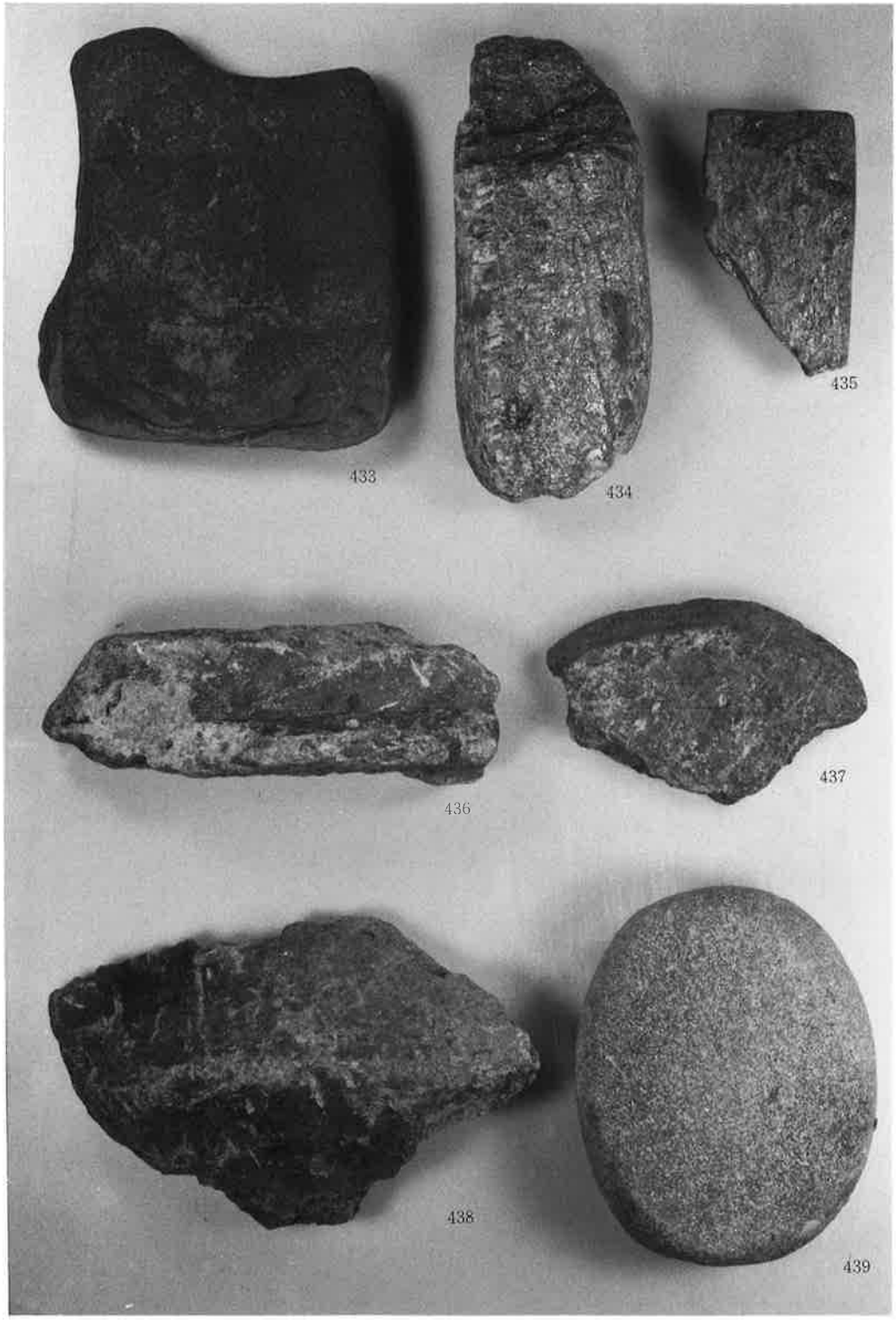
B 2・B 9 トレンチ出土遺物



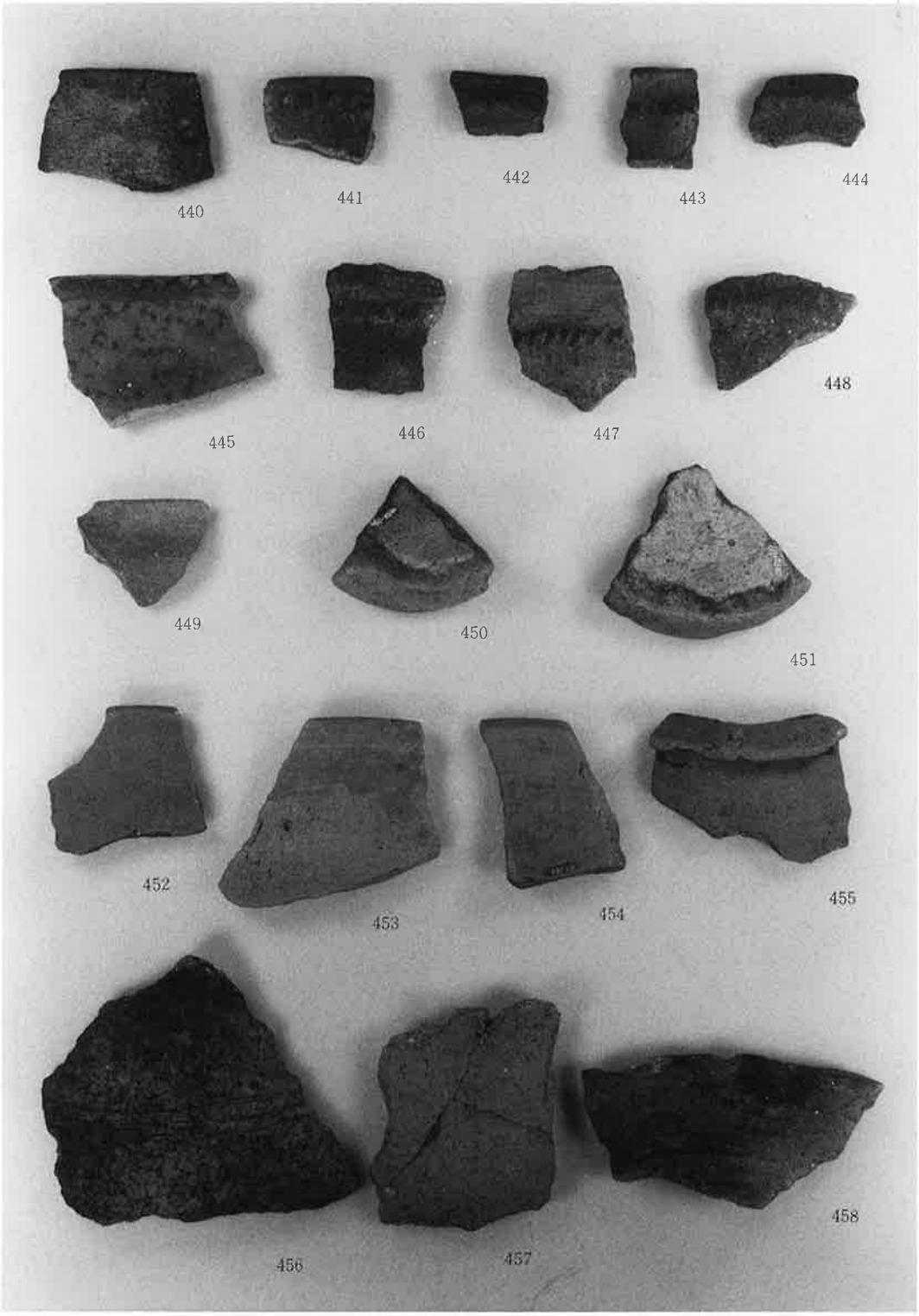
B 2・B 9 トレンチ出土遺物



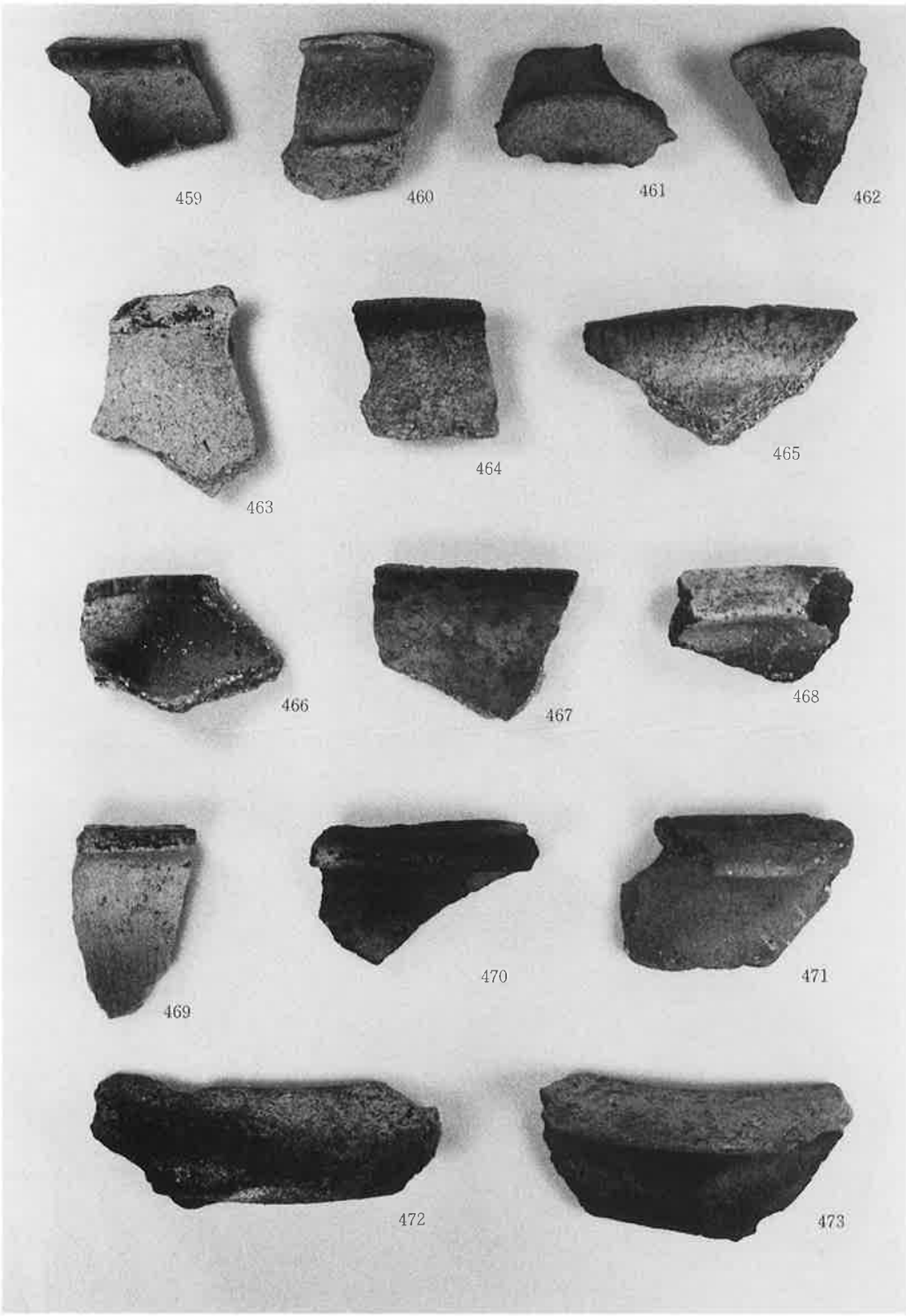
B地点出土遺物



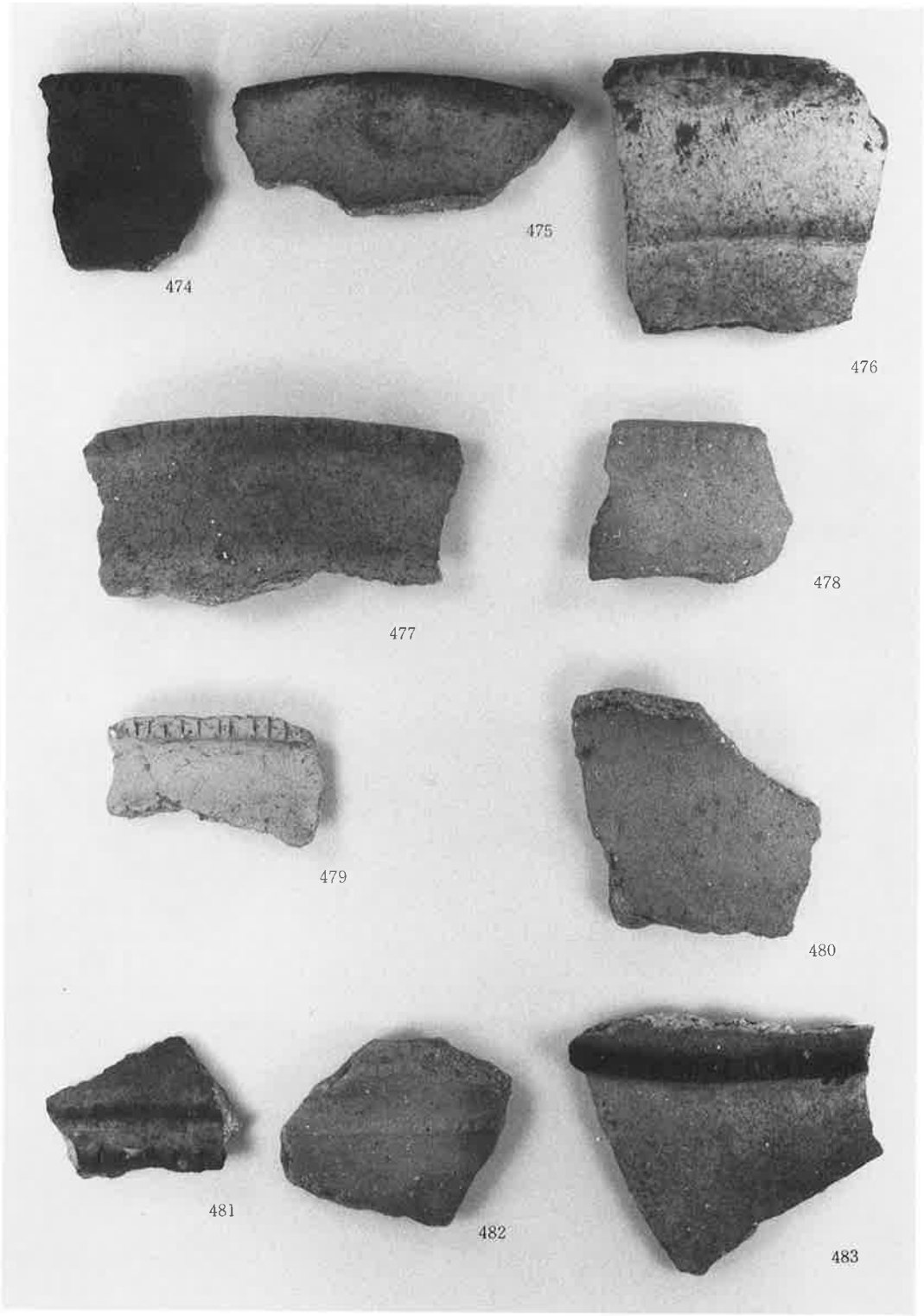
B 6 トレンチ出土遺物


440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458

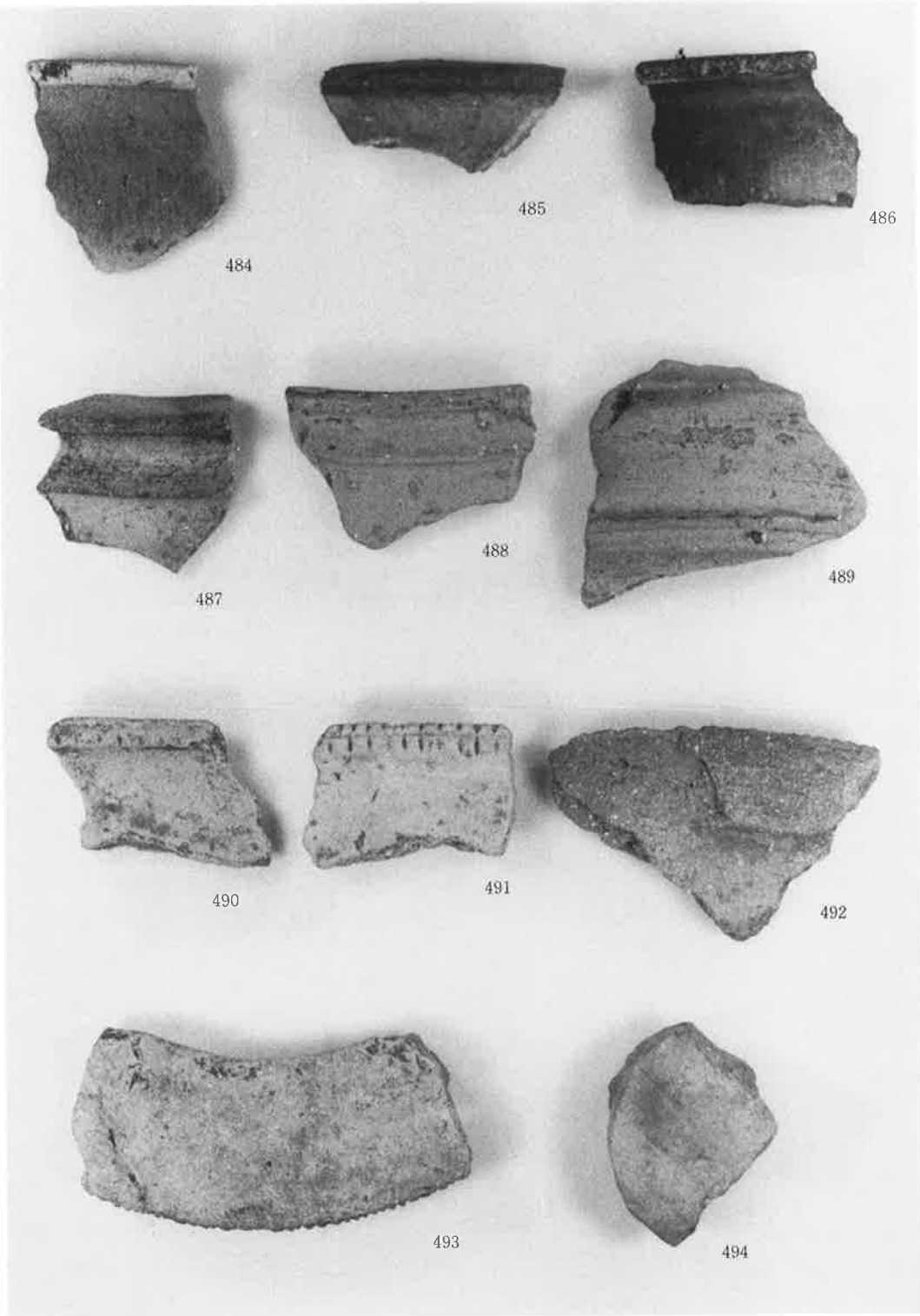
B 2 トレンチ出土遺物



B 2 トレンチ出土遺物

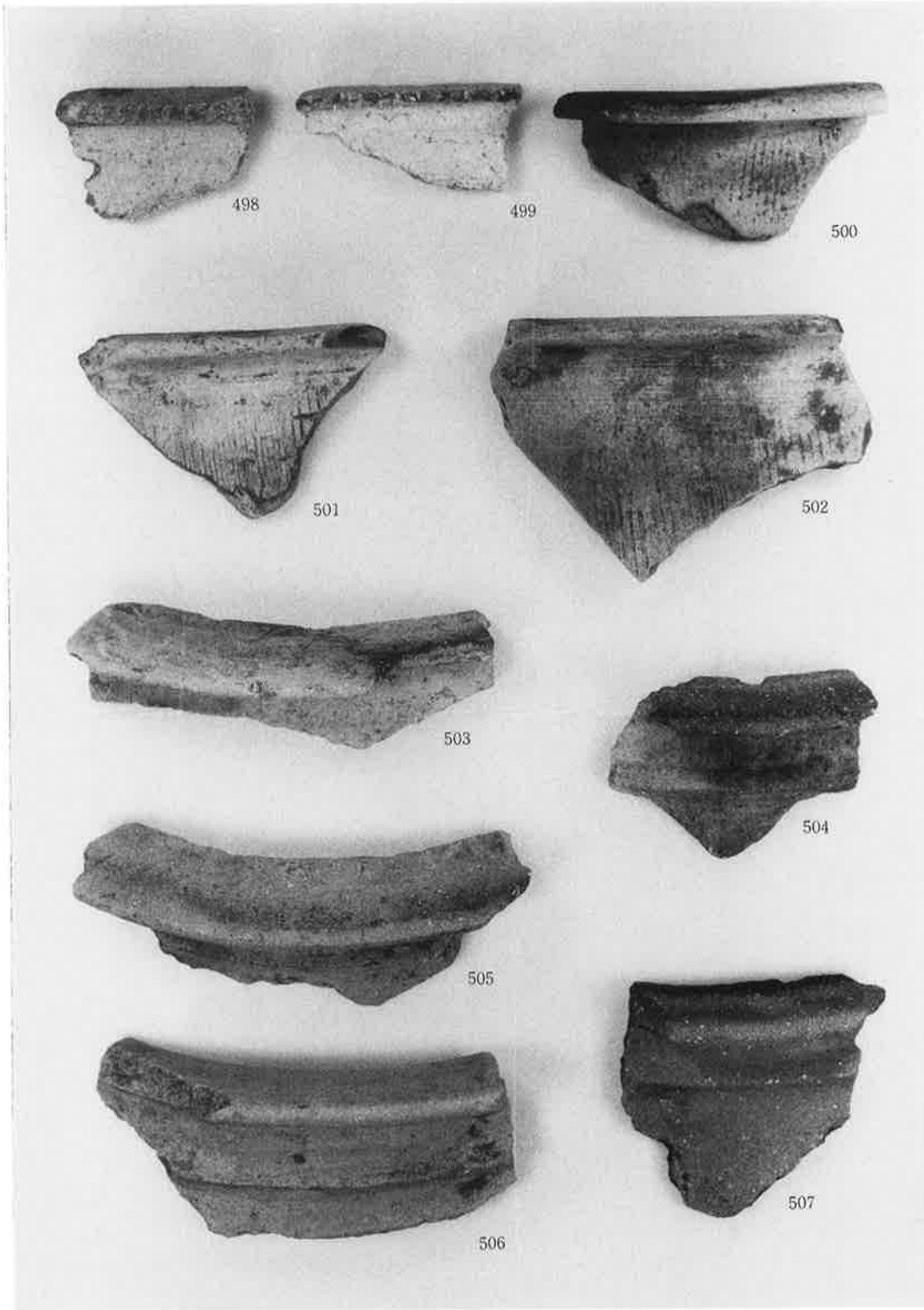


B 2 トレンチ出土遺物



B 2 トレンチ出土遺物

B 2 トレンチ出土遺物



B 2 トレンチ出土遺物

508

509

510

511

512

513

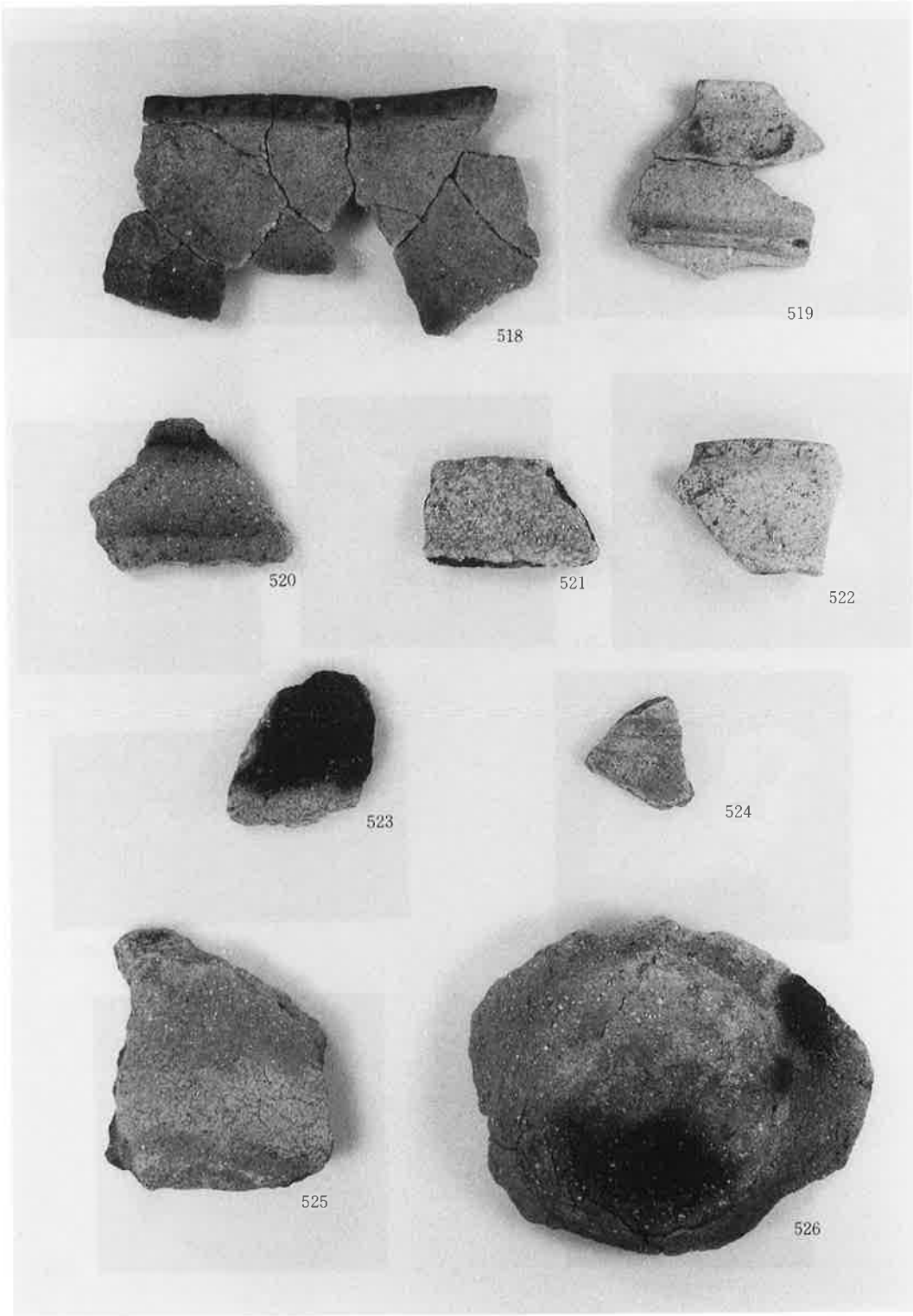
514

515

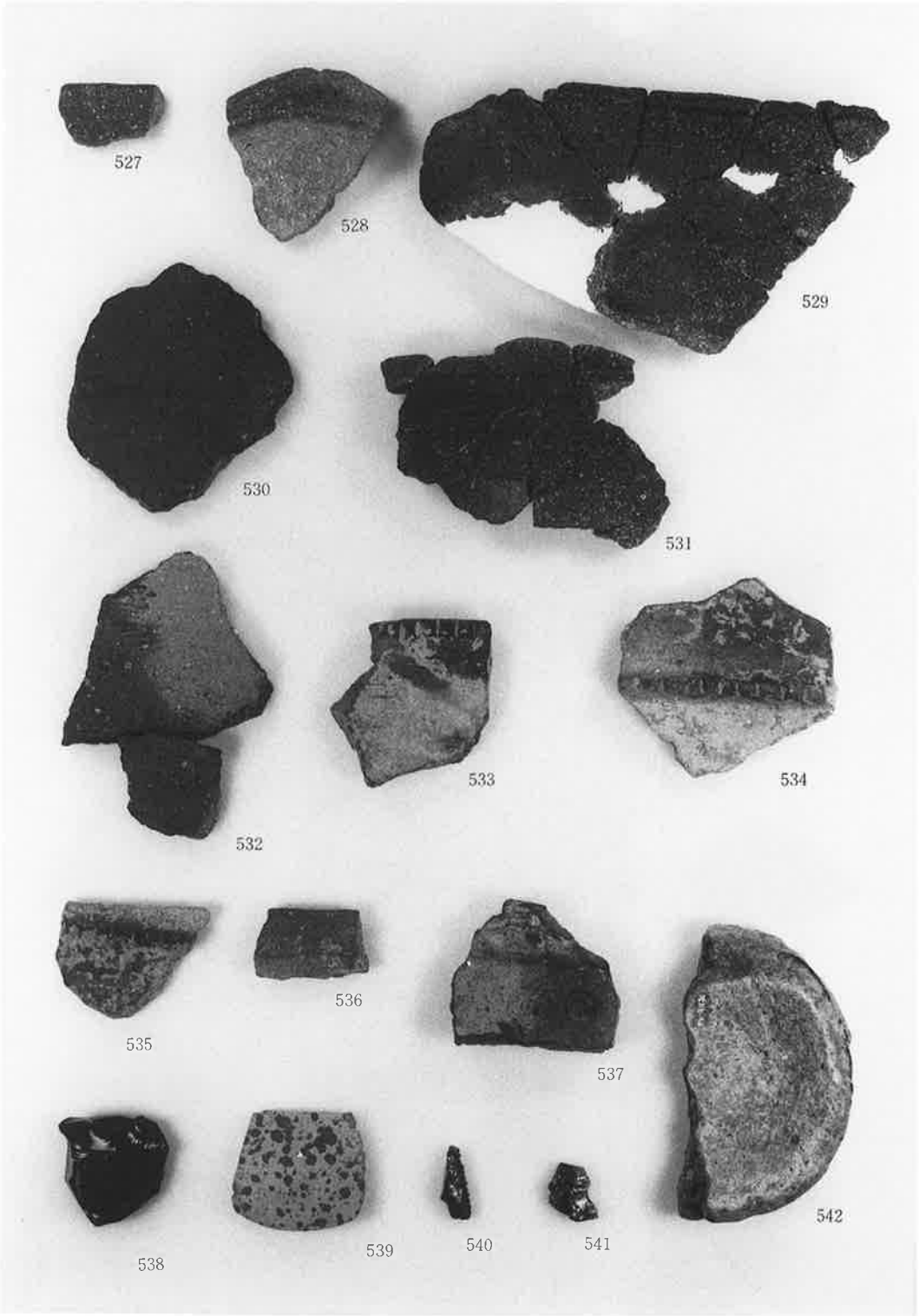
516

517

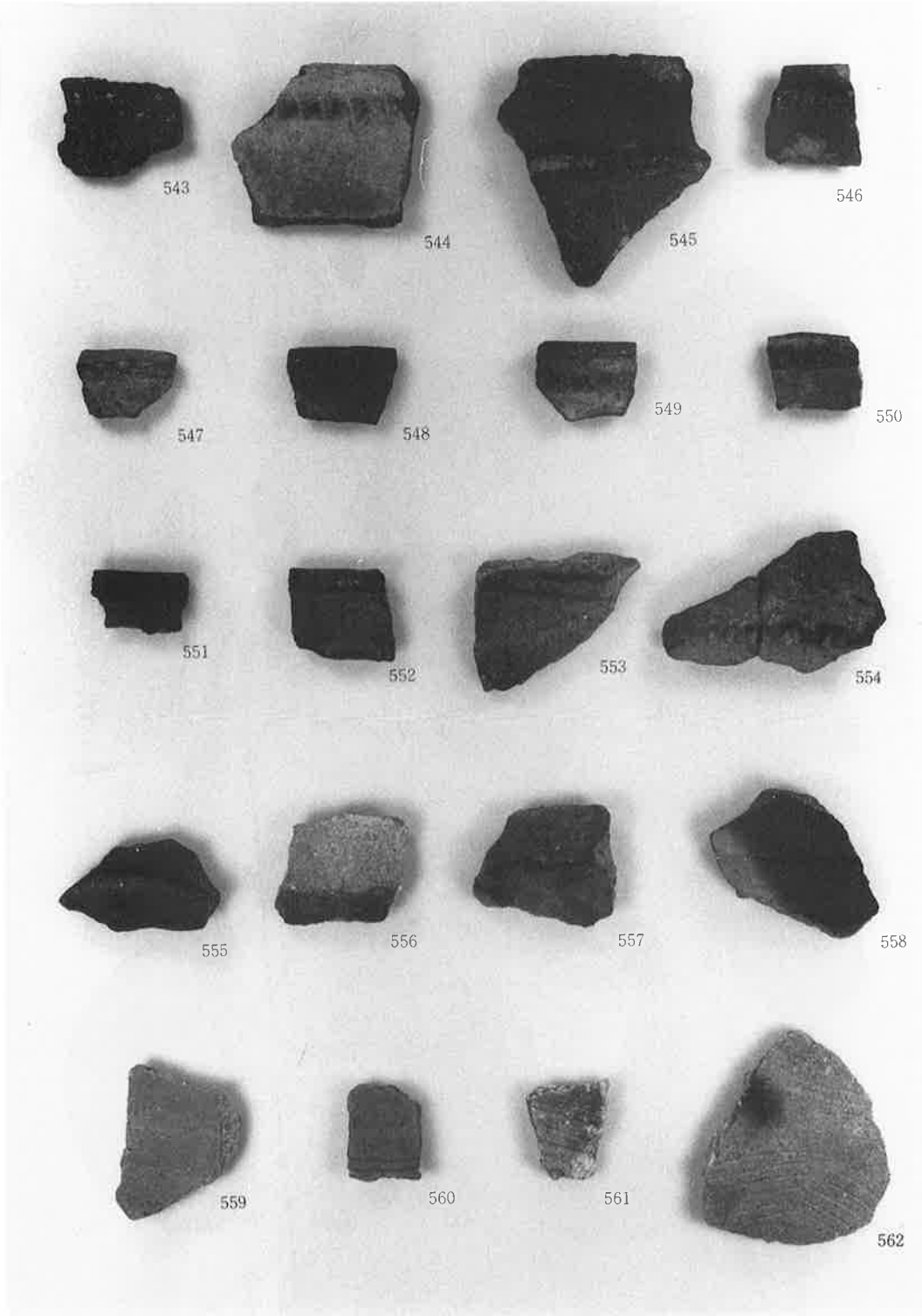
B 2 トレンチ出土遺物



B 4 トレンチ土壙出土遺物

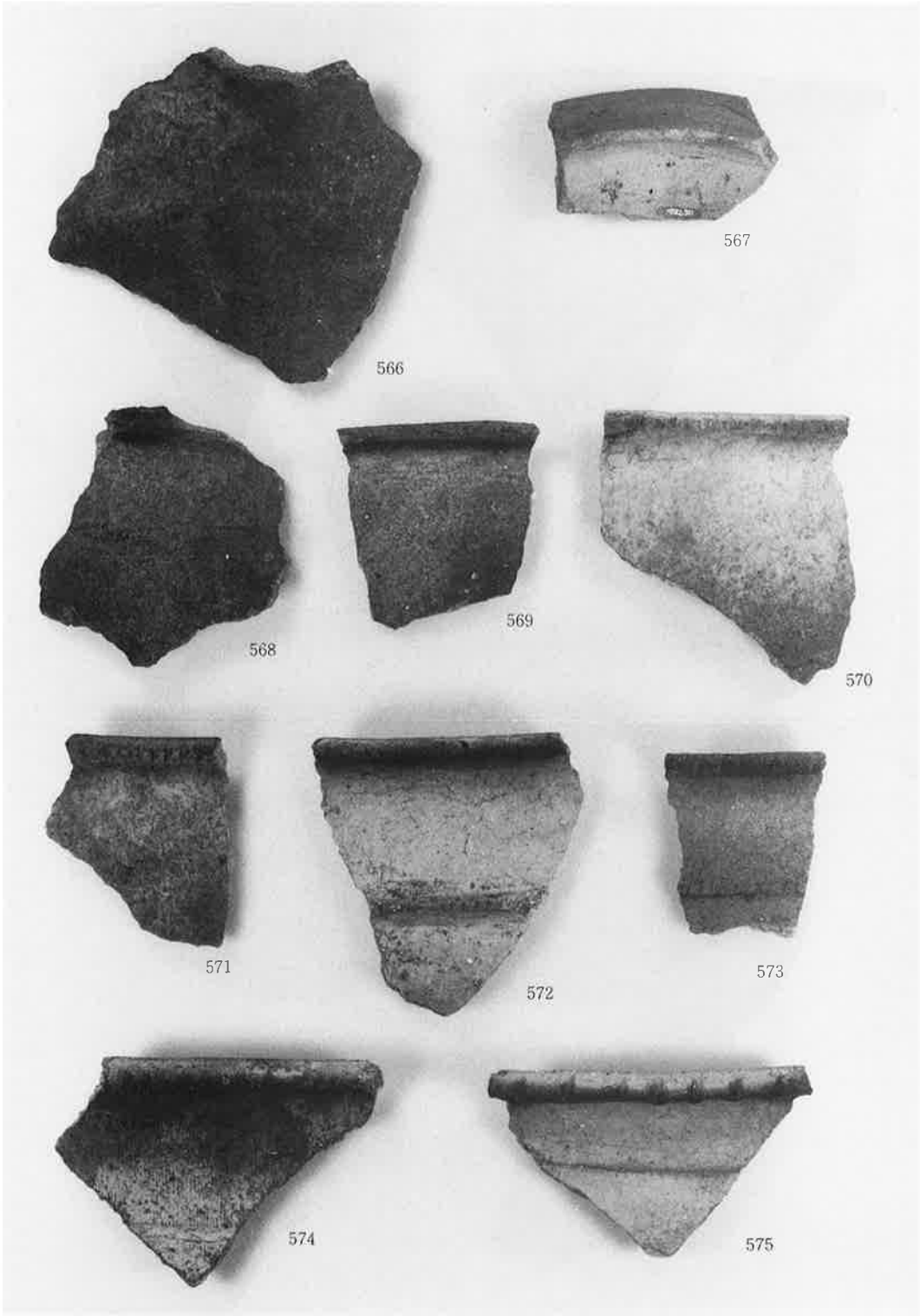


B 8 トレンチ出土遺物

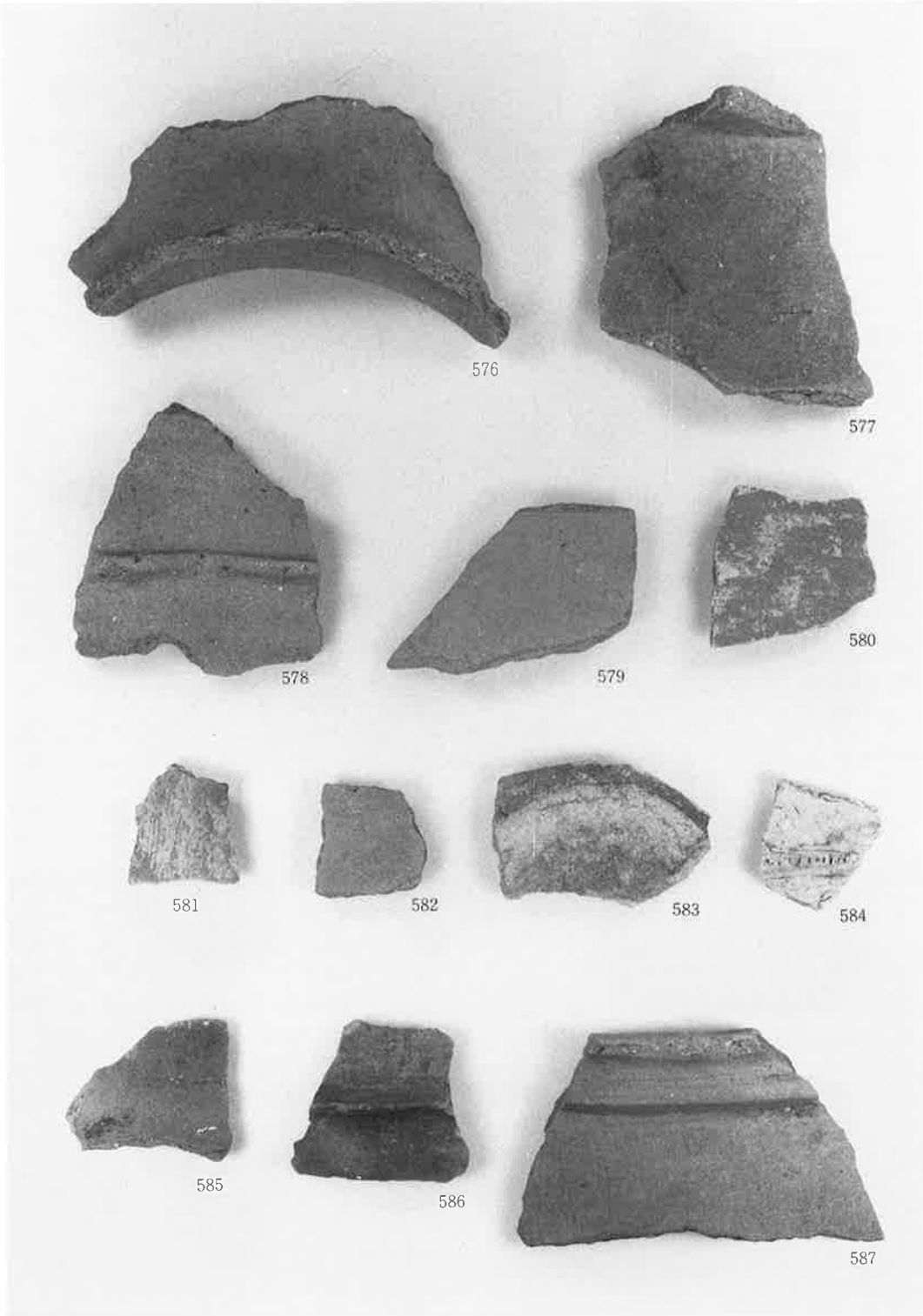

543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562

B 9 トレンチ出土遺物

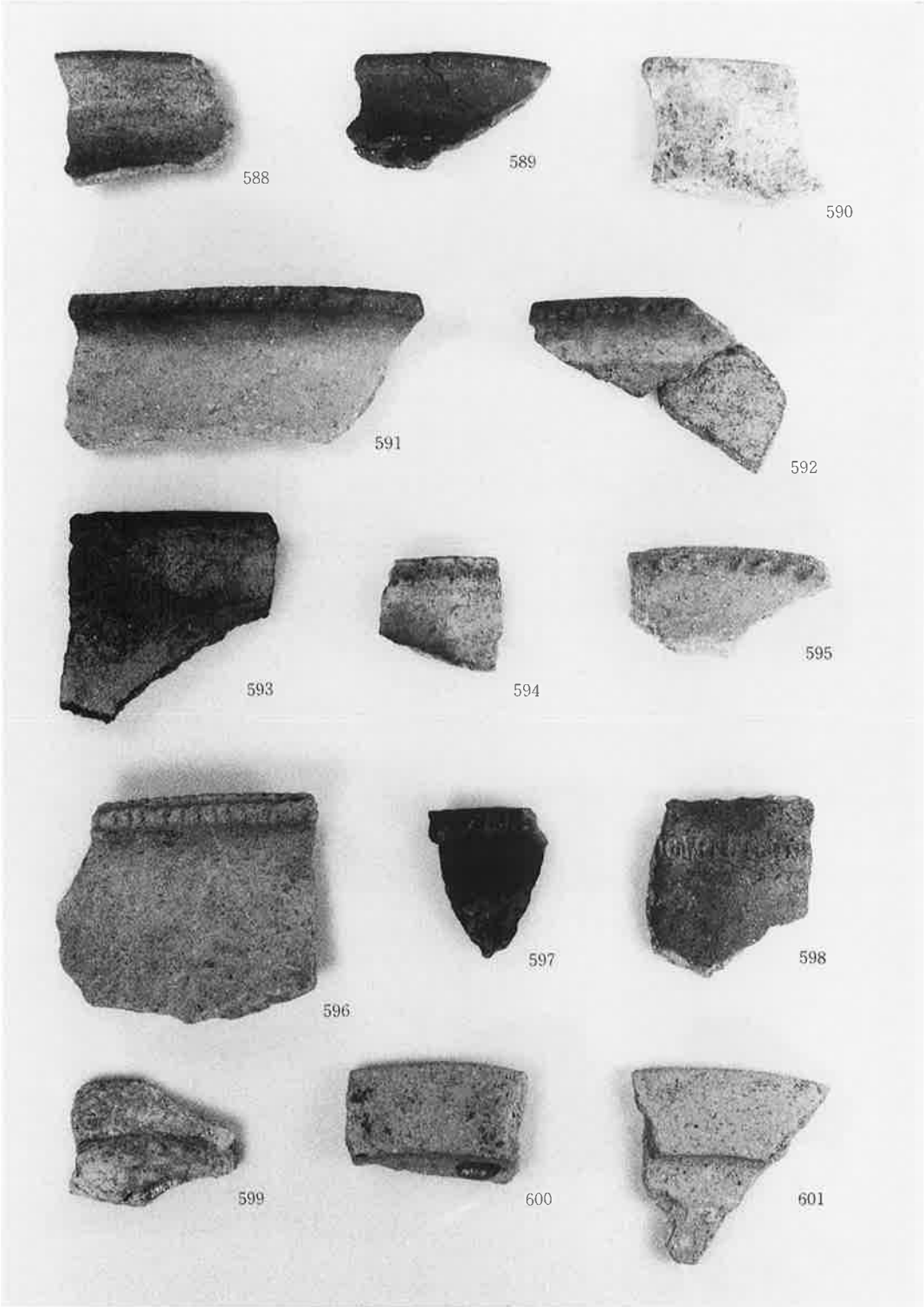
B 9 トレンチ出土遺物



B２・B９トレンチ出土遺物



B 9 トレンチ出土遺物



B10トレンチ出土遺物

602

603

604

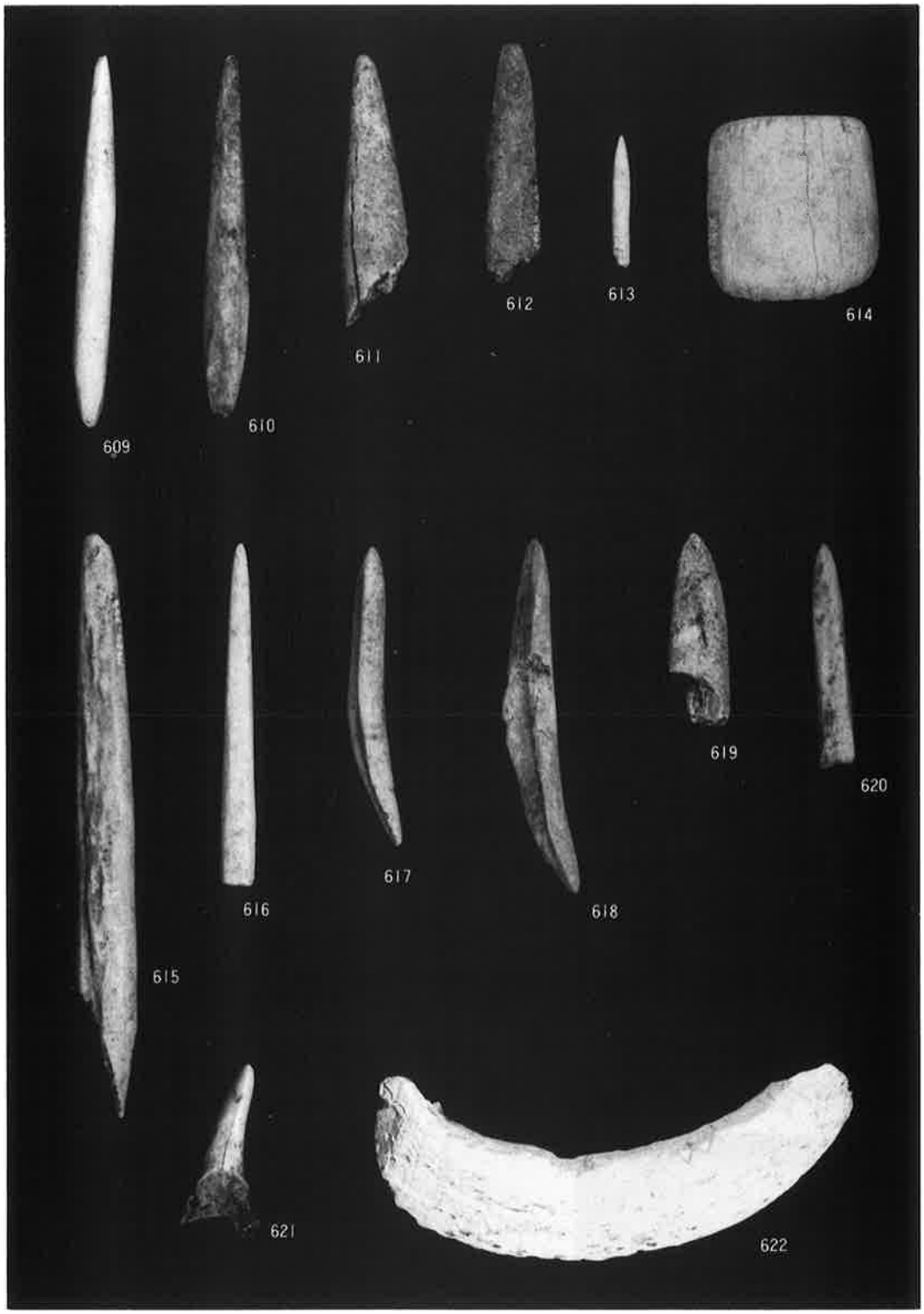
605

606

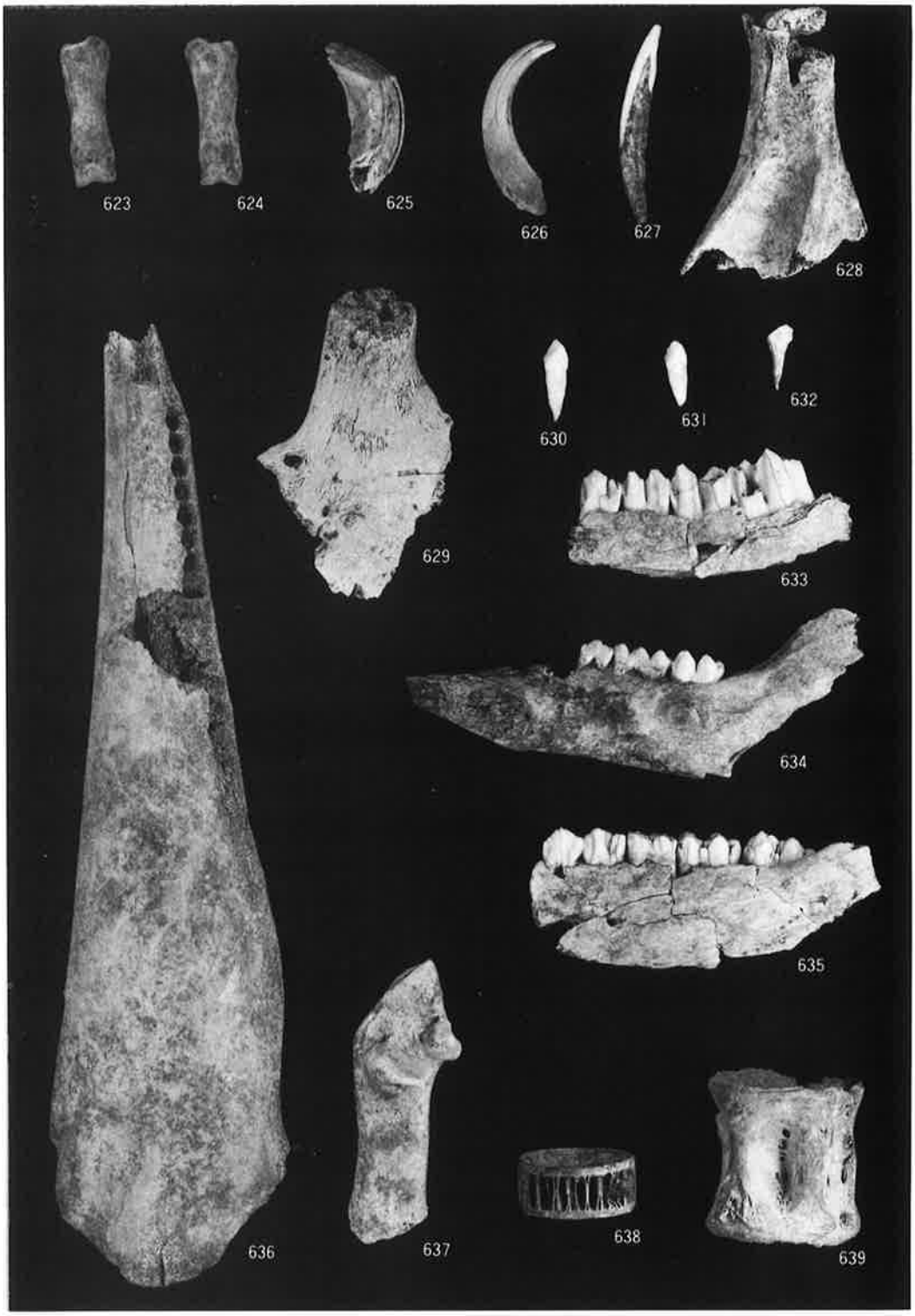
608

607

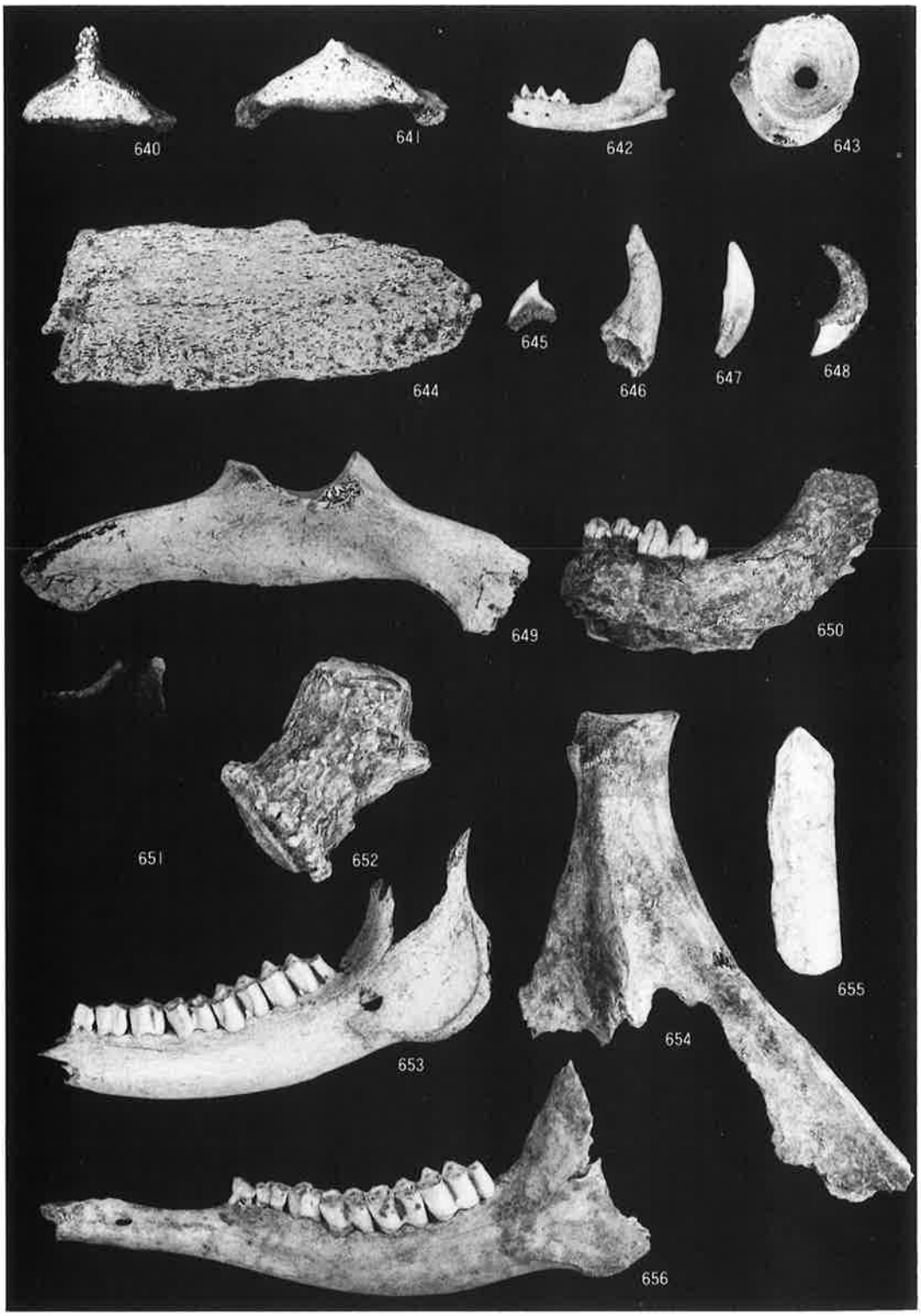
B 地点出土遺物



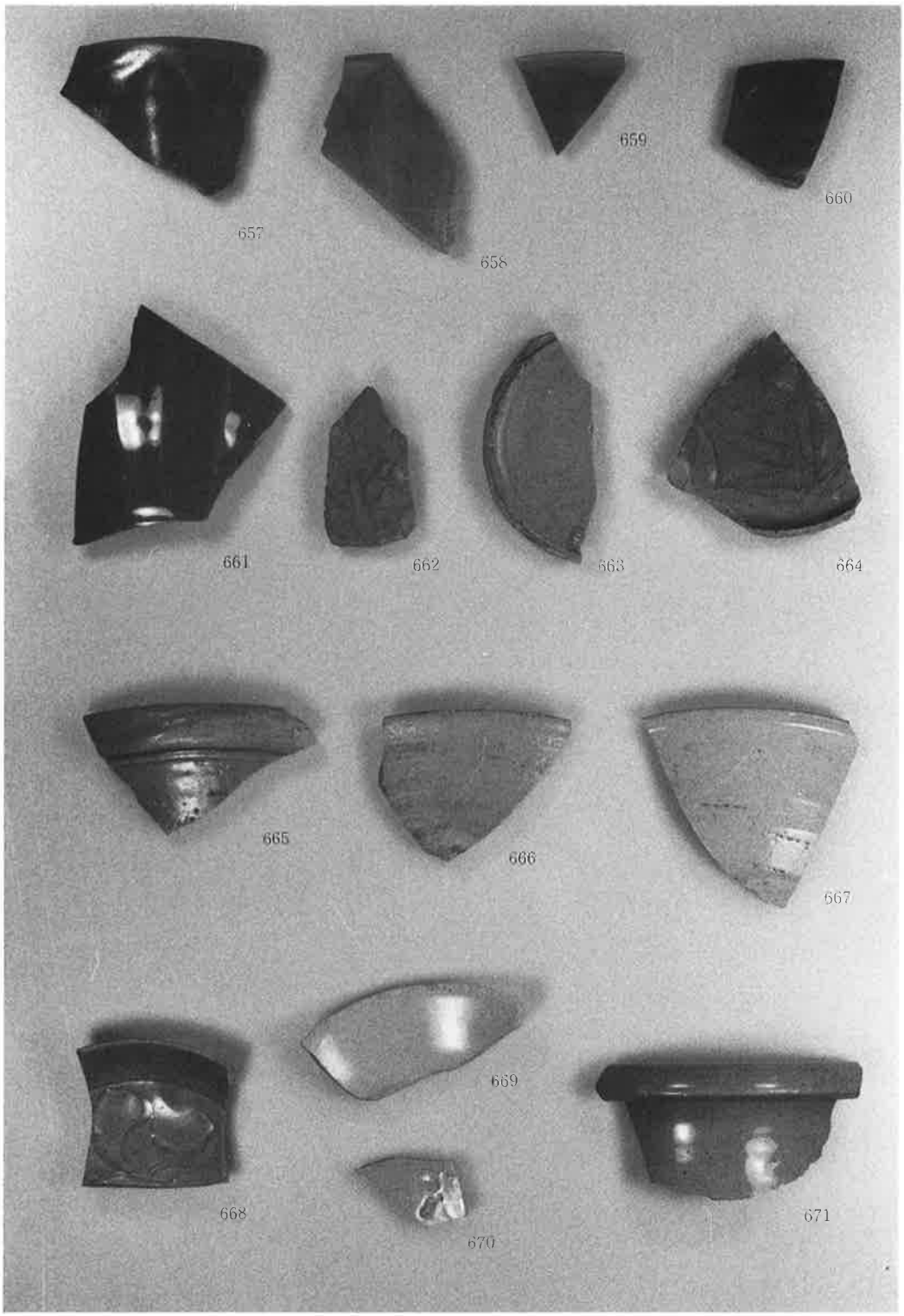
B地点出土　骨角器



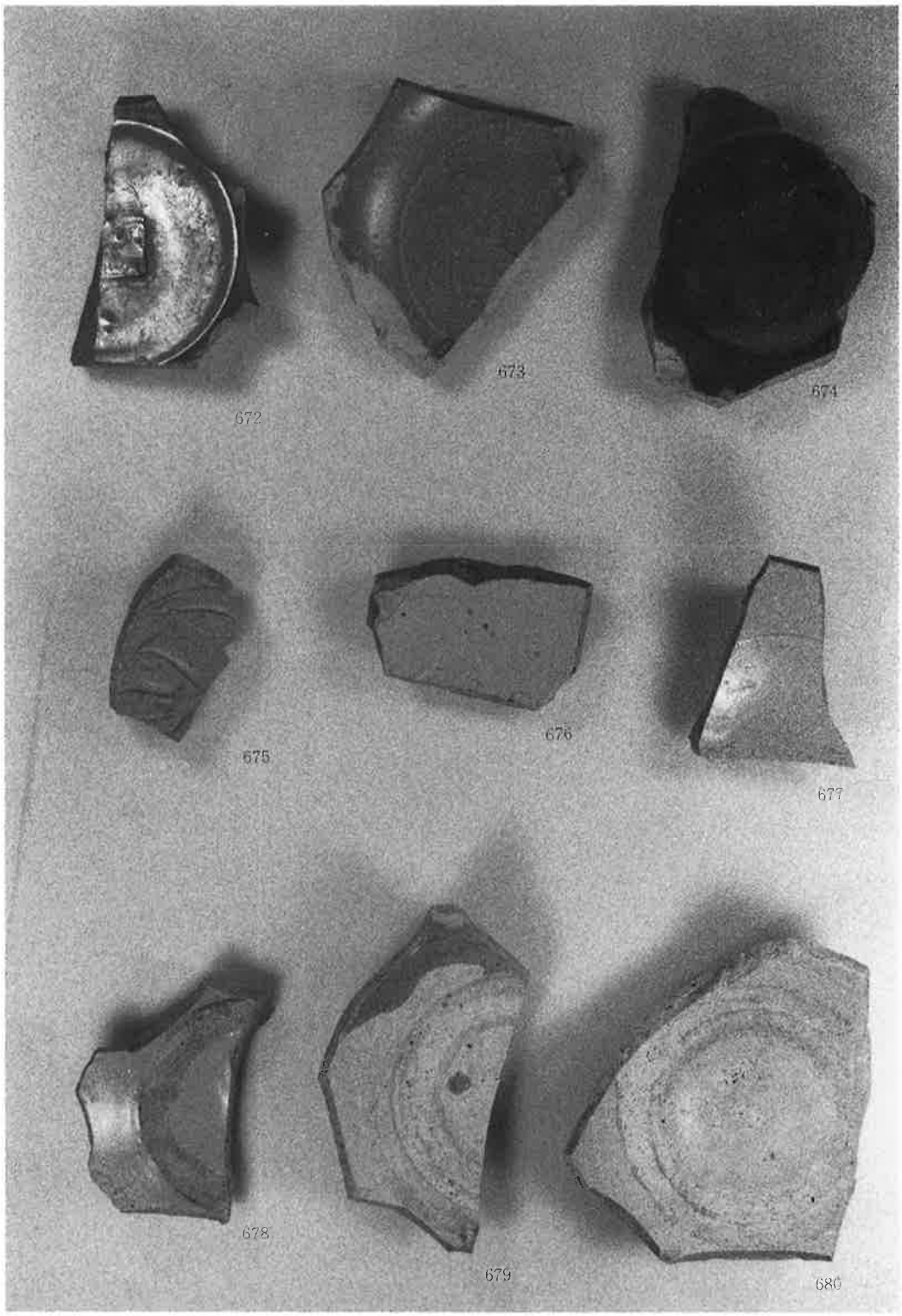
B 2 トレンチ出土自然遺物



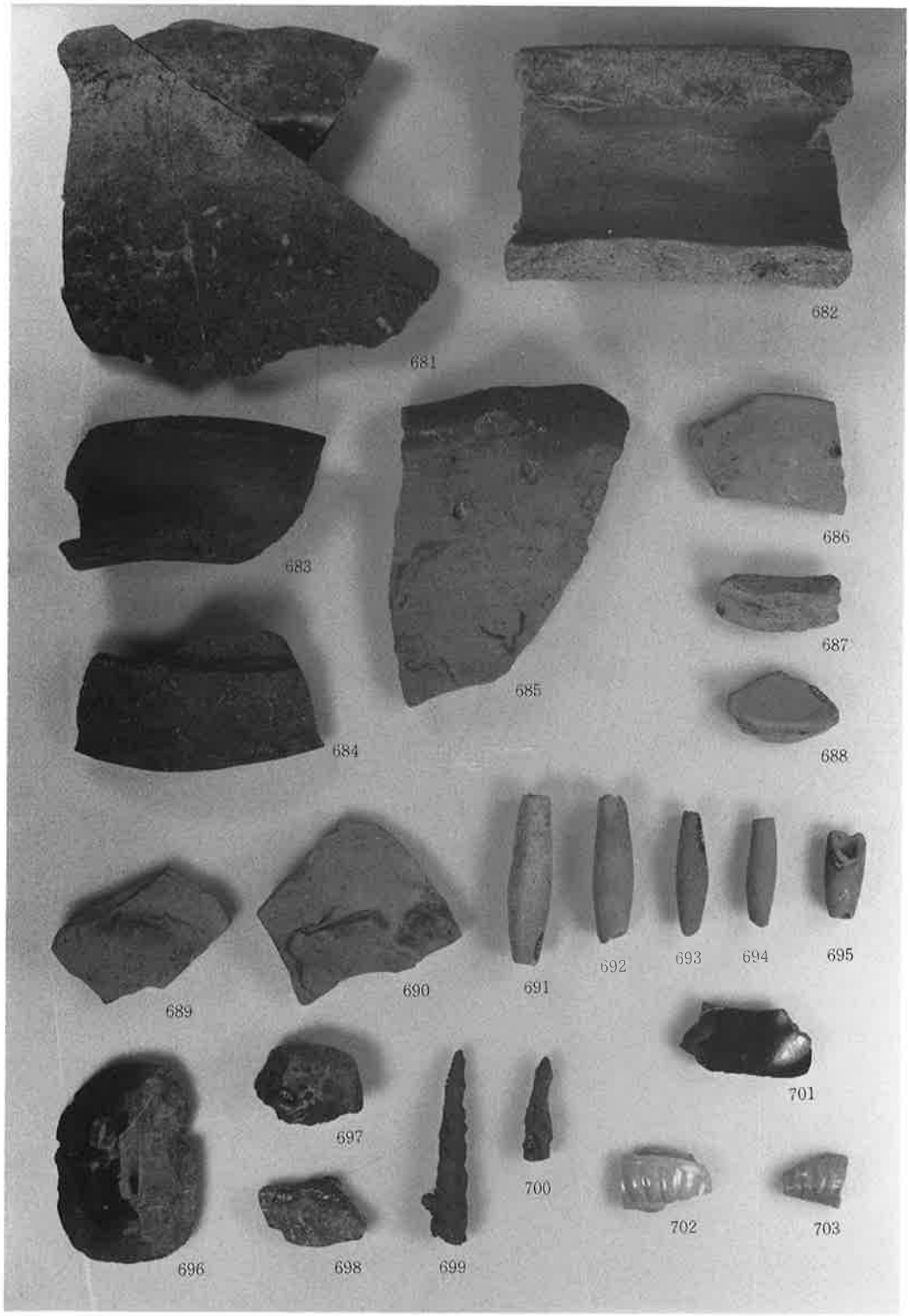
B 9 トレンチ出土自然遺物



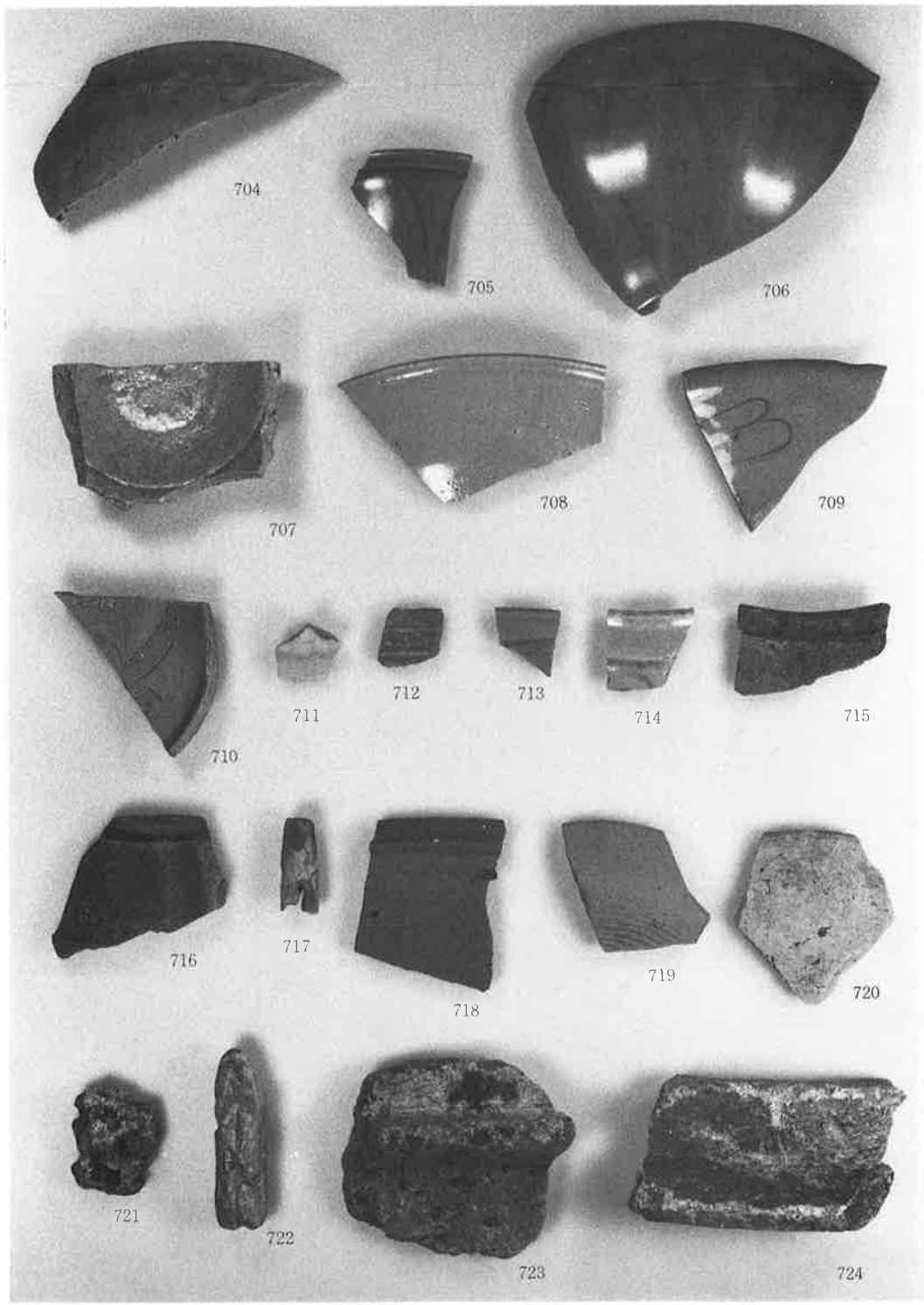
B 6 トレンチ出土遺物



B 6 トレンチ出土遺物


681
682
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
703

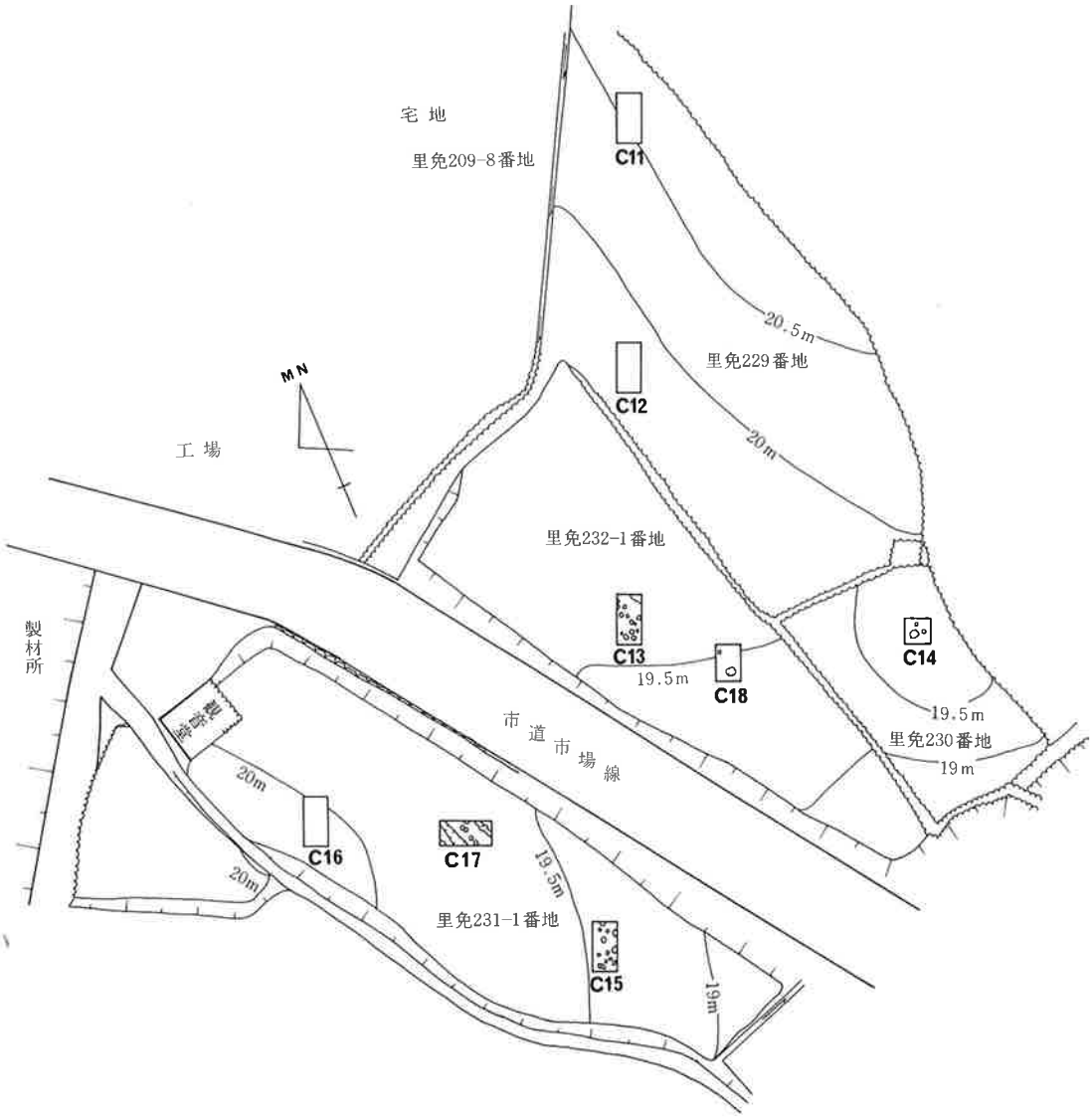
Ｂ６トレンチ出土遺物


704
705
706
707
708
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
720
721
722
723
724

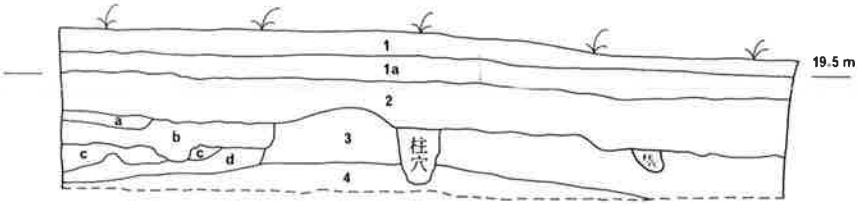
B 地点表採遺物

3．C地点の土層および遺構・遺物（第16図）

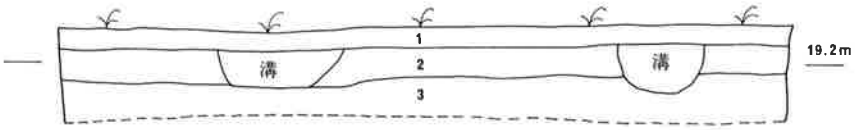
C地点は調査対象範囲でも一番高位にある地点である。畑地として耕作されており、8箇所を設定した。この地点の中央部には東西に市道市場線が横断している。この市道の両側付近には遺物包含層およびピットが検出されたため、本来はこの市道部分にも存在していたと考えられる。この地点の東側と北側は急傾斜でもって海岸部に至る。西側には宅地・工場を挟んでB地点がある。11・12・16・17トレンチにおいては耕作土下に地山層が確認でき遺物も攪乱状態で出土している。時期不明ではあるが14・17トレンチでピットを、18トレンチで壺を利用した甕棺墓1基を検出した。また、15・17トレンチでは深さ20cm～25cmを測る溝状遺構を検出した。



第16図　池田遺跡C地点調査区設定図（$\frac{1}{600}$）



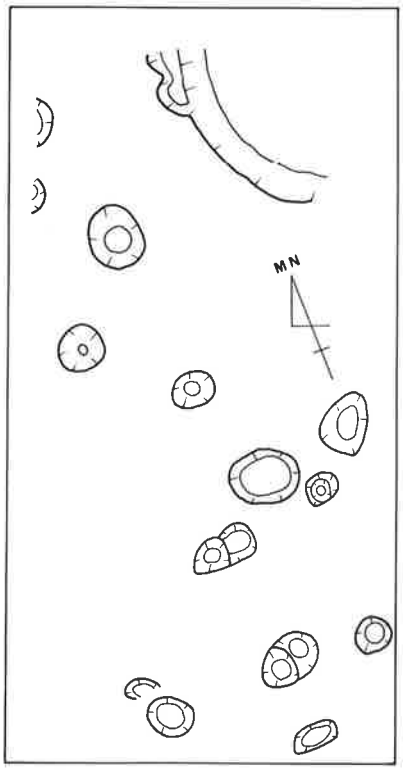
第17図　C13トレンチ東壁（1/40）



第18図　C15トレンチ東壁（1/40）

土　層（第17図・第18図）

ここでは保存状態がよかった13・15トレンチで土層状況を見てみると、13トレンチでは１層耕作土、２層が灰黒褐色粘質土、３層は赤褐色粘質土で、４層は淡黄赤褐色粘質土層とつづいている。ピットは２層下部から４層へ掘り込まれていた。トレンチの北側には土層状況が複雑な部分があり、上面には焼土が確認できた。明らかにピットと同時期の遺構と考えられ掘り込みの状態から考えると竪穴式住居跡の可能性がある。今後の調査にゆずりたい。出土遺物では弥生土器が多かった。15トレンチは市道をはさんだ13トレンチの南側に設定した。土層の堆積状況は違っている。１層は耕作土で、２層は暗茶褐色粘質土であった。３層は褐色粘質土層で固くしまっている。



第19図　C15トレンチピット（1/40）

遺　構

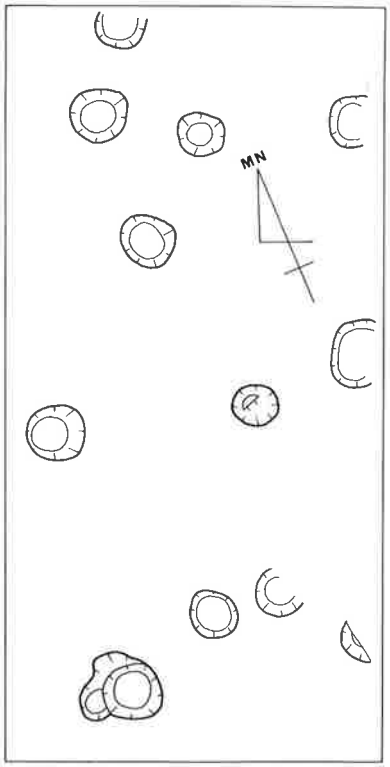
甕棺墓（第21図）

調査最終日になって18トレンチ南側で甕棺墓１基を検出した。壺の単棺でわずかに東側に傾いた状態に埋置されていた。副葬品および人骨は認められなかった。敷石はなかったが、蓋石と考えられる石が１個あった。しかし、あげられていた。壺は穿孔は認められず、口頸部の打ち欠きも認められなかった。土圧で西側の部分はつぶれて小さく割れていた。復元した壺は、口径23.1cm、器高39cm、底径7.4cm、胴部最大径40cm、頸部内径14.4cm、ほぼ完形品である。壺の特徴は、口頸部はやや広く、肩

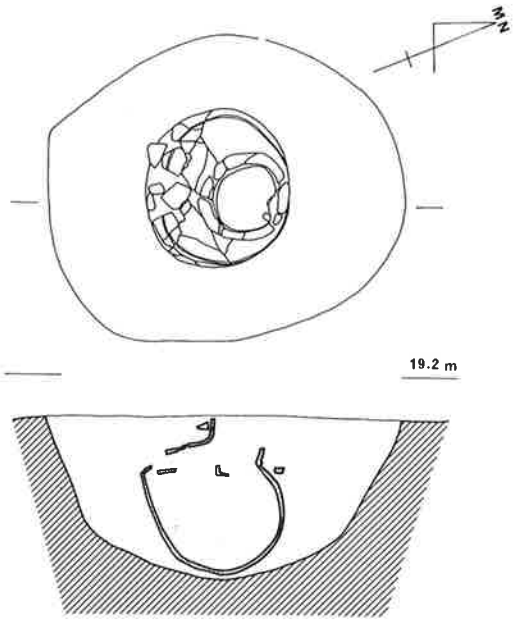
が張り、底部は全体に比して小さめでやや上げ底になっている。鋤先状の口縁で外面に刻目を施している。頸部は縦位のハケが残り、ハケのあとヨコナデ調整し、縦に暗文風ミガキを等間隔に施している。頸胴界には1条の三角突帯を貼付けている。胴部中位よりやや上に三角突帯を1条貼付けている。胴部は横へラミガキ調整しているが若干風化し、器面が粗れている。底部付近に黒ずんだ部分がある。色調は淡茶色で胎土に1㎜～2㎜の石英砂を含む。焼成は普通である。口縁・器形などの諸特徴から弥生中期前葉に比定できよう。甕棺は容量的に幼児用に利用されたものと考えられる。

ピット（第19図・第20図）

13・14・15・17トレンチにおいてピットを検出した。13トレンチでは2層下部から4層の淡赤褐色粘質土層へ掘り込まれていた。この3層は弥生土器より中期前葉～中葉が考えられるため、これに近い時期と思われる。14トレンチでは耕作土の下に地山である13トレンチと同様の淡黄赤褐色粘質土層が堆積しているため、時期については不明である。15トレンチでは13基のピットが検出された。このピット群では近代の溝状遺構により、一部が壊されている所も確認された。ピットの径は30cm前後が多い。出土遺物から中期前葉～中葉の時期が考えられる。17トレンチのピットは図示しなかったが、溝が南北に2条検出できた。この溝は15トレンチにつながると思われ、北側を通る市道と並行している。この溝と溝の間よりピット7基を検出した。ピットは



第20図　C15トレンチピット（$\frac{1}{40}$）



第21図　C18トレンチ甕棺墓実測図（$\frac{1}{20}$）

楕円形状を呈し、弥生期のピットよりも大きい。覆土内より龍泉窯系青磁、土師器、弥生土器が出土しており、時期的には中世期の可能性が強い。

出土遺物

C地点は比較的狭い範囲に遺跡が分布しているため、出土遺物も少なかった。出土遺物は約2,000点であった。その内訳は弥生土器約900点、黒曜石製石核・剝片・砕片など約270点、土師器約220点、安山岩製石核・剝片・砕片など約160点、輸入陶磁器約100点、縄文土器約40点、石鏃9点であった。中心の時期は弥生時代である。

725～731は石鏃である。732はスクレイパー。733は台形様石器であろうか。734は安山岩製スクレイパー。735は使用痕のある剝片である。736は安山岩製石核である。中央部に向かって寸づまりの剝片を剝ぎとっている。石核の背面は自然面である。737は凹石で両面ともに凹んでいる。硬質砂岩製である。

738～741は縄文晩期資料で、738・739は口縁部に刻目突帯をもつ深鉢である。どちらも磨滅が著しい。742～750は弥生中期前半代の甕形土器の口縁部で、逆L字状口縁を有する。747～750は口縁直下に1条の突帯を有している。いずれも胎土に石英粒を多く含んでいる。751は外反する口縁部である。器面は磨滅が著しい。752は壺肩部で突帯を有している。753・754は壺で口唇部を内面につまみ出している。755・756はやや上げ底の底部である。中期中葉であろう。757・758は平底である。

ここでは1年目における調査について若干まとめてみたいと思う。

池田遺跡が生活の場として利用され始めたのは、縄文後期の頃と思われその事は数点の土器が示している。続いて弥生時代になると丘陵全体に生活の場が広がり、人口も増加したと思われるが前期前葉板付I式土器出土の確証はできていない。しかし、前期後葉になると、板付II式土器の遺物の量が増加するので板付I式土器の時期だけ人間の生活の場が中断されたとは考えにくい。今後の課題である。特に問題となるのが縄文晩期であろう。これは晩期の刻目突帯文系と弥生前期の板付式系の共伴関係を意味している。本遺跡でも突帯文系と板付I(?)II式土器が検出されたが、その編年関係については明確な層序が認められなかった。これは当地方においては突帯文系土器が板付II式の時期まで存続する可能性が強いということであろう。また、石器では縄文的系統をもつ扁平打製石斧の残存や太型蛤刃石斧・磨製石剣など大陸系のものと判断される資料がある。食料では自然遺物から狩猟・漁撈を主とすることは明らかである。このように海岸部に立地する池田遺跡は縄文時代以来の漁撈生活の伝統を色濃く残している。調査地点では滑石粉末を混入した阿高系の土器片が検出されているが、量的に稀少であり、明確な包含層を認めえなかった。ただし、以前地元の松浦高校郷土社会部による曽畑式土器等も採集されたようである。前期ないし中期の頃も遺跡が営まれていた可能性が十分にある。

松浦市で箱式石棺の発掘調査が実施されたのは、志佐町栢ノ木免栢ノ木遺跡[注1]、同町高野免宮ノ下り遺跡[注2]があり、極めて多様な型式の石棺が発見されている。前者は弥生時代後期後半、後者は5世紀代に位置づけられている。本遺跡の所属時期については、西九州地域の石棺墓が支石墓系統の短い方形を呈する石棺から、後期後半から終末頃に長大化が実現してくる。これは屈葬から伸展葬への葬法の変化としてとらえられている[注3]。また、石棺墓には北部九州・山口型と西九州型の2つのタイプがあることが指摘[注4]されており、この点を踏まえて近接地の石棺墓と対比し、弥生時代中期以降の石棺墓の墓制について今後十分検討したいと思っている。甕棺墓は、昭和33年の表採資料等よりかなりの墓数が存在していたと考えられる。前記の栢ノ木遺跡は弥生前期末から中期前葉の甕棺3基が検出されており、池田遺跡からも金海式・城ノ越式があり、北部九州地域の甕棺墓圏の周縁部にあたる。また、石棺墓と甕棺墓とが共存しており興味深いものがある。

注1　正林　護　『栢ノ木遺跡』　松浦市教育委員会　1973

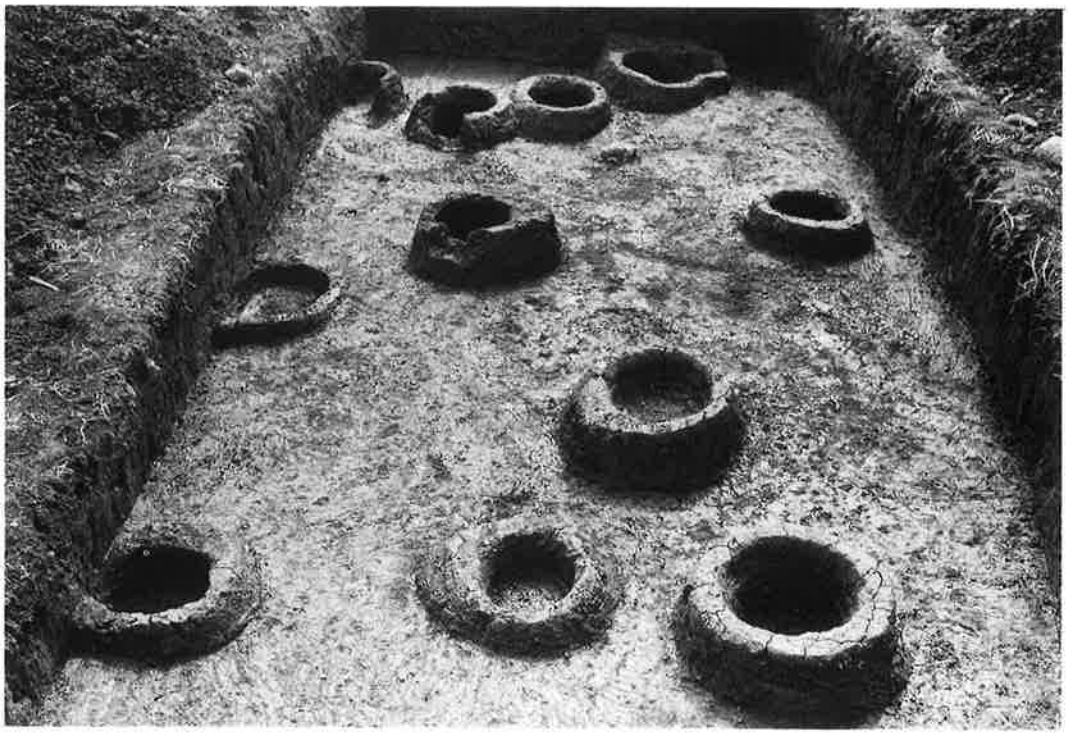
注2　中田敦之　『宮ノ下り遺跡』　松浦市文化財調査報告書第5集　松浦市教育委員会　1989

注3　高野晋司　「中野ノ辻の石棺について」　『中野ノ辻遺跡・里田原遺跡』　田平町文化財調査報告書第1集　田平町教育委員会　1982

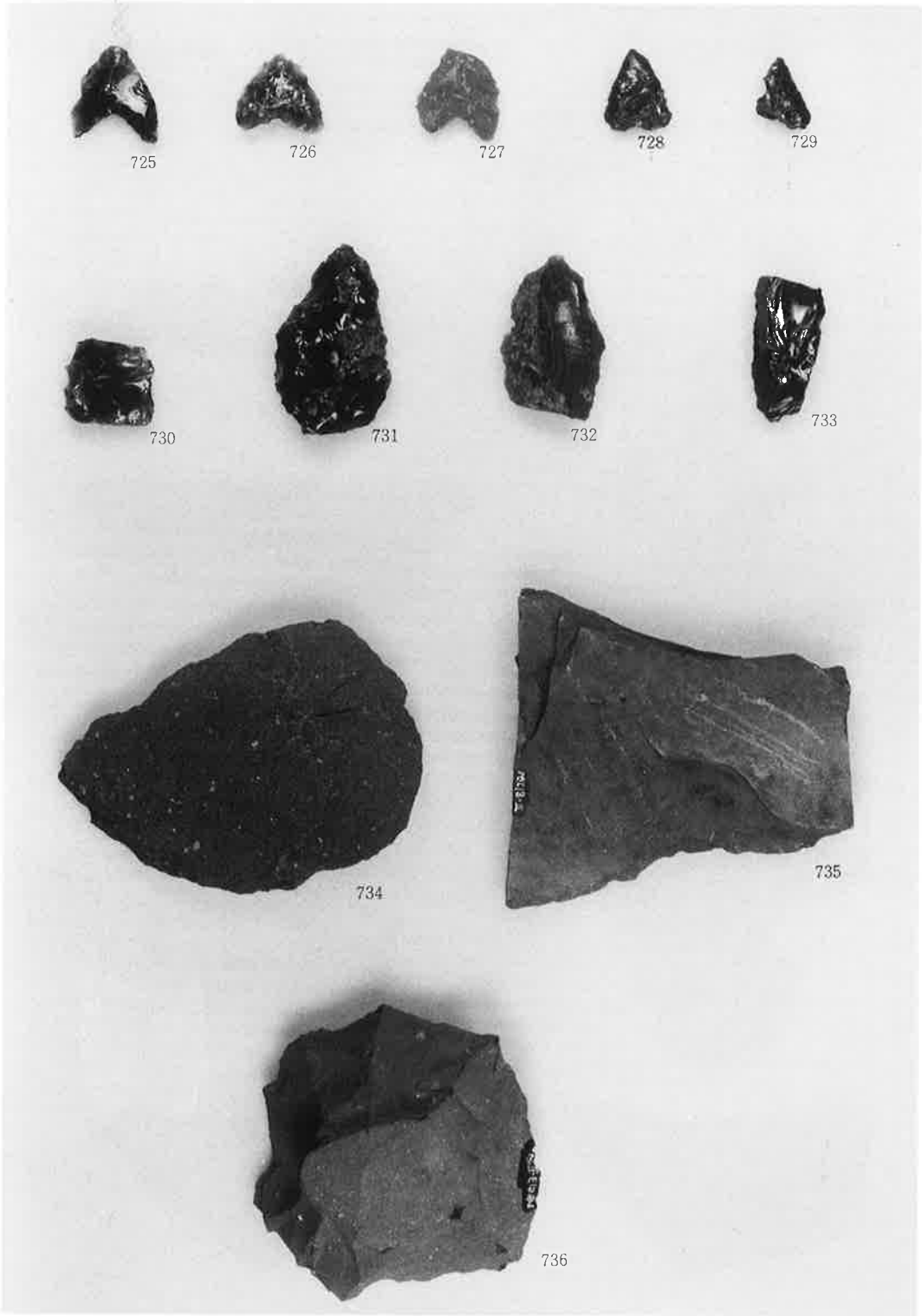
注4　藤田　等　「石棺墓」　『弥生文化の研究8』　雄山閣　1987

C18トレンチ甕棺墓

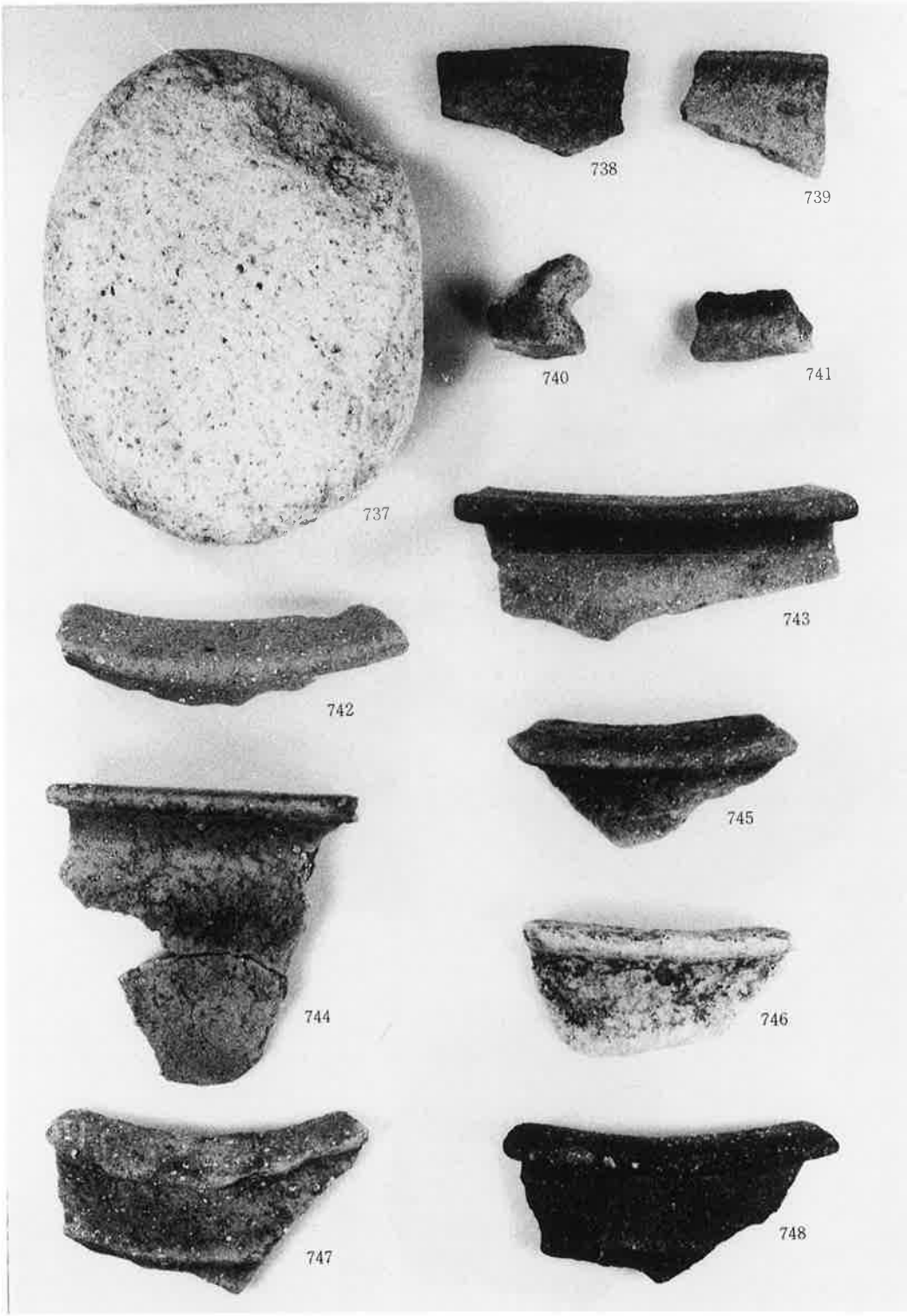
C13トレンチピット検出状況



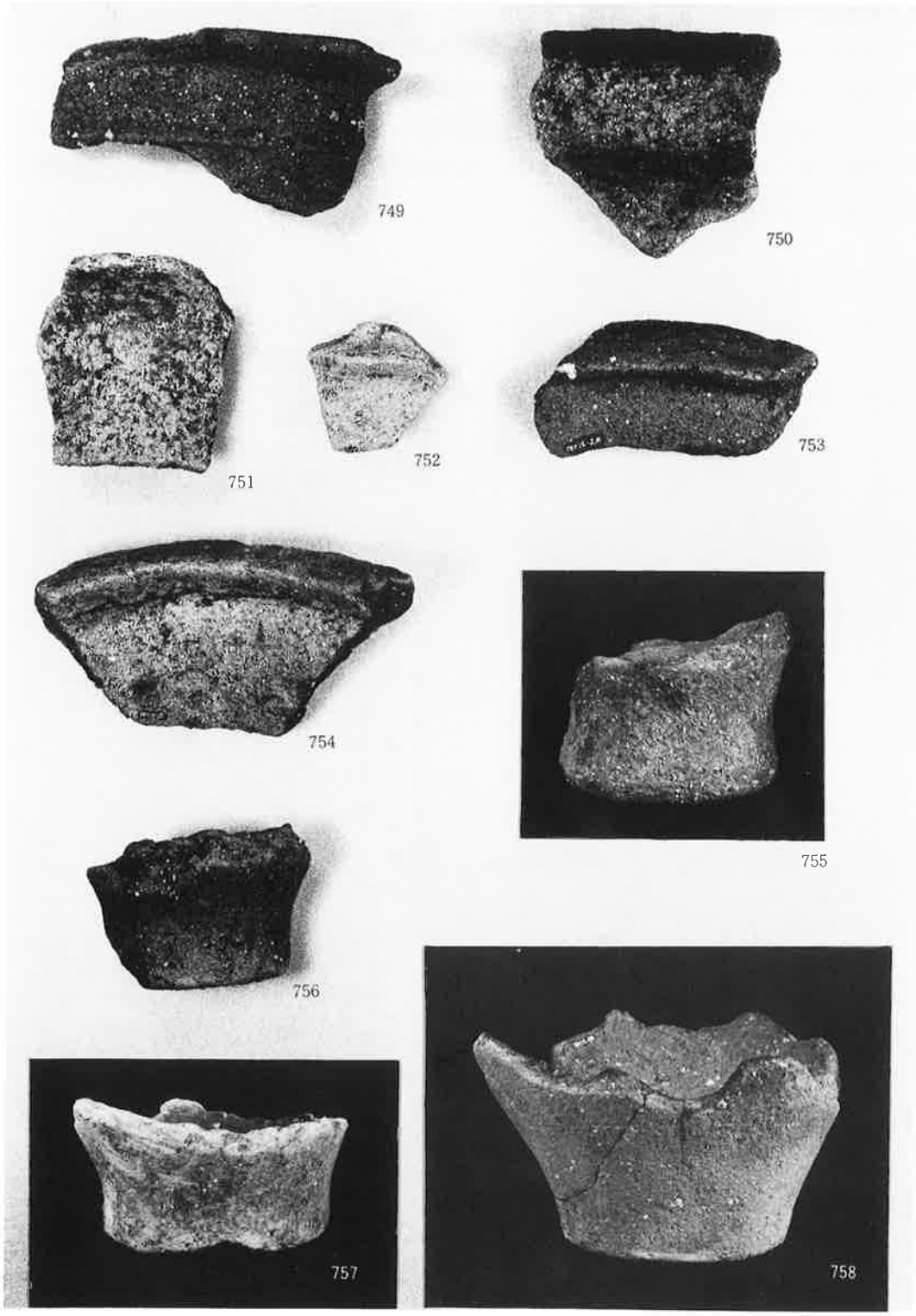
C15トレンチピット検出状況



C地点出土遺物



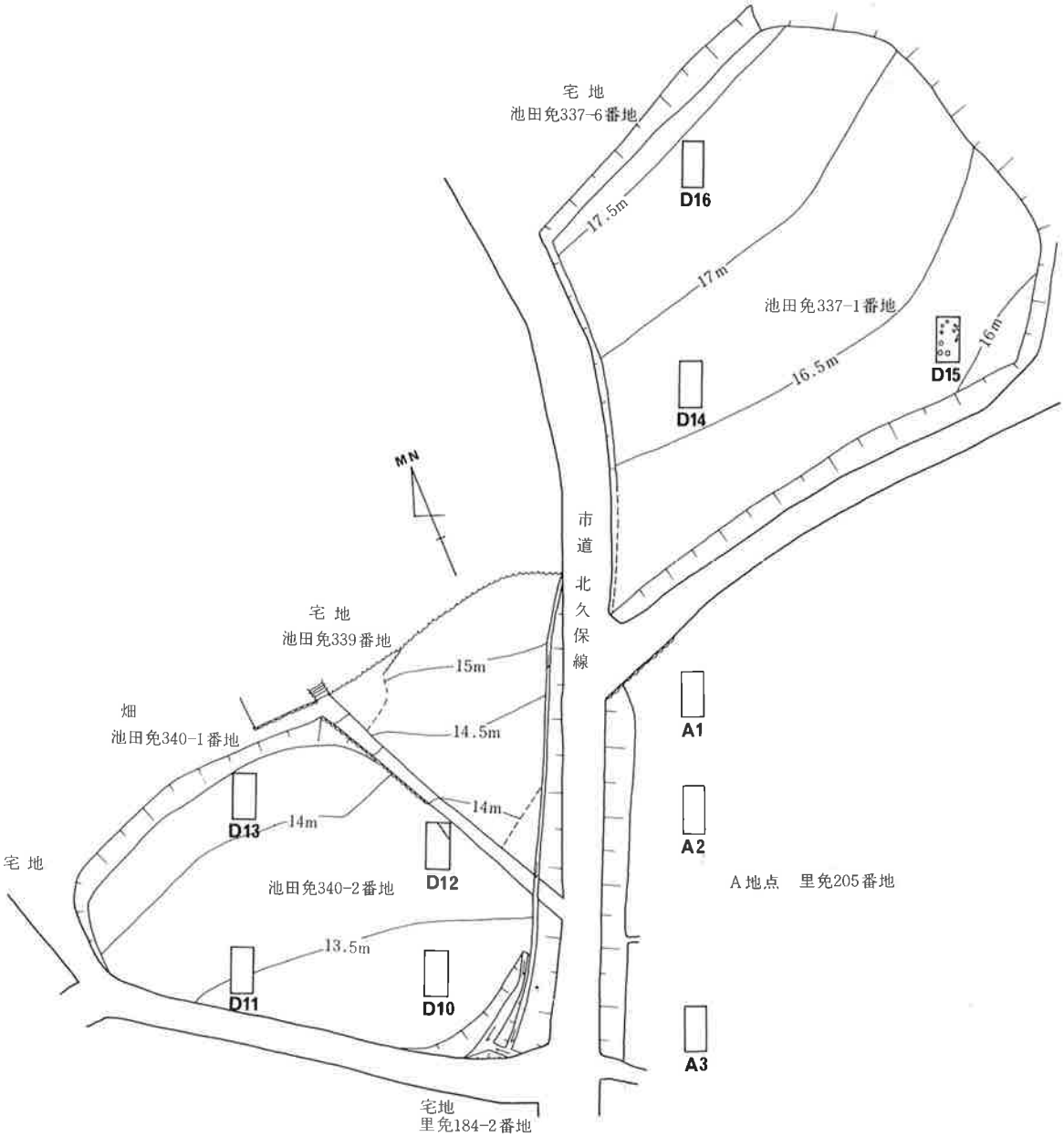
C 地点出土遺物



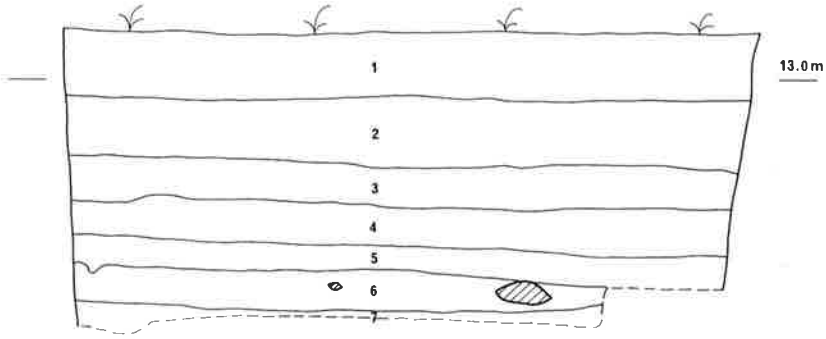
C 地点出土遺物

4．D地点の土層および遺構・遺物（第22図）

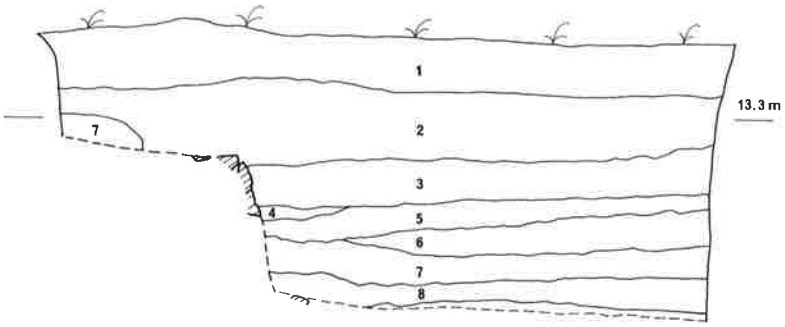
この地点は、市道北久保線をはさんでA地点の北側に3箇所、西側に4箇所を設定した。ここはA地点からの遺構の広がり・有無を確認することと、土層状況を確認することを主目的に行った。A地点の排水溝は10トレンチ東側を曲線を描きながら通っている。そのためもあってか、調査が深くなるにつれて10・11・12トレンチでは湧き水に悩まされ、思うように調査が進まず、地山までの確認ができず断念した。



第22図　池田遺跡D地点調査区設定図（$\frac{1}{600}$）



第23図　D10トレンチ東壁（$\frac{1}{40}$）



第24図　D12トレンチ東壁（$\frac{1}{40}$）

土　層（第23図・第24図）

A地点の北側に3箇所設定したトレンチは土層状況が良くないため、ここでは10・12トレンチについて説明を行う。1層は埋土で工事用の砂・バラスを含んでいる。2層は旧耕作土。3層・4層は茶褐色粘質土、5層は濁茶褐色土、6層は灰茶褐色土、7層は黒褐色土粘質土、8層は淡茶褐色土、9層は濁褐色粘質土層へとつづいている。土層堆積も北側から南へ緩く傾斜している。

遺　構（第25図・第26図）

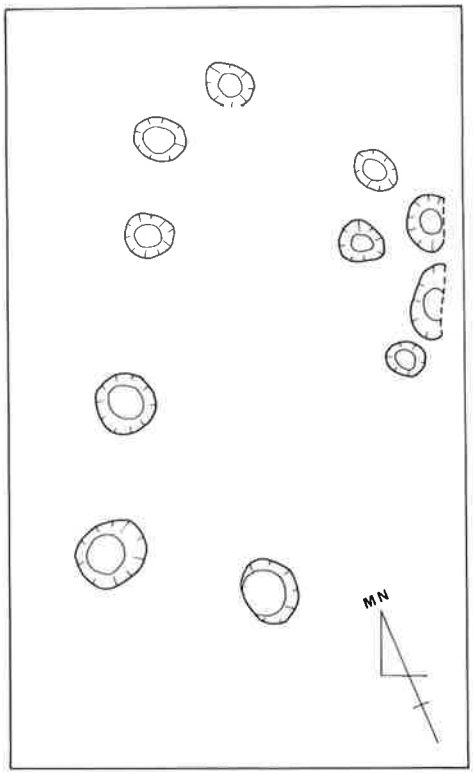
遺構としては少なく、15トレンチのピットと、12トレンチの石垣がある。15トレンチは表土層の下に埋土があり、その下に旧耕作土がある。土地所有者の話によると、畑地を水平にするため機械力をもって北側から土をもってきて、1枚の畑にしたとのことである。その下は地山の黄赤褐色玄武岩風化土層である。ピットはこの地山に掘り込んで検出できた。覆土は黒褐色であり、時期については不明である。

12トレンチの北側部分で石垣を検出した。7層の黒褐色粘質土の上に構築されており、黒褐色土内に礫はない。この黒褐色土は縄文晩期〜中世期の遺物が出土しており、石垣より北側の

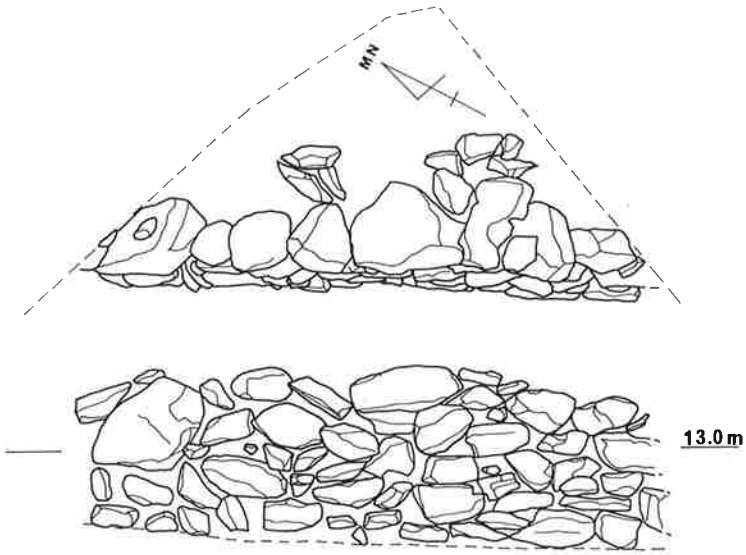
黒褐色土では土師器１点があった。一部黒褐色土が覆うように堆積しているため、時期的には中世以降が考えられる。この石垣は棚状になった畑の末端部の石垣であろうと思われる。

出土遺物

Ｄ地点からは約3,100点が出土している。その内訳は土師器約730点、弥生土器約720点、輸入陶磁器約350点、黒曜石製石核・剝片・砕片など約320点、須恵器約180点、中世陶器約140点、安山岩製石核・剝片・砕片など約130点、スラッグ約80点、縄文土器約40点、石鏃は３点であった。この地点では特に中世期の遺物が弥生期の遺物より多いことと、須恵器が他の地点よりも多いことが注目される。また縄文土器は10・12トレンチで出土し、11・13トレンチでは検出できなかったため、Ａ地点からの広がりはこのトレンチを西端としていることが確認できた。遺物の説明では石器の数が少ないため全体について説明を行う。



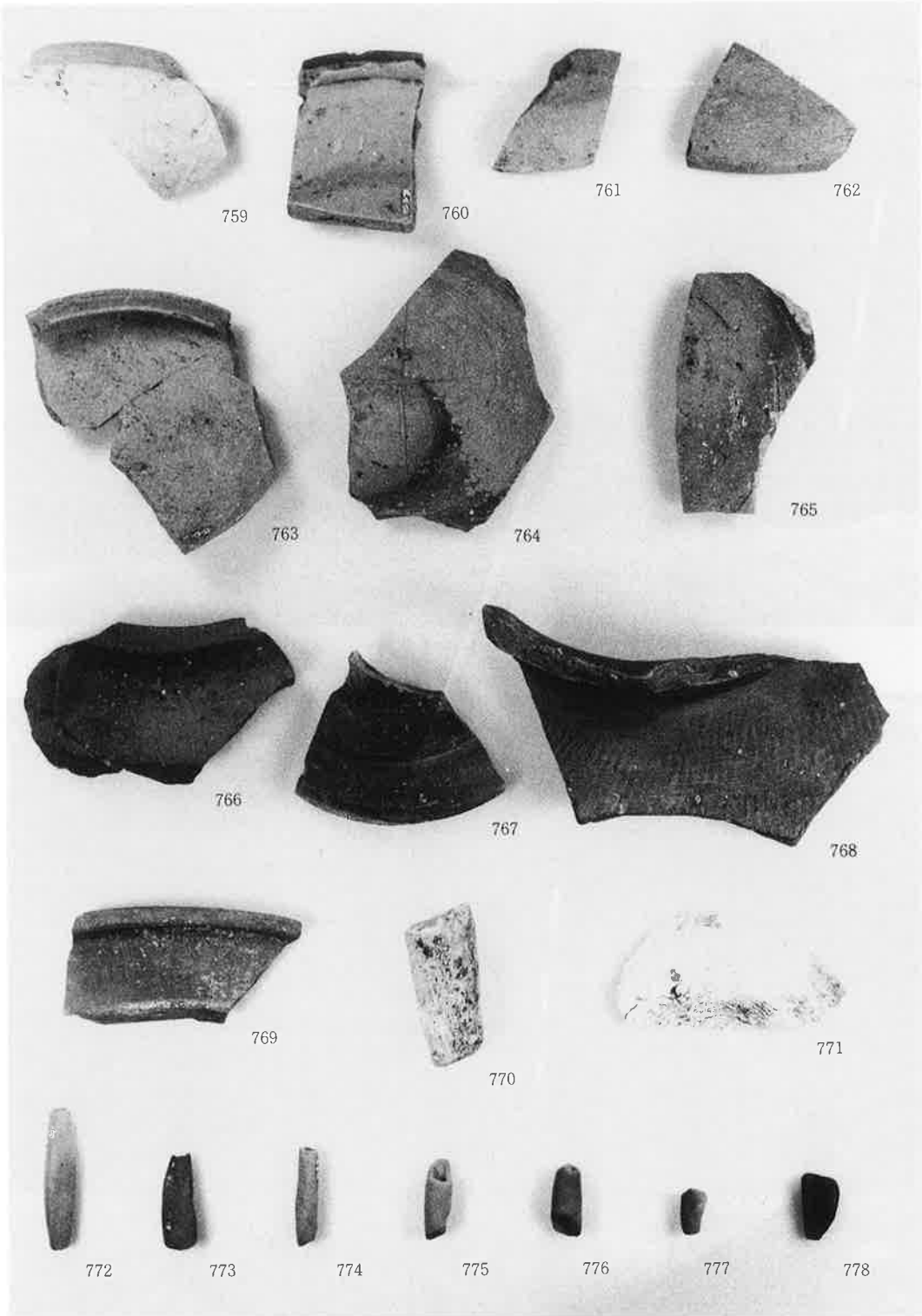
第25図　Ｄ15トレンチピット平面図（$\frac{1}{40}$）



第26図　Ｄ12トレンチ石垣図（$\frac{1}{20}$）

D 10 トレンチ東壁

D 12 トレンチ東壁


759
760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
770
771
772
773
774
775
776
777
778

D 地点出土遺物

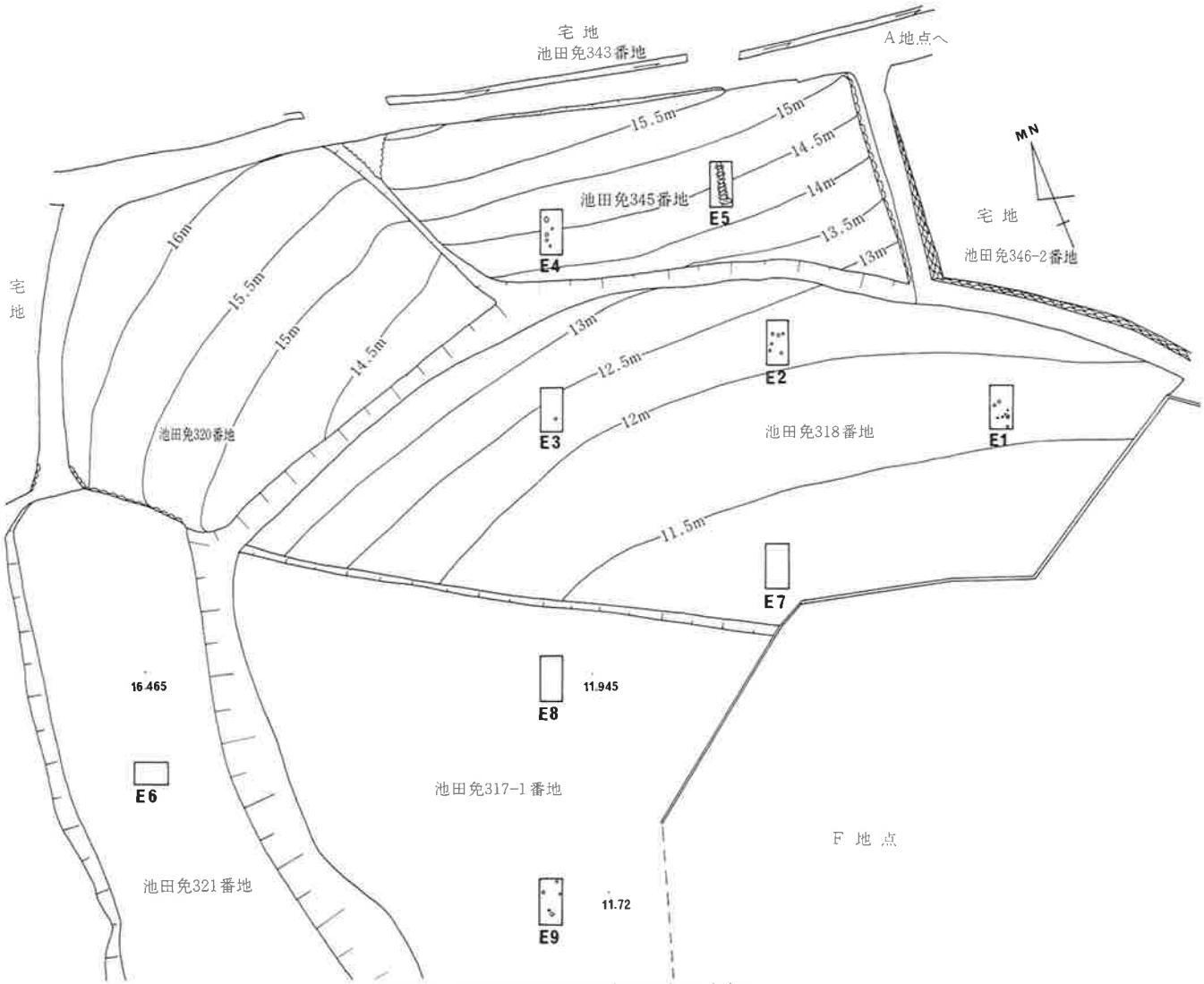
759～769は須恵器である。759・760・763は坏身で、761・762・764・765は坏蓋である。759・760は淡黄褐色・褐色を呈し「赤焼き」である。764は「×」のヘラ記号がある。766は短頸壺で非常に薄く仕上げている。767は高坏、768は大型甕で頸部から外反しながら口縁部に至る。外面は、平行タタキ、内面は同心円文である。769は口縁部のみの大型甕である。770～778は中世の遺物で、770は瓦質で支脚部分、771は糸切底をもつ土師器皿である。772～778は土錘である。779は縄文晩期浅鉢、783・784は刻目突帯文土器、786は弥生の壺形土器で山形の沈線がめぐる。788は弥生中期の逆L字状口縁である。790は高坏脚部、791～795は須恵器坏身である。立上りは1.3cm～1.5cmあり、端部は丸い。立上りと内傾斜面との境には稜がついていない。ⅢA期の資料で6世紀中葉に位置づけられる。795を除くすべてが10トレンチ出土である。このトレンチのみなぜ須恵器が多いのか検討する必要がある。また、12トレンチではスラッグが52点も出土している。科学分析を含め今後検討しなければならない。797・798は土師器、799は中世陶器、801・802は白磁の玉縁口縁で、802は小さい玉縁を有する。806～808・810は内面に2重～3重の圏線が描かれている粉青沙器である。811は対馬島産の石材を利用した石剣であろうか。812は石鍋の超小型製品の容器であろうか。814～816は滑石製品で、814・815は1～3個の穿孔がある。816は石鍋の口縁部である。

5．E地点の土層および遺構・遺物（第27図）

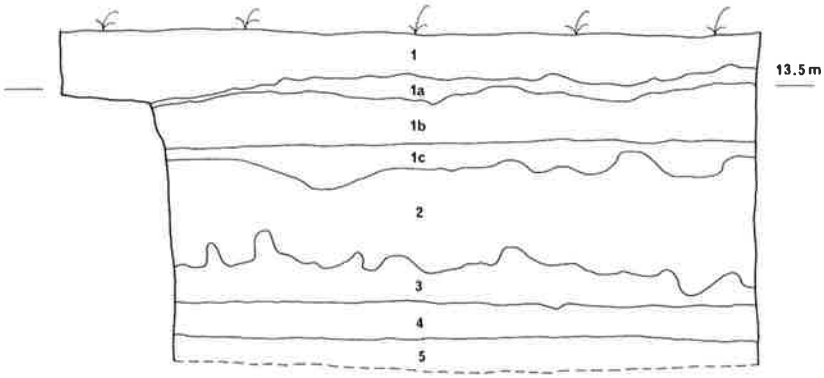
E地点は市道北久保線の西側で9箇所のトレンチを設定した。地形はF地点を囲むように擂鉢状を呈している。この地点では1・7・8トレンチのようにF地点に近い所では深さ1m～1.6m程になると湧き水が浸入してきて調査がはかどらなかったため調査を断念した。5～6トレンチでは深くまで耕作が行われているため、地山の直上まで攪乱されていた。ここは傾斜がやや急なため包含層があったとしても流れている可能性がある。また、5トレンチは地山の茶褐色玄武岩風化礫層を掘り込んで排水溝が1基検出されている。

土　層（第28図）

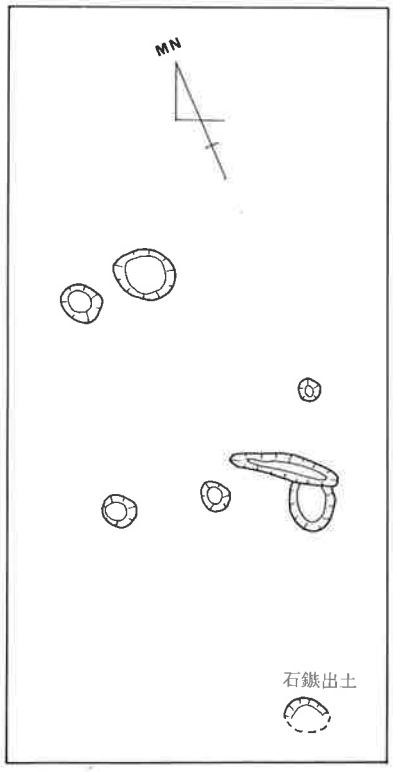
9箇所のトレンチのうち4トレンチを除くすべてのトレンチにおいては土層の耕作土の下には30cmから厚い所で1mの埋土および攪乱層が検出された。特に8トレンチでは、地表下約1.2mの2層まで近世の遺物が出土している。聞き取り調査でも機械力で整地したとのことであった。そのため遺物包含層である3層の上面はかなり複雑にカットされている。4層は茶褐色粘質土で、5層は暗茶褐色粘質土で、4層より粘性が強く、炭化物を含んでいる。湧き水によりこの層までで作業を中止した。遺物は3層から5層が中世期の包含層で弥生土器等が混入している。この層位は7トレンチでも同様に堆積していた。4トレンチは耕作土の下に茶褐色粘質土があり、暗茶褐色玄武岩風化礫層へとつづいている。



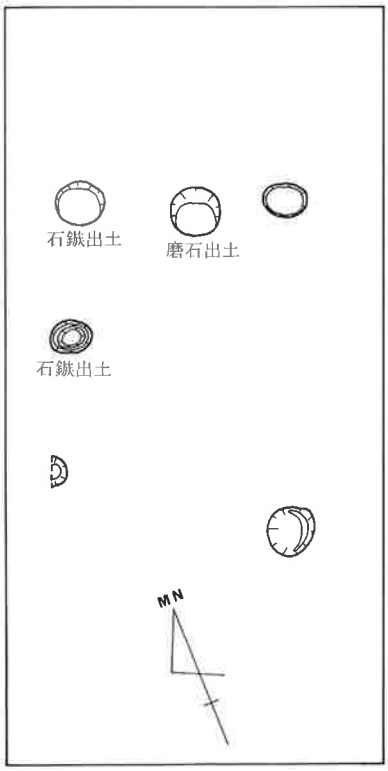
第27図　池田遺跡E地点調査区設定図（$\frac{1}{600}$）



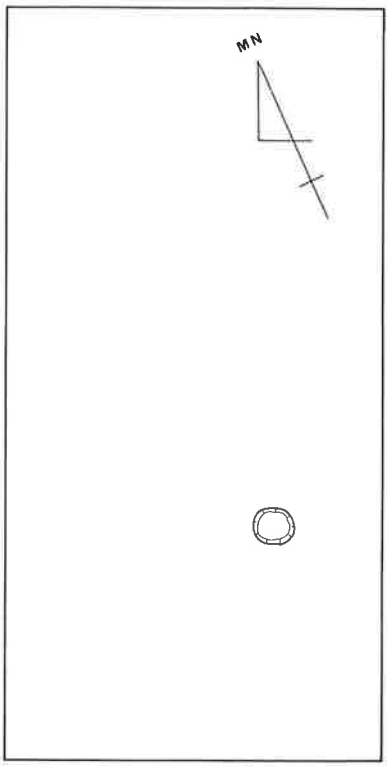
第28図　Ｅ８トレンチ東壁（$\frac{1}{40}$）



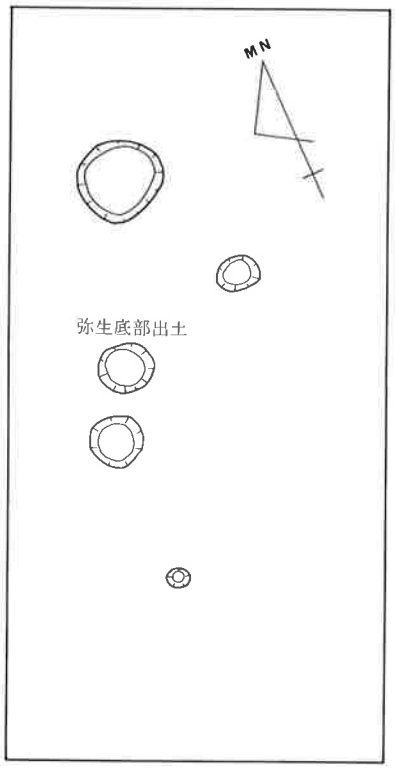
第29図　Ｅ１トレンチピット平面図（$\frac{1}{40}$）



第30図　Ｅ２トレンチピット平面図（$\frac{1}{40}$）



第31図　Ｅ３トレンチピット平面図（$\frac{1}{40}$）



第32図　Ｅ４トレンチピット平面図（$\frac{1}{40}$）

遺　構

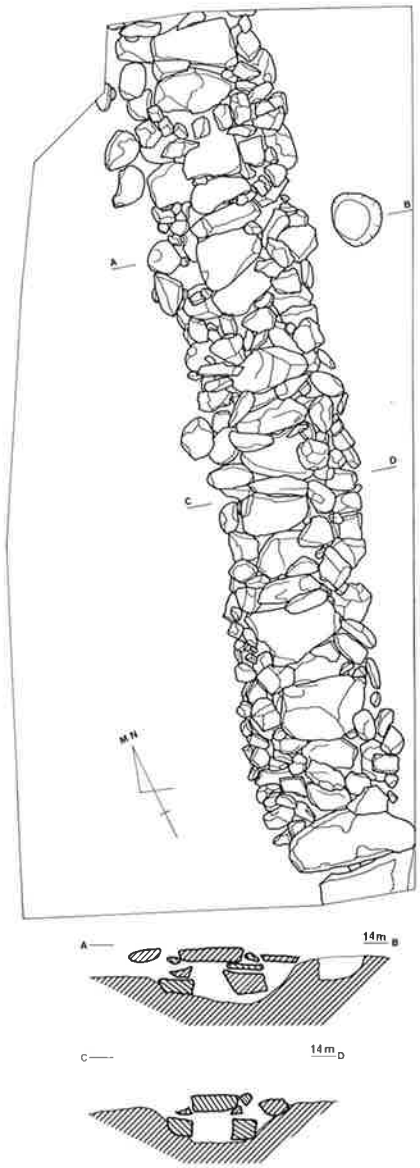
排水溝（第33図）

５トレンチの中央よりやや東側で排水溝を検出した。主軸は北よりやや東を向き約8°の勾配をもっている。構築方法はまず幅60cm、深さ15cmの溝（3.6m 検出）を掘りそこに方形の石の側面が垂直になるように幅15cmの間隔をおいて南北の方向に配石している。その配石の上を覆うように溝の幅よりやや大きい扁平な石を敷いている。そしてその両側にはくずれないように蓋石より小さい石でもって固めている。断面の観察では、古墳の石室を思わせる。この排水溝の時期であるが、聞き取り調査でも確認できなかったが溝の配石中にはさまって茶碗が１点出土している。伊万里染付碗で、口径約10cm、高さ5.2cm、底径約４cmで18世紀初頭～18世紀中頃に与えられる資料である。おそらくこれに近い時期にこの排水溝が築かれたと考えられる。

ピット（第29図～第32図）

ピットは１～４・９トレンチで検出できた。しかし、９トレンチでは茶褐色土の堆積がなく、ピット面まで攪乱されていたため、また、ピット内からも遺物が出土していないため時期は不明である。そのために図示しなかった。１～３トレンチのピットは弥生期のであろう。いずれ

も20cm～30cmの比較的小さなピットである。1トレンチのピットは2層のやや黒味を帯びた暗茶褐色粘質土から3層の黄茶褐色粘質土層に掘り込んでいた。2・3トレンチも同様で4層には褐色粘質土がある。4トレンチでは2層の茶褐色粘質土から地山層へ掘り込んでいた。このように確認調査ではピットは検出したが建物の復元までには至らなかった。今後は面的な調査において検討したいと思う。



第33図　E5トレンチ排水溝実測図（$\frac{1}{30}$）

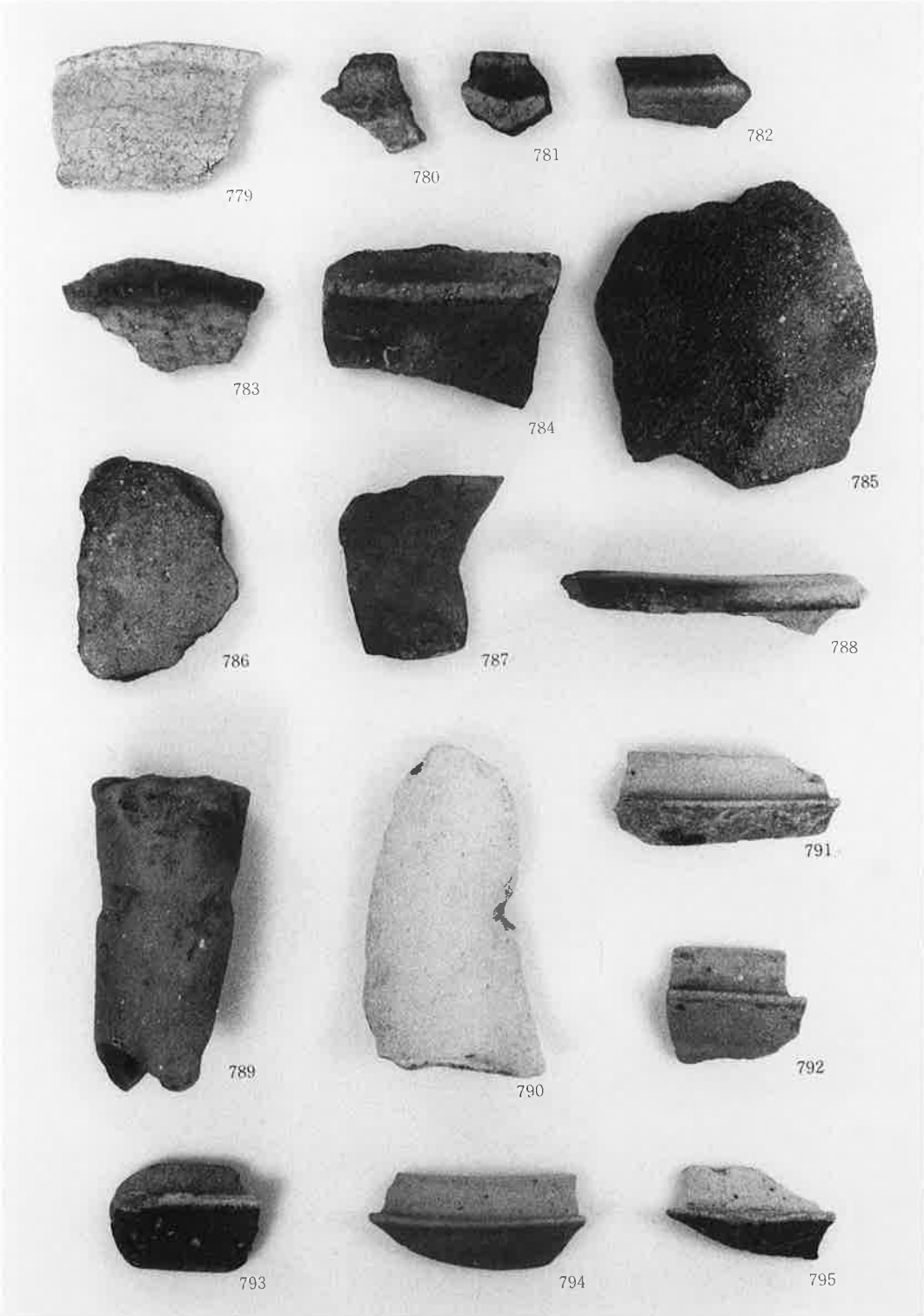
出土遺物

E地点からは約5,100点が出土している。その内訳は黒曜石製石核・剝片・砕片等約1,600点、弥生土器約1,500点、土師器約1,000点、安山岩製石核・剝片・砕片など約230点、輸入陶磁器約170点、石鏃35点などが出土している。中でも8トレンチから出土量の半分の2,500点程が、次に7トレンチで約850点が出土している。この地点では特に土器に関しては細片が多かった。ここでは遺物の説明は全体を含めて行いたいと思う。

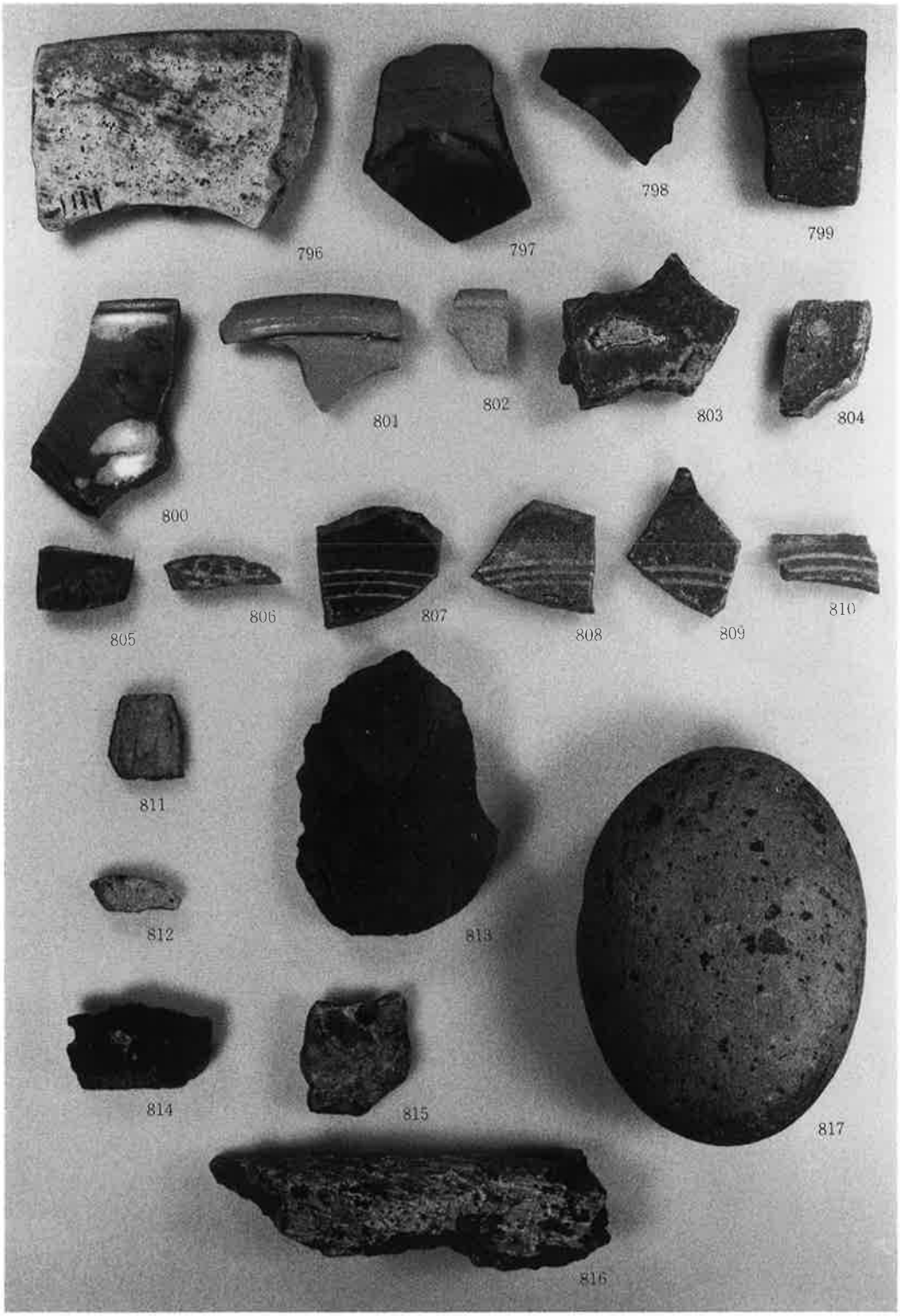
石鏃は基部の抉りが浅く、ゆるい孤状を描く資料が多い。他に基部が直線状を呈するもの、基部が丸くなるものに大別できる。780～782は縄文晩期の資料である。785はハケ目調整をしている弥生土器胴部片である。787は口縁部が外反する甕形土器である。789は高坏の坏部分で赤褐色を呈している。796は瓦質の擂鉢口縁部である。灰白色を呈している。803は李朝青磁で見込みと高台に砂目跡が残っている。809は2重圏線の白象嵌がある粉青沙器である。800・805は4・5トレンチがある畑の表採品である。800は内面に飛雲文を有する青磁碗、805は外面に花文が白象嵌されている李朝粉青沙器である。その他の表採品ではバレン状滑石製品の未製品、滑石製石鍋片、土錘もある。813は安山岩製スクレイパーである。817は2トレンチピット内出土の磨石である。

E 8 トレンチ東壁

E 5 トレンチ排水溝


779
780
781
782
783
784
785
786
787
788
789
790
791
792
793
794
795

D・E地点出土遺物


796
797
798
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
809
810
811
812
813
814
815
816
817

D・E地点出土遺物

Ⅳ　ま　と　め

池田遺跡は、昭和63年度・平成元年度の文化財保存事業として２ヶ年計画で実施した範囲確認調査である。調査は、厳寒の時も、風雨・炎天下の蒸し風呂のような悪条件下でも、調査員作業員とも一致協力し、和気あいあいのうちに極めてスムーズに当初の予定地内を終了することができました。

調査の結果、従来から知られている池田遺跡の範囲よりもかなり広範囲に分布していることが確認できたが、遺物の量も膨大な点数にのぼり洗浄・ナンバーリング等の初期の作業が終了したのは１月に入ってからであった。このため整理期間不足により図録の体裁を取らざるを得なかった。また、自然遺物の獣骨・魚骨類については全く手つかずの状態であり、近い将来に同定について専門家に協力をお願いしたいと思っている。

本遺跡の範囲は、調査範囲を検討し、東西約280m、南北約60mの孤状を描く範囲として把えた。東限は甕棺が検出されたＣ18トレンチ付近で、西限はＥ９トレンチ付近、北限はＤ15トレンチ付近までが考えられる。本遺跡は、出土遺物・検出遺構から大きく分けると５つの時期を中心としている。まず縄文時代後期から晩期を中心とする時期で、A2・5、B8トレンチ付近の狭い範囲に分布している。次に弥生時代前期中葉を中心とする時期でＡ・Ｂ両地点に分布する。次に弥生時代中期前葉から後葉の時期で最盛期を迎え、弥生時代後期には急激に衰亡したと考えられる。次に６世紀代の古墳時代を中心とする時期で、狭い範囲ではあるがＤ10トレンチ周辺に分布している。最後には中世の時期で、Ｂ・Ｅ地点を中心に遺跡全体に分布している。本遺跡が弥生時代中心であることは勿論、中世の時期でも重要な遺跡であることには変わらない。

いずれにしても池田遺跡は、縄文時代から中世に至るまで、生活の場・舞台が海に依存していたことが十分考えられるのである。

このように２ヶ年におよぶ調査で概ね範囲も確認することができ、多くの成果を得ることができたが、また一方で多くの課題が残された調査でもあった。調査はほんの一部にすぎなかったが、地下にはまだ遺構等が存在していると思われるため、今後の開発にあたっては十分に調整を図り、遺跡の保護と活用を考えていくことが必要であろう。

最後に今後に残された課題として、次の諸点を指摘して結びとしたい。

① 出土遺物の中に良好な旧石器の資料があり、開地遺跡としての確認が必要である。

② 縄文時代前期・中期では、遺物包含層を確認する必要がある。

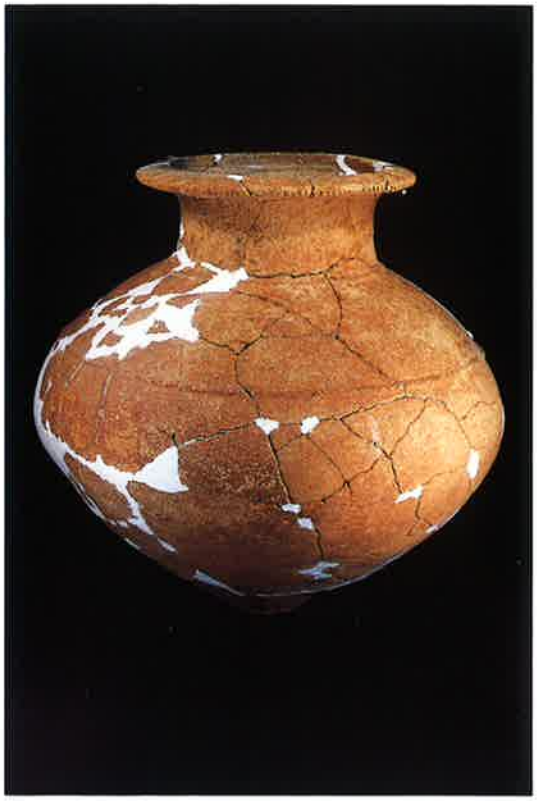
③ 縄文時代晩期、および弥生時代では、集落跡に伴う水田跡の有無の確認がある。

④ 甕棺墓、石棺墓等の埋葬遺構と貝塚等の生活遺構等との関連・実態の解明が必要である。

⑤ 不明な点が多い古墳時代では、近接する貴船神社古墳との関係を把握する必要がある。

⑥ 12世紀～14世紀における集落跡の実態を解明する必要がある。

松浦市文化財調査報告書 第6集

池 田 遺 跡

発行　長崎県松浦市志佐町里免365番地
松浦市教育委員会
印刷　隆　文　社
佐世保市瀬戸越3丁目4-7